佐賀県文化財調査報告書第61集

川寄吉原遺跡

佐賀県神埼郡神埼町大字竹所在遺跡の調査

1981

佐賀県教育委員会

かわ　より　よし　わら

川寄吉原遺跡

佐賀県神埼郡神埼町大字竹所在遺跡の調査

1981

佐賀県教育委員会

序

この報告書は佐賀東部地区圃場整備事業の施行に先がけまして、国庫補助金を受け実施しました神埼町大字竹に所在します川寄吉原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告であります。

川寄吉原遺跡は弥生時代の集落跡で、掘立柱建物跡、井戸跡など内容のある遺構が検出されました。又建物跡の柱穴や井戸跡からは豊富な遺物が出土しました。特に鍬や鎌の柄などの木製品や武人像の線刻文様を持つ鐸形土製品など、その内容は見るべきものがあります。

なお調査に際しまして御指導、御協力をいただいた文化庁、県農林部、並びに地元の関係各位に対しまして感謝申し上げます。

おわりに本書が埋蔵文化財に対する理解と古代史の解明に少しでも役立つならば幸甚であります。

昭和56年3月31日

佐賀県教育委員会

教育長　古　藤　　浩

例　　言

1　本書は圃場整備事業に伴い、発掘調査を実施した川寄吉原遺跡の報告書である。

2　発掘調査は国庫補助を受け、佐賀県教育委員会がこれにあたった。

3　本書の執筆はⅡ2(4)の木器を福田京子が、他は天本洋一があたった。

4　遺構の実測は主に調査員、調査補助員が、遺物の復元作業は樋口菅子、中村美千代、梅野澄子、三好文子、古賀安子、永池早苗、宮崎礼子が、遺物の実測は土器、石器を古賀啓子、中島真由美、西村信子が、木器を福田、西村が、製図は高瀬久美子、馬場悦子、野口悦子、天本がおこなった。又遺構、遺物の写真は原口定、天本がおこなった。

5　編集は天本が担当した。

凡　　例

1　遺構については一連番号を付し、その前にＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸の分類記号を用いた。

2　本文中に用いた方位はすべて磁北である。

3　遺構実測図の標高は第７、９、11、14図が8.0m、他は7.5mである。

4　遺構実測図番号と図版遺物番号は同一である。

本　文　目　次

Ⅰ　序　説

1　発掘調査の経過……1

(1)　調査に至る経過……1

(2)　調査の組織……1

2　遺跡の立地と環境……1

(1)　自然的環境……1

(2)　歴史的環境……2

Ⅱ　川寄吉原遺跡の遺構と遺物 ……4

1　遺　構……4

(1)　遺跡の概要……4

(2)　掘立柱建物跡……4

(3)　円形周溝……18

(4)　溝　跡……18

(5)　井戸跡……19

(6)　その他の遺構……21

2　遺　物……21

(1)　土　器……21

(2)　鐸型土製品……44

(3)　石　器……45

(4)　木製品……47

Ⅲ　総　括 ……54

挿　図　目　次

第１図　川寄吉原遺跡周辺遺跡分布図……3
第２図　川寄遺跡群調査区配置図……5
第３図　ＳＢ001.002掘立柱建物跡実測図……6
第４図　ＳＢ003掘立柱建物跡実測図……7
第５図　ＳＢ004掘立柱建物跡実測図……7
第６図　ＳＢ005.006掘立柱建物跡実測図……8
第７図　ＳＢ007掘立柱建物跡実測図……9
第８図　ＳＢ008.009掘立柱建物跡実測図……10
第９図　ＳＢ010.011掘立柱建物跡実測図……11
第10図　ＳＢ012掘立柱建物跡実測図……12
第11図　ＳＢ013掘立柱建物跡実測図……13
第12図　ＳＢ014.015.016掘立柱建物跡実測図……15
第13図　ＳＢ017.018.019掘立柱建物跡実測図……17
第14図　円形周溝実測図……18
第15図　井戸実測図……20
第16図　柱穴内出土土器実測図……23
第17図　溝跡出土土器実測図……25
第18図　ＳＥ001.002井戸出土土器実測図……27
第19図　ＳＥ003井戸出土土器実測図……29
第20図　ＳＥ004井戸出土土器実測図……31
第21図　ＳＥ004井戸出土土器実測図……32
第22図　ＳＥ005井戸出土土器実測図……34
第23図　ＳＥ007井戸出土土器実測図……35
第24図　ＳＥ007井戸出土土器実測図……37
第25図　ＳＥ008井戸出土土器実測図……38
第26図　Ｂ～Ｃ間黒褐色泥質土内出土土器実測図……40
第27図　Ｂ～Ｃ間黒褐色泥質土内出土土器実測図……41
第28図　Ｂ～Ｃ間黒褐色泥質土内出土土器実測図……43
第29図　鐸型土製品実測図……45
第30図　石包丁、石斧実測図……46

第31図　SE007井戸出土木器実測図……48
第32図　柱材据付状態及び柱根、横木分類図……50
第33図　柱根、横木実測図……51
第34図　柱根、横木実測図……52
第35図　柱根、横木実測図……53
第36図　川寄吉原遺跡遺構配置図……61

図　版　目　次

本文対称頁

図版1　1 川寄吉原遺跡航空写真……1
　　2 川寄吉原遺跡近景（南側から）……1
図版2　1 川寄吉原遺跡全景（西側から）……4
　　2 川寄吉原遺跡全景（東側から）……4
図版3　1 掘立柱建物跡近景……4
　　2 SB001.002掘立柱建物跡……4
図版4　1 SB003掘立柱建物跡……6
　　2 SB004掘立柱建物跡……8
図版5　1 SB005.006掘立柱建物跡……8
　　2 SB008.009掘立柱建物跡……9
図版6　1 SB012掘立柱建物跡……13
　　2 SB015.016掘立柱建物跡……14
図版7　1 SB015.016掘立柱建物跡……14
　　2 SB017掘立柱建物跡……14
図版8　1～8 掘立柱建物柱穴……6
図版9　1～8 掘立柱建物柱穴……13
図版10　1～8 掘立柱建物柱穴……14
図版11　1～8 掘立柱建物柱穴……14
図版12　1～8 掘立柱建物柱穴……14
図版13　1～8 SE001～ 008井戸……19
図版14　1 円形周溝……18
　　2 B～C間落込み状態……21

図版15　SE001～ 003井戸出土土器……26
図版16　SE003.004井戸出土土器……28
図版17　SE004.005井戸出土土器……30
図版18　SE007井戸出土土器……33
図版19　SE007.008井戸出土土器……36
図版20　溝跡、B～C間黒褐色泥質土内出土土器……39
図版21　B～C間黒褐色泥質土内出土土器……39
図版22　B～C間黒褐色泥質土内出土土器……39
図版23　1 鐸型土製品……44
　　2 石包丁……45
図版24　1 石斧……46
　　2～5 SE007井戸出土木製品……47
図版25　1～6 柱根、横木……49
図版26　1～4 柱根、横木……49
図版27　1～3 柱根、横木……49
図版28　1～4 柱根、横木、枕木……49

表　目　次

第1表　井戸一覧表……19
第2表　掘立柱建物跡計測表……57
第3表　柱根、横木計測表……59

Ⅰ　序　説

1　発掘調査の経過

(1)　調査に至る経過

神埼郡神埼町大字竹一帯の水田約 110haが、1978年度県営圃場整備事業地区として計画された。このため1978年３月～６月にかけて圃場整備事業計画地域内の文化財確認調査を行った。この結果、遺跡の広がりは川寄、野田、利田、伏部の各集落を中心に広がり、遺跡の総面積は当初予想されていた遺跡の範囲を大幅に上まわる約40haとなった。このため農林部と文化財保護について協議を行い、遺跡が削平される部分については盛土工法で行う。遺跡内を通る水路については設計変更を考えることとなった。しかし盛土工法で対処できない部分や、変更のできない水路部分約18,000㎡については発掘調査を行うこととなった。

遺跡は竹地区の川寄、野田、利田、伏部の各集落を囲むように広がり、各遺跡の広がり毎に川寄遺跡群、野田遺跡群、利田遺跡群、伏部遺跡群と呼称している。さらに川寄遺跡群は川寄の集落を中心に東側、南側に広がる川寄若宮遺跡と、川寄若宮遺跡(注1)の南側 300m に位置する川寄吉原遺跡とに分かれる。今回はこの川寄吉原遺跡についての報告である。

(2)　調査の組織

担当　　佐賀県教育委員会

事務局　佐賀県教育庁文化課

調査主任　木下巧　　文化課文化財調査第２係長

調査員　　中島弘之　　〃　文化財調査第２係

〃　　天本洋一　　〃　　〃

〃　　多々良友博　〃　　〃

調査補助員熊谷邦巨

調査協力　県農林部　中部農林事務所　神埼町教育委員会、神埼町土地改良課、川寄区、利田区、松尾建設

2　遺跡の立地と環境

(1)　自然的環境

神埼町は佐賀県の東部に位置し、東は田手川を隔て三田川町に、西は佐賀市と接している。北は脊振山地が東西に連なり、この南には土器山、日ノ隈山、早稲隈山などの小高い山々が山麓を形成している。一方南は広大な佐賀平野が広がり、さらに有明海に面している。

佐賀平野の東部は脊振山地の南麓より吉野ケ里丘陵、横田丘陵などの洪積台地が南へ舌状に延びているが、中央部は嘉瀬川、城原川などの河川により形成された扇状地が複合している。川寄吉原遺跡は佐賀平野の東寄りに位置し、城原川水系の形成した扇状地の扇央部にあたり、標高は８ｍ程である。この地域は肥沃な稲作地帯である。

(2) 歴史的環境

神埼町の縄文時代の顕著な遺跡は知られておらず押型文土器が城原、日ノ隈西方などから、また阿高式土器が岩田より、御領式土器が朝日西南より採集されているにすぎない。

ところが弥生時代の遺跡は多く、広範囲に広がっているものが多い。集落跡として代表的な遺跡は川寄遺跡群[2]、吉野ケ里丘陵遺跡[19]、荒堅目貝塚[30]がある。荒堅目貝塚は当地方で逸速く注目された遺跡である。馬場川と田手川により形成された自然堤防上にある弥生時代前期を主とする遺跡で、石剣、石包丁、把頭飾などを出している。

埋葬遺跡は四本黒木遺跡[15]（注２）、利田柳遺跡[3]（注３）、二子甕棺遺跡[16]などがあり、甕棺墓の遺跡が多いこともこの地方の特色である。四本黒木遺跡は弥生時代前期を主とした遺跡で、昭和51、54年の調査で甕棺墓 107、土拡墓25、箱式石棺墓３などが検出された。又利田柳遺跡は昭和54年度の調査で甕棺墓49、土拡墓５、祭礼遺構などを出土した。

古墳時代に入ると神埼地方も多くの古墳が築かれた。最古期の古墳として知られるのは日ノ隈寮西側古墳があり、小規模の竪穴式石室を内部主体とする。また朝日古墳[22]は碧玉岩製石釧一個、変形四獣彷製鏡一面を出土した。

前方後円墳は伊勢塚古墳[21]、丸山前方後円墳[14]、二子前方後円墳[11]がある。伊勢塚は全長78.7ｍと県内でも屈指の前方後円墳で、後円部に花崗岩の巨石で構築された長さ約12ｍの横穴式石室が開口している。古墳時代も終りになると群集墳が山麓一帯に築かれる。これらは小規模の横穴式石室を内部主体とするもので、天神尾古墳群[26]、猿岳古墳群[25]は著名である。

飛鳥～奈良時代になると天童山（帯隈山）[27]神籠石が築かれる。これは佐賀市の帯隈山より、神埼町の天童山にかけ列石を巡らすもので山城跡とされる。条里は平野部全域にわたり施行されたと見られ、石井ケ里、田手ケ里、平ケ里などの遺名が残っている。

註１　岩永政博編「利田柳遺跡Ⅲ区」神埼町教育委員会1980の「１調査の経過」にくわしい。

註２「四本黒木遺跡発掘調査報告書」佐賀県教育委員会1977

註３　註１と同じ

参　考　文　献

佐賀県史編纂委員会「佐賀県史」上巻1978

神埼町史編纂委員会「神埼町史」1972

松尾禎作「佐賀県考古大観」1957　祐徳博物館

第1図　川寄吉原遺跡周辺遺跡分布図

1川寄吉原遺跡	2川寄若宮遺跡	3利田遺跡群	4野田遺跡	5野田西遺跡
6こだかじま遺跡	7伏部大石遺跡	8尾崎士生遺跡	9尾崎西分遺跡	10尾崎利田遺跡
11二子前方後円墳	12熊谷遺跡	13原の前遺跡	14丸山前方後円墳	15四本黒木遺跡
16二子甕棺遺跡	17日ノ隈山塚跡	18馬郡遺跡	19吉野ケ里丘陵遺跡	20下三津古墳
21伊勢塚古墳	22朝日古墳群	23城山古墳群	24勢福寺城跡	25猿獄古墳群
26天神尾古墳群	27帯隈山神籠石	28横武城跡	29姉川城跡	30荒堅目貝塚

Ⅱ　川寄吉原遺跡の遺構と遺物

1　遺　構

(1)　遺跡の概要

川寄吉原遺跡が所存する神埼町大字竹一帯は、城原川水系により形成された扇状地上にある。圃場整備事業が計画された時点でのこの地域の遺跡は、川寄、利田部落の周囲に遺物散布地、甕棺墓が数ケ所点在する程度であった。しかし圃場整備事業に伴う事前の確認調査で、圃場整備予定面積の３割強の約40haが弥生時代～鎌倉時代の遺跡が所在することが確認され、この竹地区一帯は原始、古代において神埼地方の中心的な位置を示していたことを伺わせた。

竹地区内の遺跡群の一つ川寄遺跡群は川寄若宮遺跡と川寄吉原遺跡とに分かれる。川寄吉原遺跡は川寄集落の南方300m の所に位置している。遺跡の広がりは東西80m 、南北50m の約4,000㎡である。

今回の調査は川寄吉原遺跡の南端を幅８ｍの支線排水路が東西に通ることとなったため、この水路部分について行った。調査は便宜上東端より８ｍ幅の方眼を組み、西からＡ、Ｂ、Ｃ～Ｌと調査区を設定した。検出された遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、円形周溝、溝跡がある。

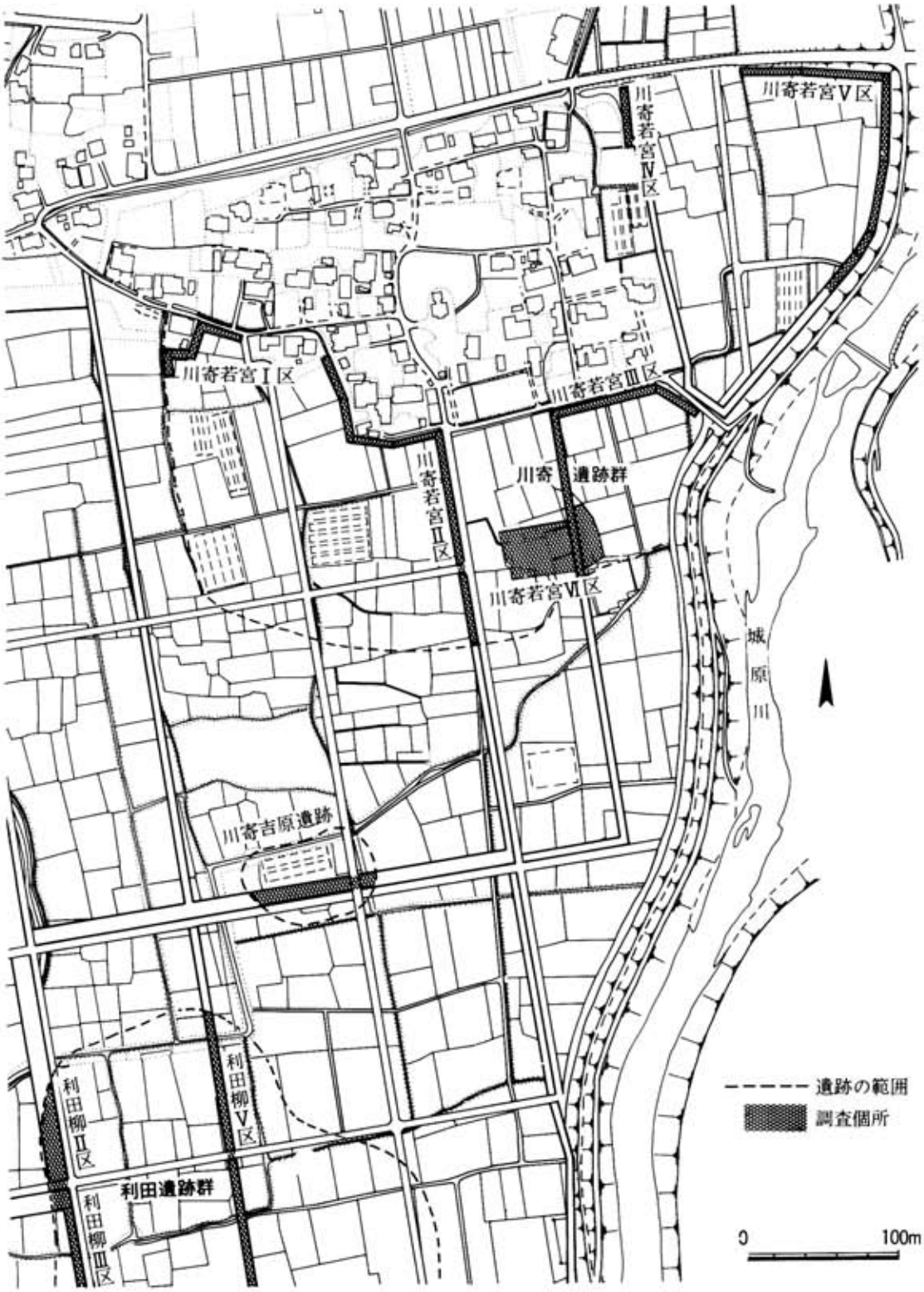
(2)　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は19棟を検出した。この他にも組み合わすことができない柱穴が20ケ所以上あり、建物はさらに増えると見られる。建物の規模は３間×２間の建物が１棟、２間×１間の建物が３棟、１間×１間の建物が15棟である。調査範囲が幅８ｍと限られており、建物の桁行、梁行はさらに南北方向に延びることも考えられる。建物の方向は一定せず、統一性は見られないが、桁行方向をほぼ南北に向ける建物が16棟、東西に向ける建物が３棟である。又建物配置は１間×１間の建物が調査区の両端に多く、３間×２間、2間×１間の建物は中央に位置している。

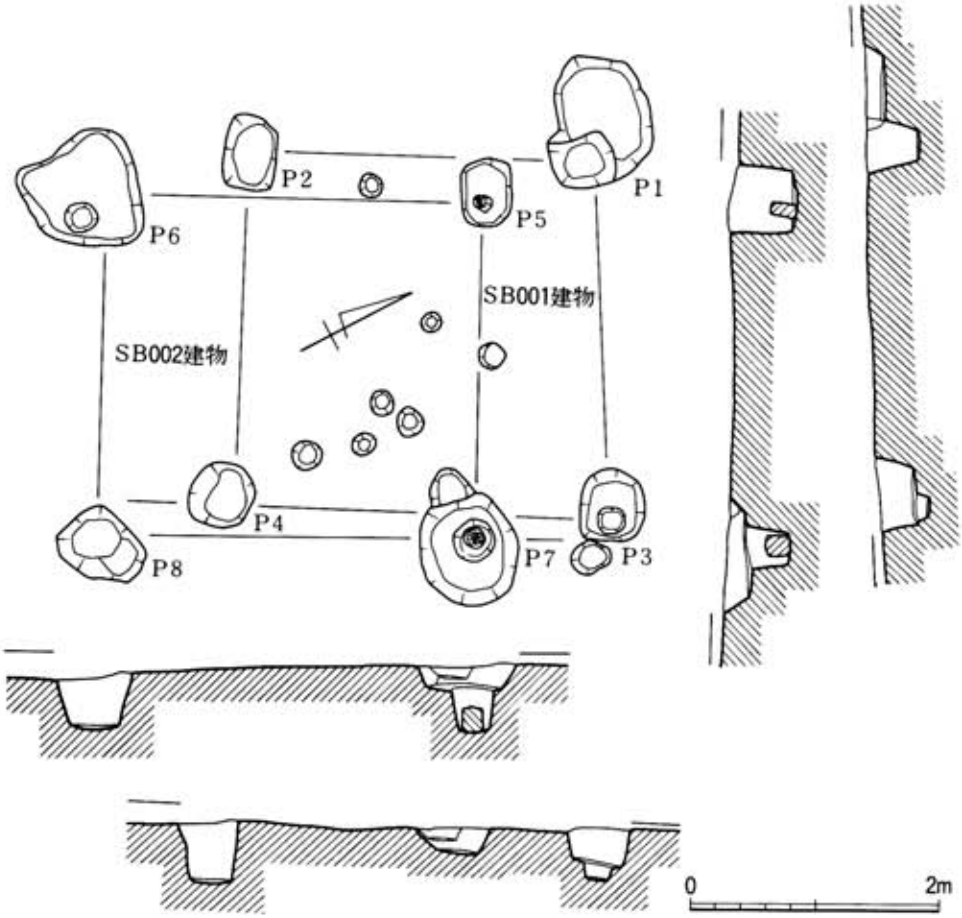
柱穴の約７割には柱根や横木が残っている。柱根は丸太をそのまま用いるものもあるが、柱の表面をノミで丹念に削り面取りを行なっているものが多い。又柱はそのまま使用するものと、下面にくり込みをつくり横木を渡し支えるもの。さらに横木の下に枕木を敷き柱の沈下を防いだものがある。柱穴内からは弥生土器片が出土したが、この他にＰ86からは表面に武人像の線刻をもつ鐸型土製品が、Ｐ15からは石包丁が出土した。

ＳＢ001掘立柱建物跡（第３図）

調査区の西側、Ｄ～Ｅ間に位置する。ＳＢ002掘立柱建物跡と重複するが柱穴の切合いはない。１間×１間の建物で桁行方向をＮ29°Ｅにとる。柱間の長さは桁行間3.0m 、梁行間2.85m であるが、東側の桁行は2.75m と短く台形に近い。柱穴の大きさは長さ0.58～ 0.5m 、幅0.52～ 0.4m 、深さ0.46～0.41m の不正円形である。



第２図　川寄遺跡群調査区配置図



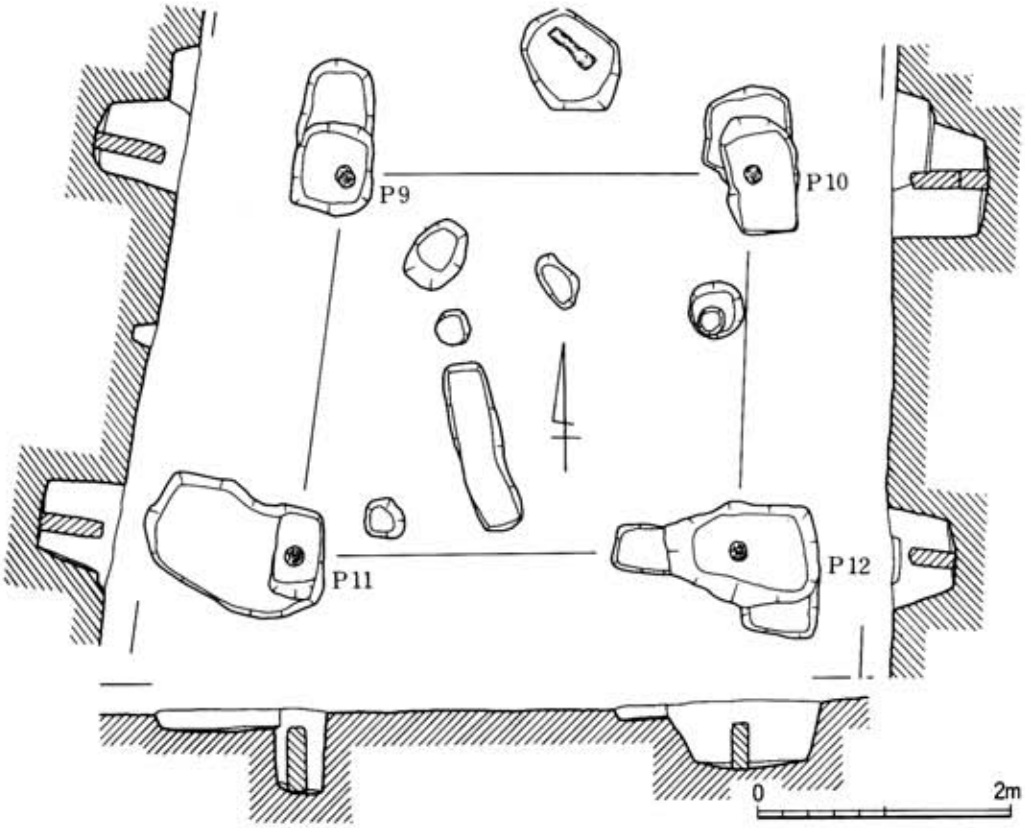
第３図　SB001.002掘立柱建物跡実測図

SB002掘立柱建物跡（第３図）

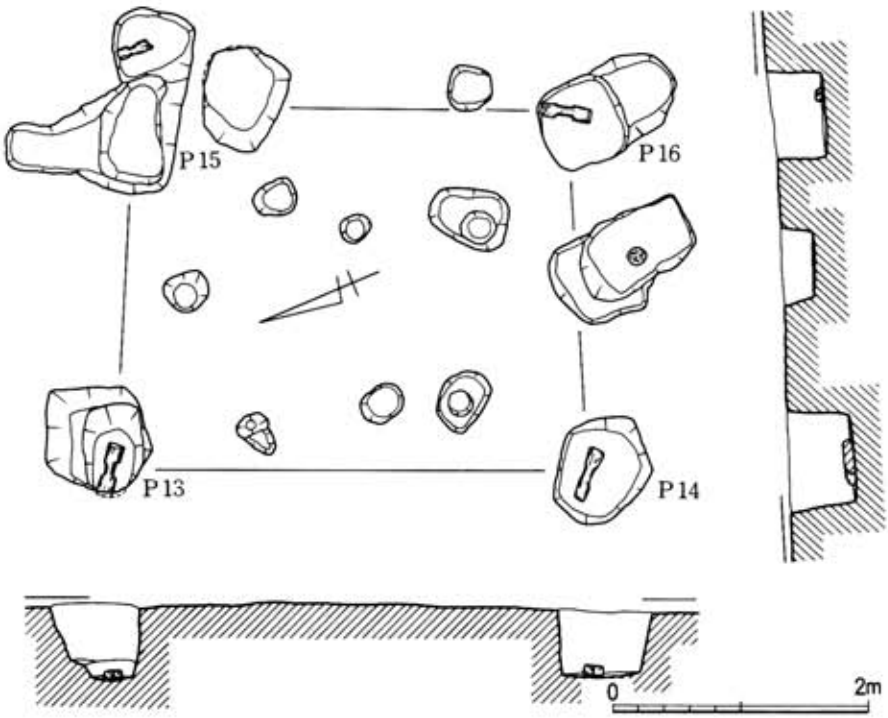
１間×１間の建物で桁行方向をN28°Eにとる。柱間の長さは桁行間3.0m、梁行間2.68mの長方形である。柱穴の掘立は不正円形でＰ５、Ｐ８はSB001掘立柱建物跡と変らないが、Ｐ６、Ｐ７は大きく長さ0.95～0.89m、幅0.91～0.78m、深さ0.52～0.38mである。Ｐ５、Ｐ７には柱根がわずかに残っている。

SB003掘立柱建物跡（第４図）

E_1に位置する。１間×１間の建物であるが、調査区外の南側へ延びることも考えられる。桁行方向はN89°Eをとり、柱間の長さは桁行間3.54m、梁行間2.97mを測る。柱の配置は菱形に近く、∠Ｐ９、Ｐ11、Ｐ12の角度は82.5°である。柱穴の掘方は隅丸長方形で、長さ1.2～0.72m、幅0.8～0.4m、深さ0.73～0.55mである。掘方の一方には深さ0.3～0.1mの別の掘方が重複しており、建て替えたことも考えられる。いづれの柱穴にも柱根が残っている。柱根は直径15cm程の丸太材を用いている。



第4図　SB003掘立柱建物跡実測図



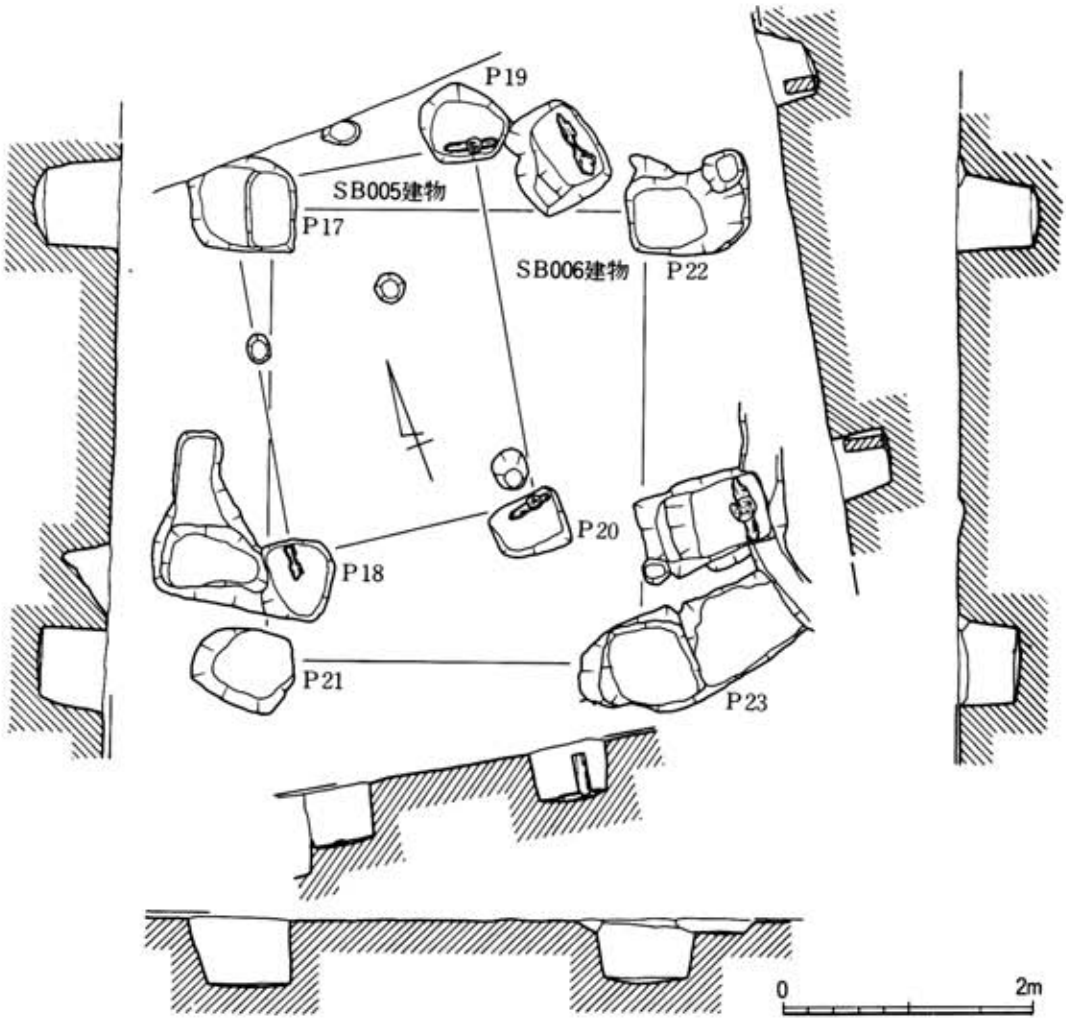
第5図　SB004掘立柱建物跡実測図

SB004掘立柱建物跡（第５図）

Ｅ～Ｆ間に位置する。１間×１間の建物で桁行方向をN23°Eにとる。柱間の長さは西側の桁行間3.76m、東側の桁行間3.45m、梁行間2.83mと東側の桁行が短く、平面は台形に近い。柱穴の掘方は隅丸方形で、長さ1.12～ 0.8m、幅0.78～0.65m、深さ0.67～0.46mである。柱穴のP13、P14、P16には横木が残っている。桁行に対する横木の方向は一定しておらず、P13、P14は直角に、P16は平行して据えている。横木は直径12cm程の丸太材を半截し、柱を載せる部分に抉りを入れている。

SB005掘立柱建物跡（第６図）

Ｅ～Ｆ間に位置する。SB006掘立柱建物跡と重複し、P17柱穴を共有するが建物の前後関係はわからなかった。１間×１間の建物で桁行方向をN11°Eにとる。柱間の長さは桁行間2.87m、



第６図　SB005.006掘立柱建物跡実測図

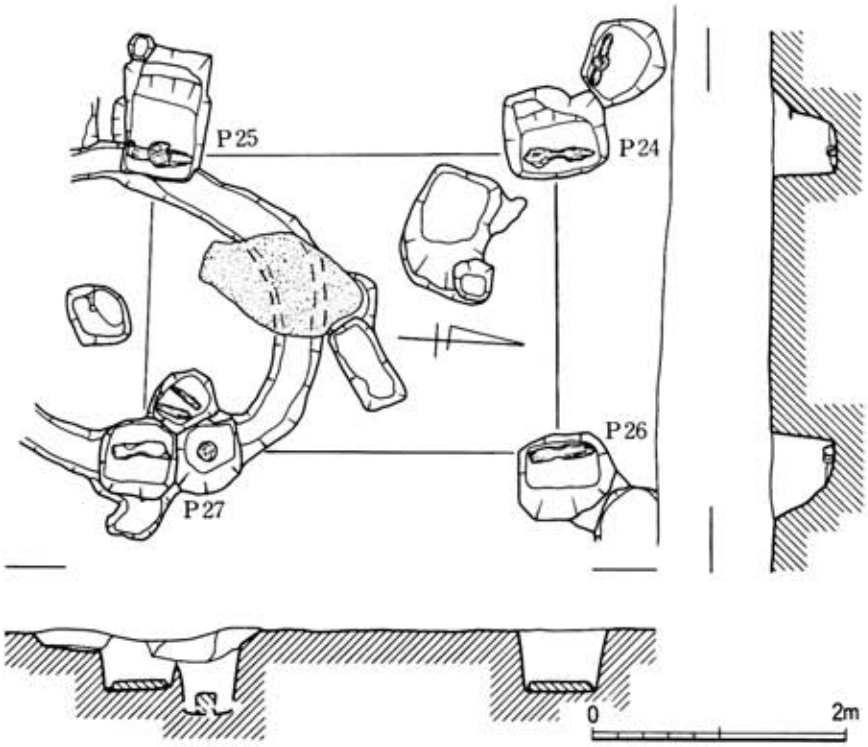
梁行間1.97m を測る。柱穴の掘方は隅丸方形で、P20柱穴の大きさは長さ0.59m 、幅0.48m 、深さ0.45m である。P19、P20柱穴には柱根と横木が、P18柱穴には横木が残っている。桁行に対する横木の方向は、P19、P20柱穴は直行するがP18柱穴は平行して据えている。

SB006掘立柱建物跡（第６図）

１間×１間の建物で桁行方向をN22°Eにとる。柱間の長さは、桁行間3.6m 、梁行間3.0m を測る。柱穴の掘方は隅丸方形。掘方の大きさは長さ0.99～0.78m 、幅0.8～0.63m 、深さ0.7～0.5m である。柱根は残存しない。

SB007掘立柱建物跡（第７図）

F～G間に位置し、円形周溝を切っている。１間×１間の建物で、桁行方向をN3°Wにとる。柱間の長さは桁行間3.34m 、梁行間2.35m を測る。柱穴の掘方は隅丸方形。掘方の大きさはP26柱穴で長さ0.77m 、幅0.68m 、深さ0.51m である。柱穴にはP25に柱根と横木、P24、P27、P28に横木が残存する。桁行に対する横木の方向はすべて平行する。



第７図　SB007掘立柱建物跡実測図

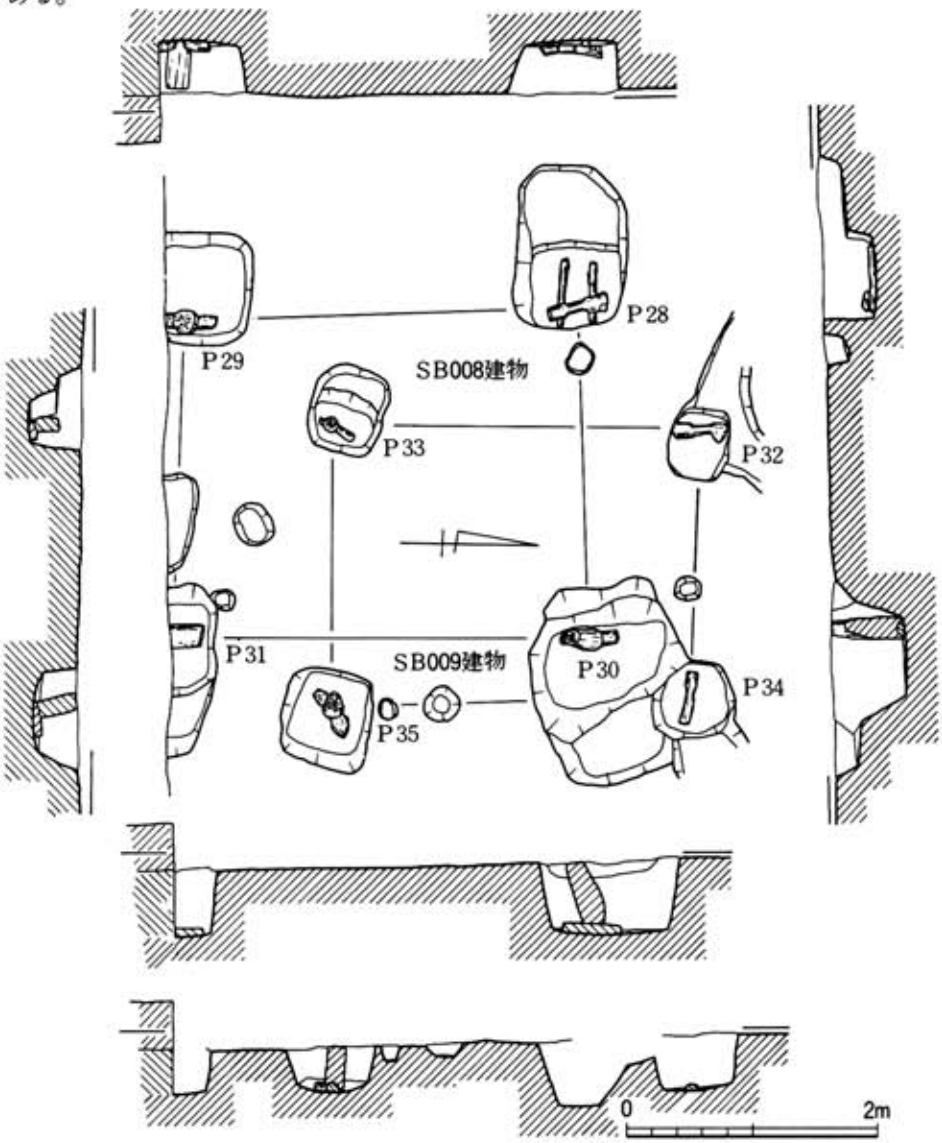
SB008掘立柱建物跡（第８図）

F～G間に位置し、SB009掘立柱建物跡と重複する。１間×１間の建物であるが、南側へさらに延びることも考えられる。桁行方向をN2°Wにとる。柱間の長さは桁行間 3.1m 、梁行間2.65m 。柱穴の掘方は隅丸方形で、P28、P31柱穴は二段掘りである。掘方の大きさはP28で

長さ 1.3m 、幅0.88m 、深さ0.46m である。柱穴にはP28に横木と枕木、P29、P30に柱根と横木が残存している。桁行に対する横木の方向は、すべて平行して据えている。

SB009掘立柱建物跡（第8図）

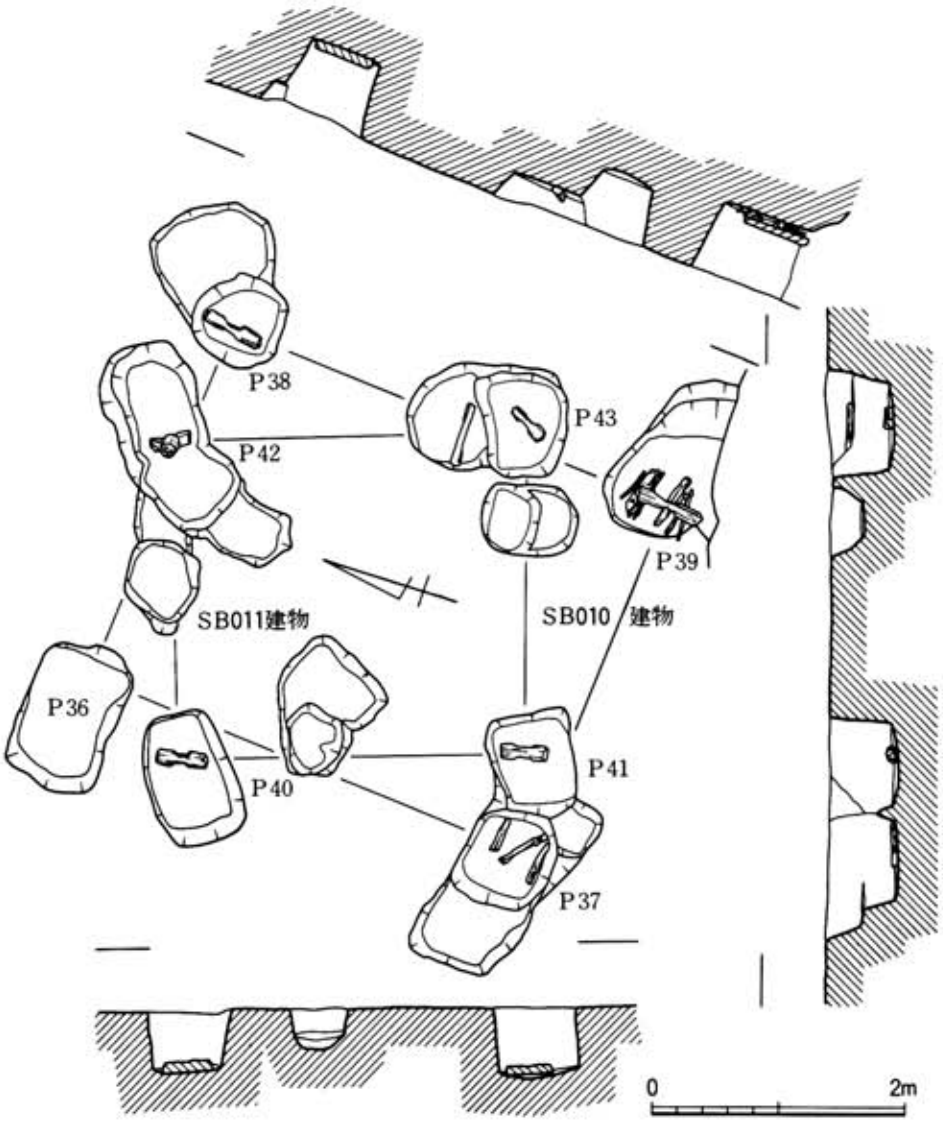
1間×1間の建物で桁行方向をN1°Wにとる。柱間の長さは桁行間2.94m 、梁行間2.26m を測る。柱穴の掘方は隅丸方形で、P33は柱の部分だけをさらに掘り込む。掘方の大きさはP35で長さ0.78m 、幅0.72m 、深さ0.37m である。柱穴にはP32、P34に横木が、P33、P35に柱根と横木が残存する。桁行に対する横木の方向は、P32が平行、P34が直角、P33、P35は斜めである。



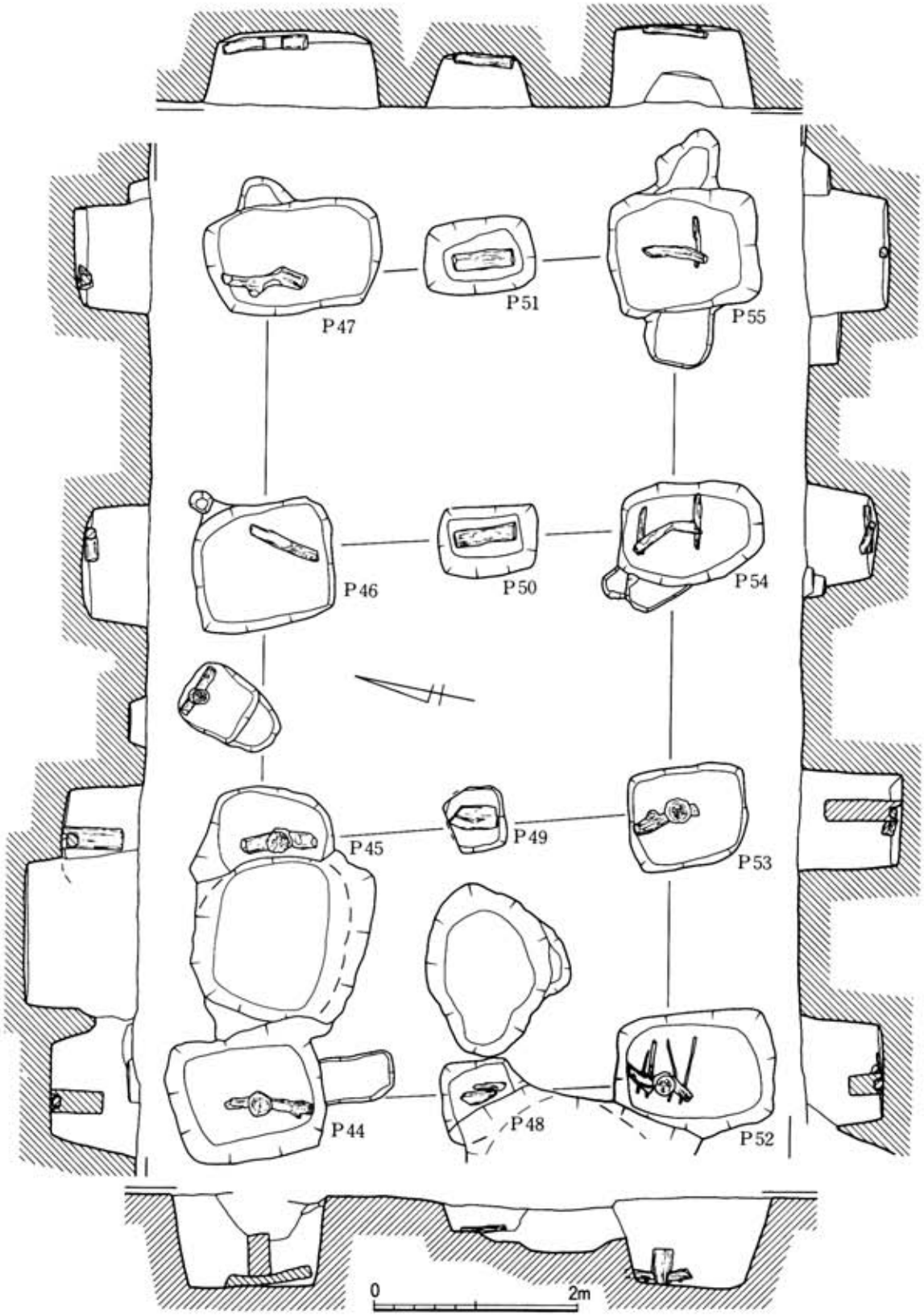
第8図　SB008.009掘立柱建物跡実測図

SB010掘立柱建物跡（第９図）

Ｆ～Ｇ間に位置しＳＢ011掘立柱建物跡と重複する。１間×１間の建物であるが、さらに北側へ延びることも考えられる。桁行方向をＮ4°Ｅにとる。柱間の長さは桁行間3.75m 、梁行間３m を測る。柱穴の掘方は隅丸方形で、Ｐ37は二段掘りである。大きさはＰ37で、長さ1.35m 、幅0.72m 、深さ0.55m である。柱は抜かれているが、Ｐ37に枕木、Ｐ38に横木、Ｐ39に横木と枕木が残っている。Ｐ39の枕木は細い枝木を用いている。桁行に対する横木の方向はすべて平行に据えている。



第９図　SB010.011掘立柱建物跡実測図



第10図　SB012掘立柱建物跡実測図

SB011掘立柱建物跡（第９図）

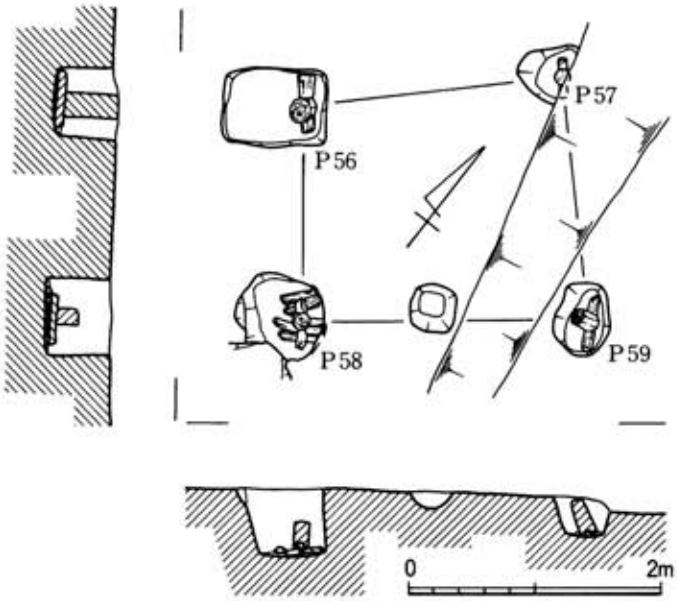
１間×１間の建物であるが、さらに桁行が北側へ延びることも考えられる。桁行方向をN18°Wにとる。柱間の長さは桁行間2.84m、梁行間2.62mを測る。柱穴の掘方は隅丸方形で、P40の大きさは長さ1.05m、幅0.68m、深さ0.47mである。柱はP40、P41、P43が横木、P42が柱根と横木が残存する。桁行に対する横木の方向は、P40～P42は平行するが、P43は斜めに据えている。

SB012掘立柱建物跡（第10図）

調査区の中央、G～I間に位置する。３間×２間の総柱の建物で、桁行方向をN78°Eにとる。柱間の長さは桁行間8.2m、梁行間4.0mと川寄吉原遺跡最大の建物である。P45柱穴はSE006井戸と切合うが、調査中壁面が崩壊したため切合い関係は明らかにできなかった。建物の平面形は長方形であるが、わづかに右左にずれており∠P44、P52、P55は93°と開く。柱穴の大きさは北列、南列は大きく、中列は一回り小さく、北側のP46が長さ1.4m、幅1.22m、深さ0.69m、中列のP50が長さ0.98m、幅0.71m、深さ0.44mである。この違いは柱材にも見られ、北列、南列には横木や枕木を敷いた上に柱を建てるが、中列は礎板の上に柱を建てている。柱材はP44とP53が柱根と横木。P45とP52が柱根、横木と枕木。P46とP47が横木、P54、P55が横木と枕木。P48～P51には礎板が残存する。横木の埋置は統一され、桁行方向に対し直角に据えている。

SB013掘立柱建物跡（第11図）

I～J間に位置する。１間×１間の建物で桁行方向をN48°Eにとる。桁行、梁行とも不揃いで、北側桁行間2.05m、南側は2.3m。西側の梁行間1.7m、東側は1.94mである。柱穴は長方形と隅丸方形がある。P56は長さ0.82m、幅0.62m、深さ0.51mである。柱穴にはいづれも柱根、横木が残っている。特にP58は横木と同じ丸太材を半載し敷きつめ、その上に丸太を半載した横木を渡し、丁寧に面取りした柱を据付けている。桁行に対する横木の方向は直角である。



第11図　SB013掘立柱建物跡実測図

SB014掘立柱建物跡（第12図）

Ｉ～Ｊ間に位置しSB015.016掘立柱建物跡と重複する。１間×１間の建物で桁行方向をN18°Wにとる。P62柱穴はSB015掘立柱建物跡P66柱穴を切っている。建物の平面形は台形に近い。柱間の長さは西側の桁行2.05m、東側2.3m。北側の梁行1.94m、南側1.7mである。柱穴の大きさはP63で長さ 1.1m、幅1.09m、深さ0.44mである。柱穴にはP62に柱根と横木、P63に横木が残存する。桁行に対する横木の方向はP63は平行、P62は直角である。

SB015掘立柱建物跡（第12図）

２間×１間の建物で、桁行方向をN40°Wにとる。柱間の長さは桁行間 4.4m、梁行間3.04mを測る。掘方は隅丸長方形で、横木の部分をさらに掘り下げるものがある。柱穴の大きさはP68で長さ1.18m、幅0.64m、深さ0.45mである。柱材はP64に柱根と横木、枕木、P65、P67、P68に柱根と横木、P66に横木が残存する。横木は掘方の長軸に対して直角に、しかも中央に寄せ埋置している。これは桁行方向に対して平行である。

SB016掘立柱建物跡（第12図）

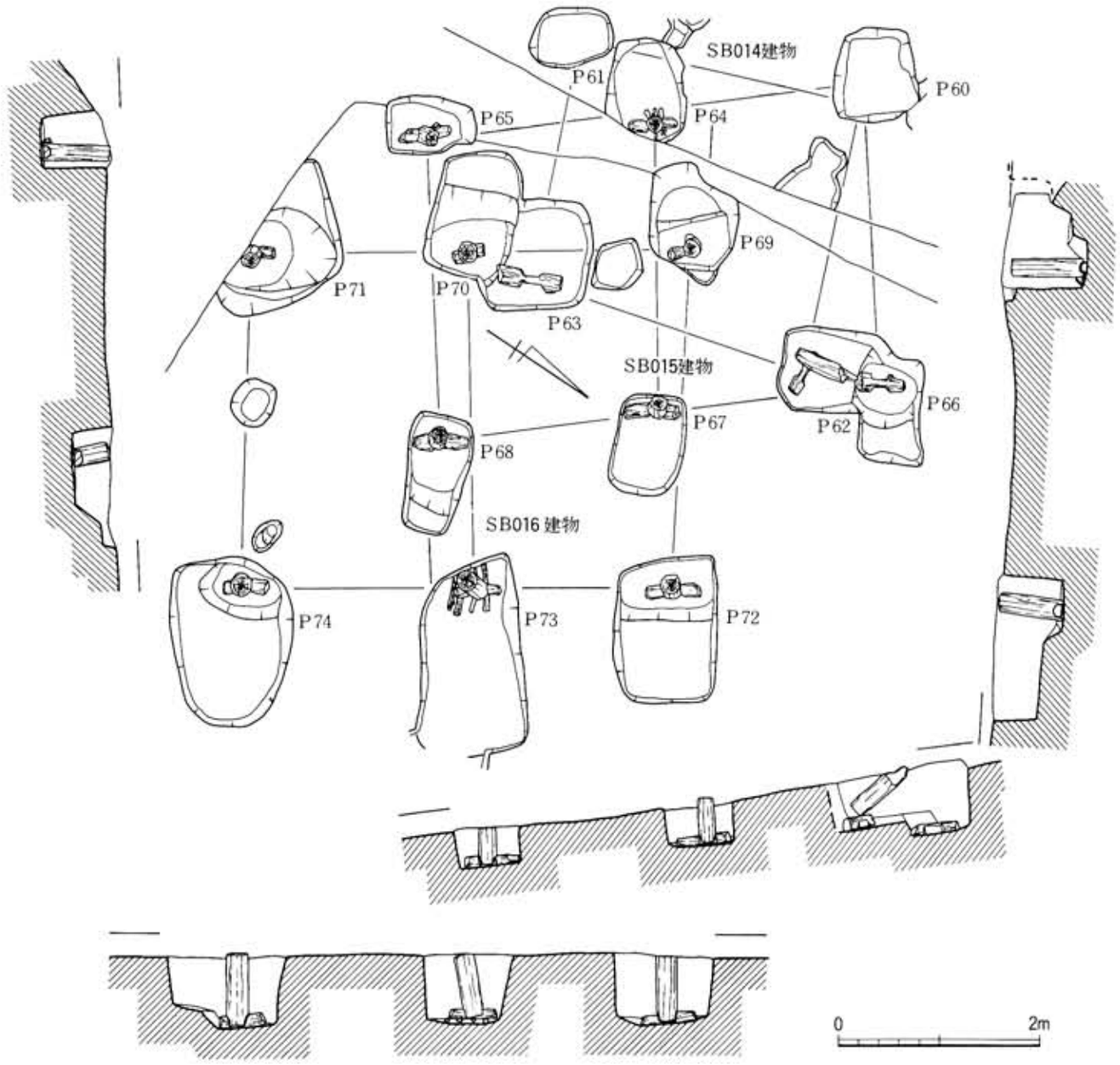
２間×１間の建物で、桁行方向をN33°Wにとる。P70柱穴はSB015掘立柱建物跡P63柱穴を切り、P73柱穴はSB017掘立柱建物P77柱穴を切っている。柱間の長さは東桁行間が4.28m、西側は4.4m。北梁行間が 3.4m、南側は3.3mと西側の桁行が広がる。柱穴は長方形で、大きさはP73で長さ1.86m、幅1.04m、深さ0.69mである。又柱穴は中央によせて横木を据付ける部分を一段深く掘っている。柱根、横木はすべて残存し、P73には横木の下に４本の枕木を敷いている。桁行に対する横木の方向は、すべて平行である。

SB017掘立柱建物跡（第13図）

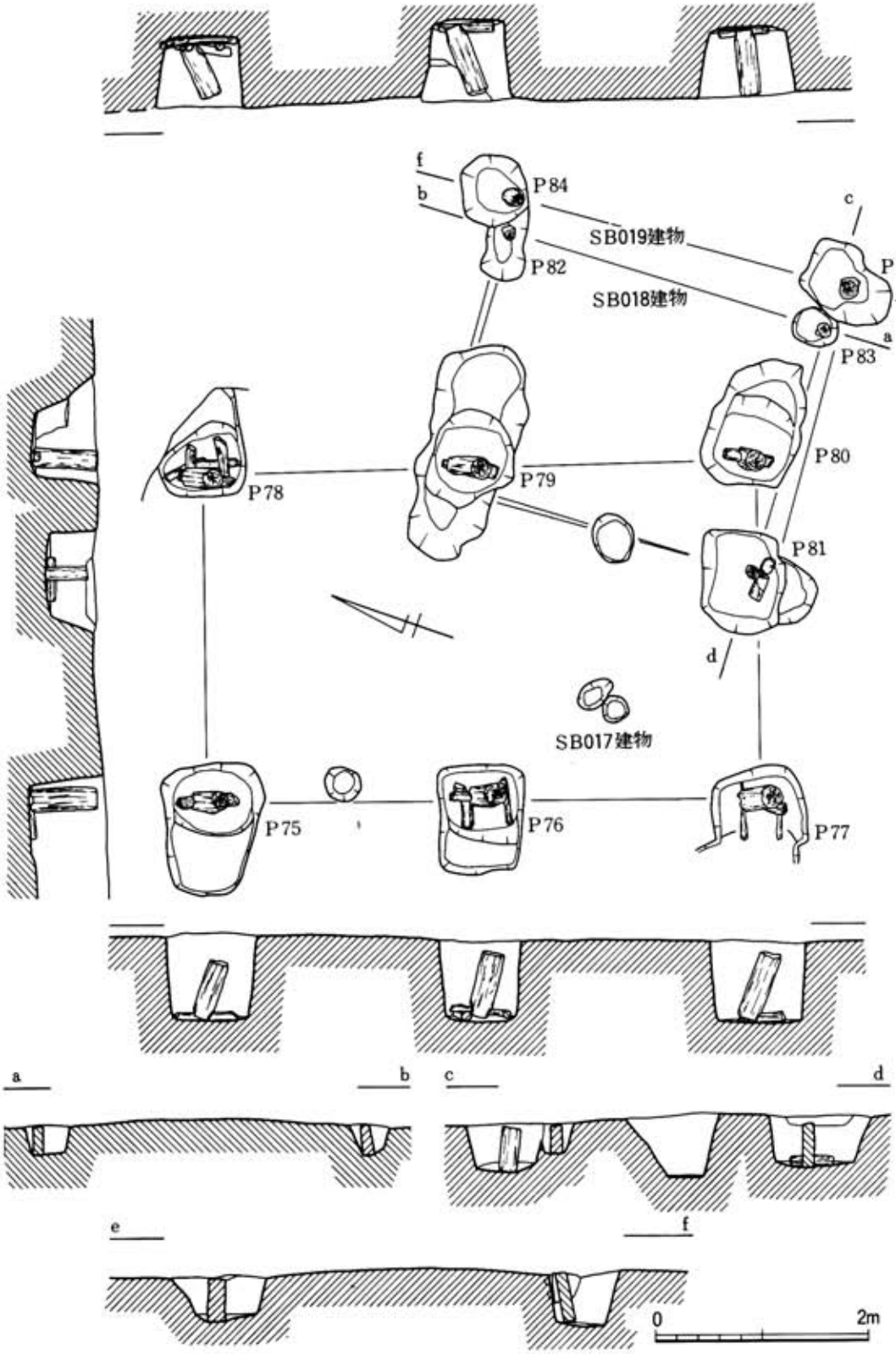
調査区の東端、Ｊ－Ｋ間に位置する。２間×１間の建物で、桁行方向をN20°Wにとる。SB018.019掘立柱建物跡と重複し、P79柱穴を共有する。P79柱穴に残存する柱根はSB017掘立柱建物跡のものであり、SB017建物が後出する。柱間の長さは桁行間5.15m、梁行間3.05mである。柱穴の掘方は長方形で、横木の部分をさらに掘り込んでいる。柱穴の大きさはP76で幅1.0m、長さ0.78m、深さ0.78mである。柱材はP75、P79、P80に柱根と横木が、P76、P77、P78に柱根と横木、枕木が残る。横木は桁行に対して平行に据え、SB015.016掘立柱建物同様、建物の中央に寄せている。

SB018掘立柱建物跡（第13図）

１間×１間の建物で桁行方向をN2°Wにとる。柱間の長さは桁行間3.1m、梁行間2.4mである。P81柱穴はSB019掘立柱建物跡と重複するが、SB018掘立柱建物の柱根が残っており、SB 018掘立柱建物が後出する。このためSB017～019掘立柱建物跡の切合い関係はSB019→SB 018→SB017となる。柱穴の掘方は小さく円形に近い。P83柱穴で長さ0.45m、幅0.35m、深さ0.28mである。柱根はP81～P83に残っており、柱の直径は13～11cmである。



第12図　SB014. 015. 016掘立柱建物跡実測図



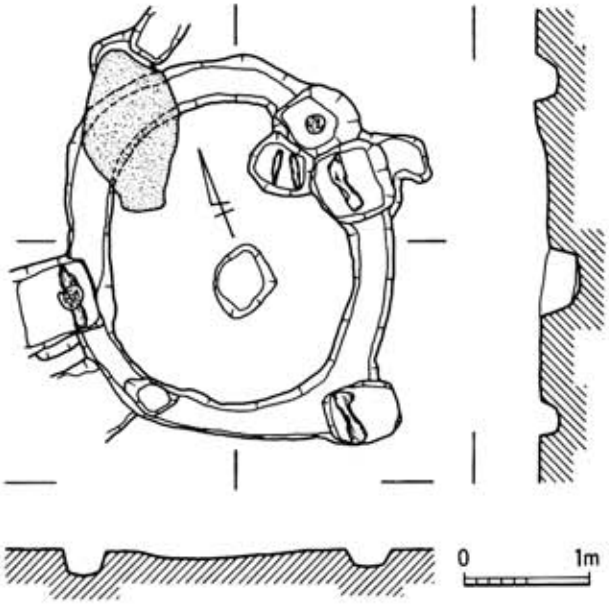
第13図　SB017. 018. 019掘立柱建物跡実測図

SB019掘立柱建物跡（第13図）

調査区の東端に位置する。１間×１間の建物で、桁行方向をN4°Wにとる。P79柱穴をSB017.018掘立柱建物跡、P81柱穴をSB018掘立柱建物跡と重複しており、この中では最も古い建物である。柱間の長さは桁行間3.3m、梁行間2.8mである。柱穴の掘方は不正円形、大きさはP84で長さ0.67m、幅0.61m、深さ0.53mである。柱根はP84、P85に残っている。

(3) 円形周溝

調査区の中央、F～G間に位置する。幅 0.4～0.25m、深さ0.25～ 0.2mの断面U字状の溝が楕円形に廻っている。周溝の溝と溝との外径は東西2.65m、南北3.15m、内径は東西2.1m、南北2.3mである。中央の台状部には柱穴状の穴が一ケ所在る他は、何ら施設は認められない。周溝内にはSB007掘立柱建物等の柱穴が存り、周溝を切っている。又円形周溝の北西には周溝を切り込み灰白色の粘土が存在する。粘土は長さ 1.3m、幅0.75m、厚さ0.1 mの楕円形をしている。粘土の下からは弥生土器片が数点出土したが、遺構の性格は不明である。



第14図　円形周溝実測図

(4) 溝　跡

溝は３ケ所検出した。SD001溝はD～E間に位置する。SB003建物跡P９柱穴の北側から始まり、北進する。調査範囲の関係で 4.5m程しか確認できなかった。幅0.7～0.6m、深さ0.55～ 0.2m、断面はU字状で北側に行く程浅くなる。内部より弥生土器片が出土した。SD002溝はG_1～H_1の中央よりSE003井戸東端の 4.6mを検出した。溝の方位はN18°Wをとる。幅は1.15～0.95m、深さは0.25mの浅いU字状である。内部より弥生土器片が出土した。SD003溝はSB012建物の東側、1_1～1_2上に位置する。溝の方位はN12°Wをとる。長さ９m、幅1.6～1.0m、深さは0.44～0.15mで、北側に行く程浅くなる。溝の内部より弥生土器片が出土した。

SD002.003溝の方位はSB012掘立柱建物の梁行方向とほぼ同方向であり、又SB012建物の西側梁行P45～P52柱穴とSD002溝との距離と、東側梁行P47～P55とSD003溝との距離が等しいなど関連性が見られ、SD002.003溝はSB012掘立柱建物の付設的な施設と見ることもできる。

(5) 井戸跡

井戸は８基検出した。これらは調査区の３ケ所にまとまりを持ち存在する。すなわち調査区の西端Ｄ～Ｅ間に２基、中央のＧ～Ｈ間に５基、東端のＪ～Ｋ間に１基である。すべて井戸枠を用いない単掘りの井戸で、平面の形は円形である。掘方は上面から下面にかけほぼ垂直に掘り込み、形態的には円柱状になるものと、上面がわずかに広がり逆円錐台形になるものがある。

川寄吉原遺跡の土層の堆積状況は、耕作土下に暗褐色土、その下に灰褐色粘質土（地山）、さらに灰褐色砂礫層となる。井戸は灰褐色粘質土より掘り込み、灰褐色砂礫層まで達している。灰褐色砂礫層からは湧水があり、井戸の深さが0.6～1.4m と浅い割には湧水は豊かであったと見られる。

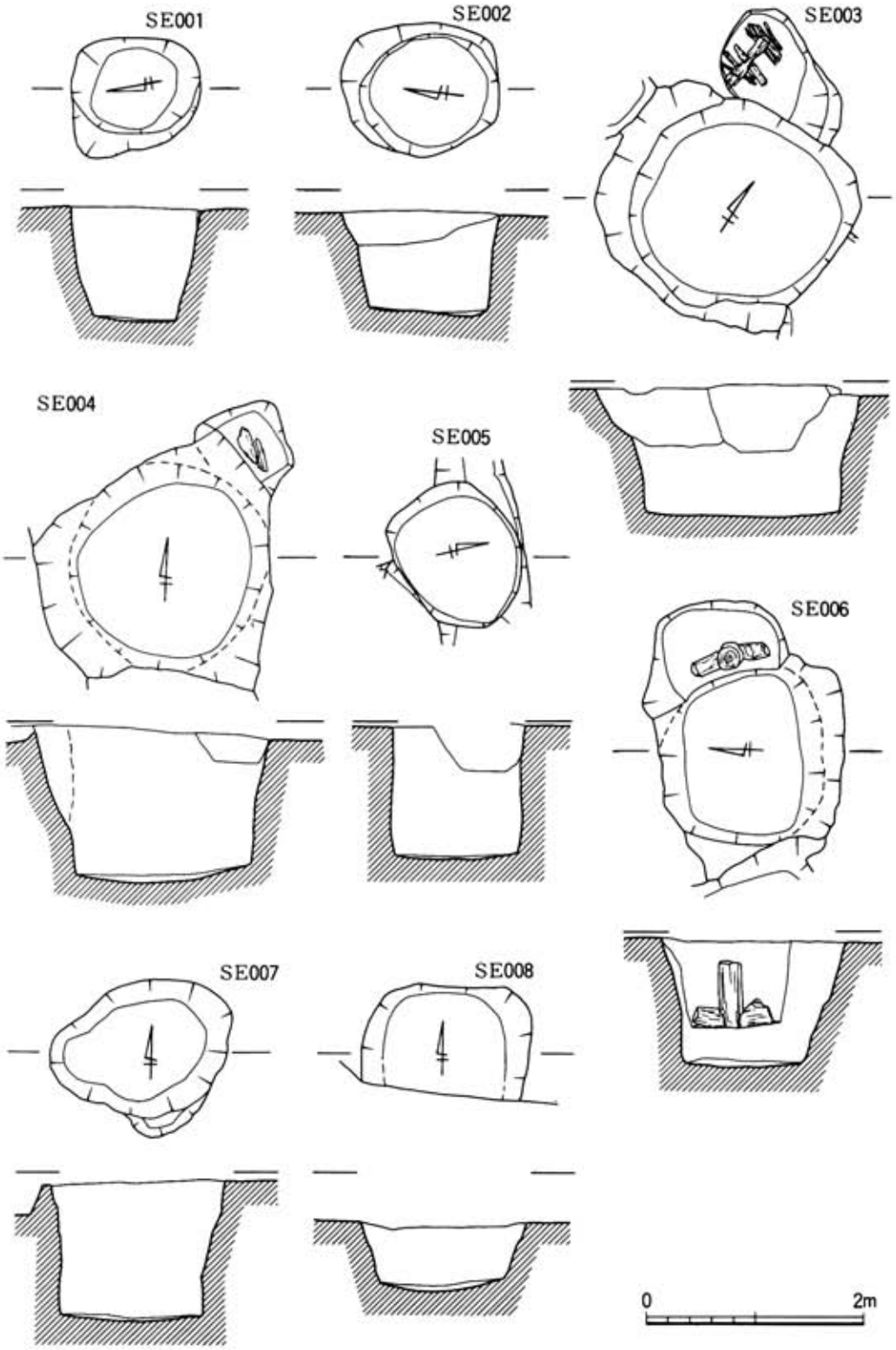
井戸の規模は、直径が1.5m 以下の小規模の井戸と、直径が1.5m を越える大きな井戸があり、前者をⅠ類、後者をⅡ類として分類する。

Ⅰ類　Ⅰ類にはSE001.002.005井戸の３基がある。掘方はSE002.005が円柱状、SE001が逆円錐台形である。大きさは最も小型のSE001は、上面の径1.19×1.02m 、下面の径0.75× 0.7m 、深さ1.06m 。大きいSE002は上面の径1.4×1.2m 、下面の径1.1×1.0m 、深さ0.91m である。出土遺物は弥生土器の甕、鉢、器台等が、又SE002から木材片が出土した。

Ⅱ類　Ⅱ類の井戸はSE003.004.006～ 008 井戸の５基がある。掘方はSE003.004が円柱状、他は逆円錐台形である。掘方の規模は、小さいSE007で上面の径1.6×1.4m 、下面の径1.39× 0.9m 、深さ1.28m 。最大のSE003で上面の径2.45×2.05m 、下面の径1.86×1.58m 、深さ1.2m である。出土遺物は多くSE004.007.008からは弥生土器の甕、鉢、高杯、器台等がまとまって出土した他、SE007からは鍬、鎌の柄の木製品と、小枝片に混り５～10cm程の木屑が多量に出土した。

遺構番号	掘方規模			形態分類	出土遺物	取上時番号
	上面	下面	深さ			
SE001	119×102	75×70	106	Ⅰ類	弥生土器(甕、鉢、壺、高杯、器台)	P－1
002	140×120	110×100	91	Ⅰ類	弥生土器(甕、鉢)	P－5
003	(245)×205	186×158	120	Ⅱ類	弥生土器(甕、鉢、壺、鍋形土器、高杯、器台)	P－37
004	190×185	158×160	140	Ⅱ類	弥生土器(甕、鉢、壺、高杯、器台)	P－40
005	133×108	115×102	121	Ⅰ類	弥生土器(甕、鉢、壺、器台)	P－42
006	170×160	108×142	118	Ⅱ類		P－41
007	160×140	139×90	128	Ⅱ類	弥生土器(甕、鉢、壺)木器(鍬、鎌、斧の柄、杵)	P－56
008	154×—	112×—	62	Ⅱ類	弥生土器(甕、鉢、壺)	P－95

第１表　井戸一覧表



第15図　井戸実測図

(6) その他の遺構

調査区の西端や東端には落ち込みがあり、黒褐色泥質土がしだいに厚く堆積している。この黒褐色泥質土中には多くの土器を包含しており、この部分をその他の遺構として取りあげる。

川寄吉原遺跡は東西80m、南北50m程の小範囲の遺跡である。この遺跡の存在する陸の部分は周囲より一段高く、回りは城原川水系の河川が入り組んだ沼状になっていたと見られ泥質土が厚く堆積している。遺跡の西端は明確でB～C間よりしだいに西側に落ち込む。このB～C間の陸部と沼部の境には、陸部にそい幅2.5m、深さ0.5mの溝状の遺構が6m程めぐっている。この溝状遺構上面の黒褐色泥質土を中心に弥生土器や木材片が出土した。弥生土器は甕、壺、鉢、器台の出土が多いが、注目されるのは、瀬戸内系の甕形土器である。木材片は、枝木類が多いが、建築材の一部と見られる木材も出土している。

遺構の東端は、西端のような陸部と沼部の区別はつかず、K_1～K_2附近より東側にかけ黒褐色泥質土が堆積する。SB019掘立柱建物以東には遺物がなくなり、黒褐色泥質土の堆積土も厚くなる所から、遺構の東端はSB019掘立柱建物の東側までで、それ以東は沼状になると見られる。東側の黒褐色泥質土からの出土遺物は西側程多くないが、弥生土器や石包丁が出土した。

2 遺 物

川寄吉原遺跡出土の遺物は、土器、鐸型土製品、石器、木器がある。出土した遺構は、前述の掘立柱建物跡の柱穴、溝跡、井戸跡、それに調査区B～C間、K～L間の黒褐色泥質土中からで、出土遺構毎に説明を加える。

(1) 土 器

掘立柱建物跡柱穴内出土土器

掘立柱建物跡の各柱穴内から、弥生時代後期の土器片が10点前後出土した。中には50点以上出土した柱穴もあり、ここでは甕を中心に代表的な遺物について取り扱う。

SB001建物柱穴出土土器（第16図）

甕（1・2）1はP3から、2はP4から出土した。1は復元口径31cm、口縁部は「く」の字に大きく外反する。端部はわずかに外彎し、内面に稜をつくる。2は復元口径30.6cm。口縁部は「逆L字」に近い。ともに体部内面はナデ、外面は縦方向のハケメ、口縁部はヨコナデ、1の口縁部内面は横方向のハケメを施す。

壺（3）P3から出土した。口径12cm、口縁部は鋭く「く」の字に外反し、肩部は大きく張る。体部内面はナデ、外面は縦方向のハケメ、口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のハケメを施す。

SB004建物柱穴出土土器（第16図）

甕（16・17）16はP15から、17はP16から出土した。16の底径7.2cm、17の底径6.8cm。いずれも平底である。体部内面はナデ、外面は縦・斜め方向のハケメを施す。

SB005建物柱穴出土土器（第16図）

壺（18）P20から出土した。口縁部から肩部にかけ欠損するが、口縁部は袋状口縁になるものと見られる。体部は球形で、厚く不安定な平底につづく。胴部の最大部の所に、細い三角凸帯をめぐらす。内底部は指おさえのあとナデ、体部内面はナデ、外面は縦・斜め方向のハケメを施す。

SB006建物柱穴出土土器（第16図）

甕（4・19）4はP26から出土した。復元口径43cm。口縁部は直線的に「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。頸部に断面三角凸帯をめぐらす。体部内面は斜め方向のハケメ、外面は縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ、外面はヨコナデ。19はP22から出土した。底部は薄い平底で、胴下半部にかけ開きながら延びている。体部内面はナデ、外面は斜め方向のハケメを施す。

SB007建物柱穴出土土器（第16図）

甕（5・20）5はP26から出土した。口径28.6cm、口縁部は「く」の字に外反し、肩部にふくらみをもつ。体部内面はナデ、外面は縦方向の荒いハケメ、口縁部はヨコナデ。20はP24から出土した。底径 7.6cm、底部は厚い平底である。内底部はナデ、体部外面は縦方向のハケメを施す。

SB008建物柱穴出土土器（第16図）

甕（25）P28から出土した。底径11.4cmの大甕の底部である。底は厚い平底となる。体部内面はハケメのあとナデ、外面は縦・斜め方向のハケメを施す。

鉢（6）P31から出土した。口径25.8cm。口縁部は丸みをもつ「く」の字で、胴の張らない体部につづく。体部内外面共、横・斜め方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ、外面はヨコナデを施す。

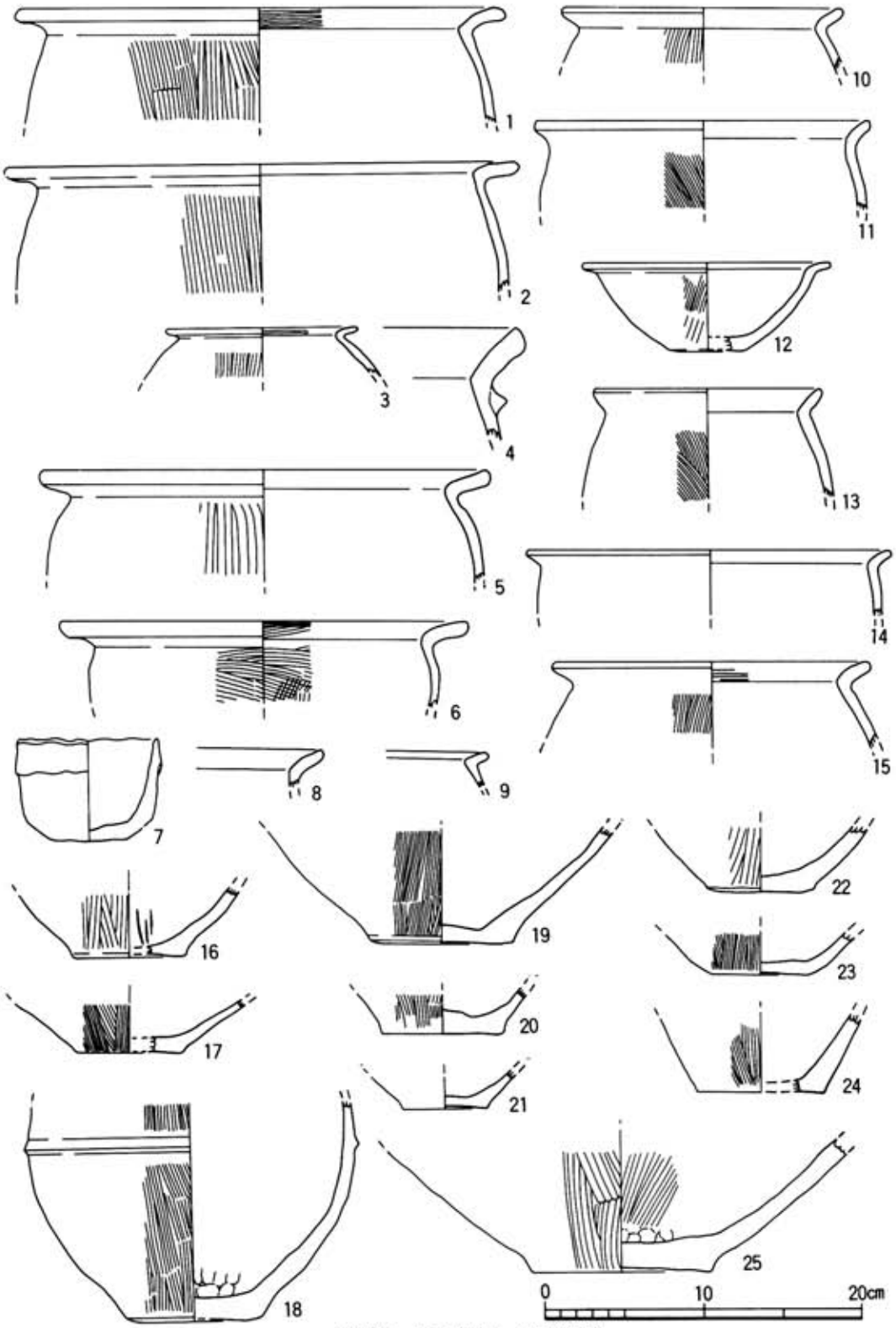
SB009建物柱穴出土土器（第16図）

甕（21）21はP32から出土した。甕の底部である。底径5.4cm、底は薄く、平面となる。体部内・外面ともナデを施す。

鉢（7）P32から出土した。口径9cm、器高6.9cm。全体を手捏成形し、口縁部は折り曲げ張り付けている。

SB010建物柱穴出土土器（第16図）

甕（23）甕の底部である。底径6.4cm。底は厚く、不安定な平底となる。体部内面ナデ、外面は斜め方向のハケメを施す。



第16図　柱穴内出土土器実測図

SB011建物柱穴出土土器（第16図）

鉢（24）P40から出土した。底径6.4cm。底は薄い平底で、体部下半部は内彎ぎみに延びており、鉢の底部と見られる。体部内面ナデ、外面は縦方向のハケメを施す。

SB012建物柱穴出土土器（第16図）

甕（8）P53から出土した。復元口径22cm、口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。内外面ともヨコナデを施す。

SB013建物柱穴出土土器（第16図）

甕（24）P59から出土した。底径 8.1cm。底は平底で、体部は直線的に外方へ延びる。体部内面ナデ、外面は縦・斜め方向のハケメを施す。

SB014建物柱穴出土土器（第16図）

甕（9）P60から出土した。復元口径18cm。 口縁部は「く」の字に強く外反する。口縁部はヨコナデを施す。

SB016建物柱穴出土土器（第16図）

甕（10・11）P73から出土した。10は口径17.8cm。口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。11は口径21.2cm、口縁部はゆるやかな「く」の字で、内面の稜も明瞭でない。体部内面はナデ、外面は斜め方向のハケメ、口縁部はヨコナデを施す。

鉢（12）P72から出土した。口径15.7cm、器高 5.6cm。口縁部は短く、丸みをもつ「く」の字に外反させ、内面に稜をつくる。底は厚く、平底である。体部内面はナデ、外面は斜め方向のハケメ、口縁部はヨコナデを施す。

SB017建物柱穴出土土器（第16図）

甕（13・14）P75から出土した。13は口径14.5cm。口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。14は口径23.2cm。口縁部は「く」の字で端部が外彎する。体部内面はナデ、口縁部はヨコナデ、13の体部外面は斜め方向のハケメ、14はヘラミガキを施す。

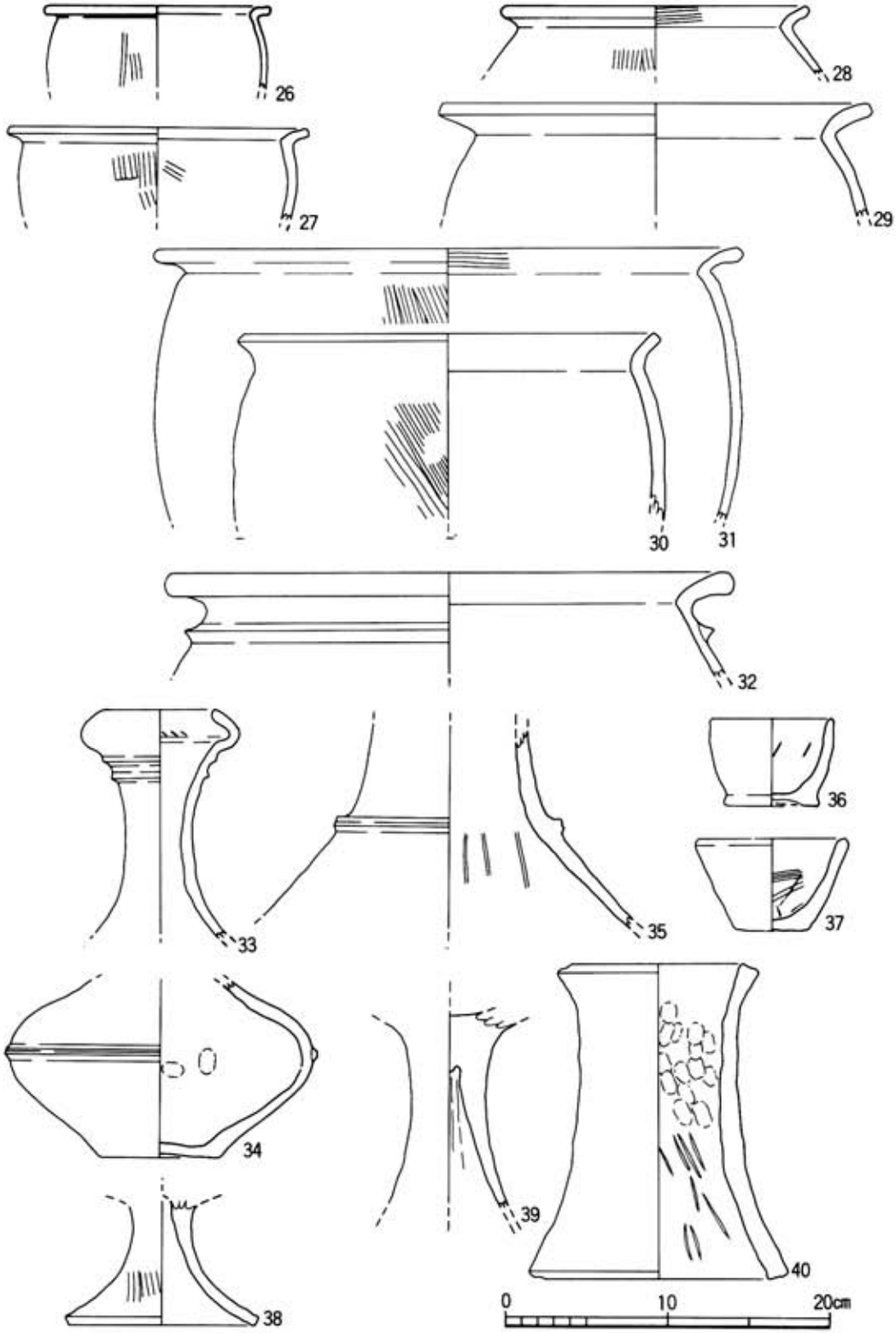
円形周溝内出土土器（第16図）

甕（15）口径20.2cm。口縁部は厚く、「く」の字に強く外反する。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。

溝跡出土土器（第17図）

34、35はSD002から、その他はSD003から出土した。

甕（26～32）26は口径14.3cmの小形の甕である。口縁部は「逆L字」で、体部がわずかに張る。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部はヨコナデ。27は口径18.9cm。口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。体部内面はハケのあとナデ、外面は縦方向のハケメ、口縁部はヨコナデ。28は口径19.2cm。口縁部は強く「く」の字に外反する。肩部は張り、体部にかけ丸みを帯びる。体部内面ナデ、外面は縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ、外面



第17図　溝跡出土土器実測図

ヨコナデ。29は口径26.9cm。口縁部は「く」の字に外反し、端部は厚味がある。体部はふくらみをもつ。体部内外面ともナデ。口縁部ヨコナデ。30は口径26.3cm。口縁部はゆるやかな「く」の字で、口径より胴部最大径が大きい。体部内面はナデ、外面は斜め方向のハケメ。口縁部はヨコナデ。31は口径36.7cm、口縁部は「く」の字に外彎し、内面に稜をつくる。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ、外面はヨコナデ。32は口径35.5cm。口縁部は内傾した「逆L字」で、端部に厚みをもたしている。口縁部下に断面三角形の凸帯をめぐらす。体部内面横方向のハケメ、外面ナデ、口縁部ヨコナデを施す。

鉢（36・37）36は口径7.7cm、器高5.4cm、底径 5.9cm。口縁部は直立し、端部を細くつくる。底は平底である。体部内外面ともナデ、口縁部ヨコナデ。37は口径9.5cm、底径4.6cm。体部は直線的に延び、端部は丸く仕上げる。底は平底である。体部内面はハケのあとナデ、外面ナデ、口縁部ヨコナデを施す。

壺（33～35）33は口縁部から肩部にかけ残存する。口縁部は丸い袋状をしており、細長い頸部の上端に断面三角凸帯を二条めぐらす。体部は34に似た形になると見られる。頸部内面はしぼり痕が見られ、外面は丹塗り磨研、口縁部はヨコナデを施す。34は口縁部と頸部を欠く。胴部は丸く張り、最大部の所に山形の凸帯をめぐらす。底はわずかに上げ底となる。胴部内面ナデ、外面は上半部がヨコナデ、下半部は縦方向のヘラミガキを行う。35は大形の壺で、頸部と肩部を残す。袋状口縁壺になると見られ、頸部と肩部の境に断面M字の凸帯を一条めぐらす。内面ナデ、外面は丹塗り磨研を行う。

高杯（38・39）脚部のみ出土した。38は裾部径12.1cm。脚部は底く、裾部が大きく開く。内面はしぼりのあとナデ、外面はヘラケズリ。39は脚部は高く、裾部がしだいに大きく開くと見られる。内面はしぼりのあとナデ、外面はヘラミガキを施す。

器台（40）裾部径16.1cm、口縁部径12.5cm、器高20cm。上下方向に開くが、くびれ部がはっきりしない。体部内面に指やヘラによる押文が残る。外面はナデ、裾部、口縁部はヨコナデを施す。

SE001井戸出土土器実測図（第18図）

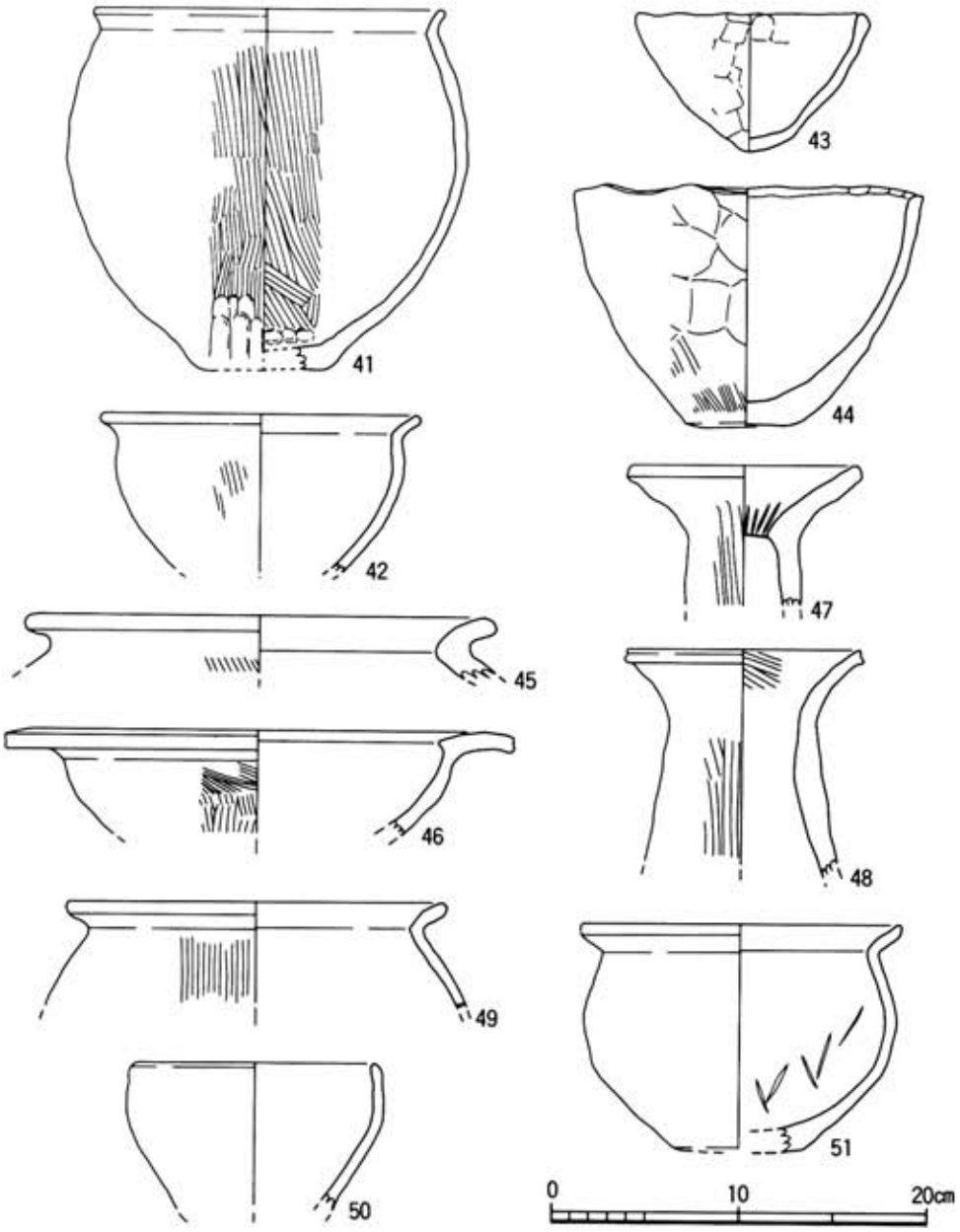
甕（41）口径18.4cm、器高19.2cm。口縁部は短く、「く」の字に外反させる。体部はふくらみを持ち口径より大きく、体部の最大幅が上部にある。底は厚い平底である。体部内外面とも縦・斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。

鉢（42～44）42は口径16.8cm、口縁部は短い「く」の字で、内面に稜をつくる。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。43は口径12cm、器高 7.3cm。口縁部は内彎気味で、底は尖る小型の手捏土器である。44は口径18.7cm、器高12.7cm。口縁部は直立し、底部は不安定な平底となる。内外面とも指頭調整され、胴下半部は斜め方向のハケメが残る。

壺（45）口径25.6cm。口縁部は「く」の字に外反し、端部が外彎する。肩部は大きく張る。

口縁部はナデ、頚部は縦方向のハケメが残る。

器台（47・48）47は口径12.6cm、48は口径12.4cm。ともに下半部を欠損する。上下に開き、くびれ部が上方につく。47は内面に成形時の段がつくため、「く」の字状に、48は朝顔形に開く。体部内面ナデ、外面縦方向の荒いハケメ、口縁部内側は横方向のハケメ、外面はヨコナデを施す。



第18図　SE001.002井戸出土土器実測図

SE002井戸出土土器（第18図）

甕（49）口径20.2cm、口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。

鉢（50・51）50は口径12.8cm。口縁部はわずかに内彎し、体部は深くなる。体部内外面ともナデ、口縁部はヨコナデ。51は口径17cm、器高12.2cm。口縁部は「く」の字に外反し、口径が胴部最大径より大きい。胴部は丸味をもち、底は平底である。体部内外面ともナデ、口縁部ヨコナデを施す。

SE003井戸出土土器（第19図）

甕（52～54）52・53は同じ器形の大形の甕である。52の口径44cm、53の口径46.6cm。口縁部は「く」の字に外反し、頸部に細い断面三角凸帯をめぐらす。53の体部はふくらみをもつ。体部内面ナデ、外面は縦、斜め方向の荒いハケメ、口縁部はヨコナデ。54は口径12cm、器高13.8cm。口縁部は短い「く」の字で体部は丸く、底は平底である。体部内面横、縦方向のハケメ、外面縦、斜め方向の荒いハケメ、口縁部はヨコナデを施す。

鍋形土器（55）口径19.4cm、長さ32.8cm、幅23.8cm、器高10cm。「く」の字状の口縁部をもつ一般的な甕を焼成前に半裁し、底部を袋状に仕上げたものである。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部はヨコナデを施すなど、調整は甕形土器と変らない。体部外面には煤が付着し、内面には赤色塗料が厚く残っている。

鉢（56）口径5.7cm、器高3.5cmの小形の鉢である。口縁部は外傾ぎみに直口し、底部は小さい平底である。体部内外面ともナデ、口縁部はヨコナデを施す。

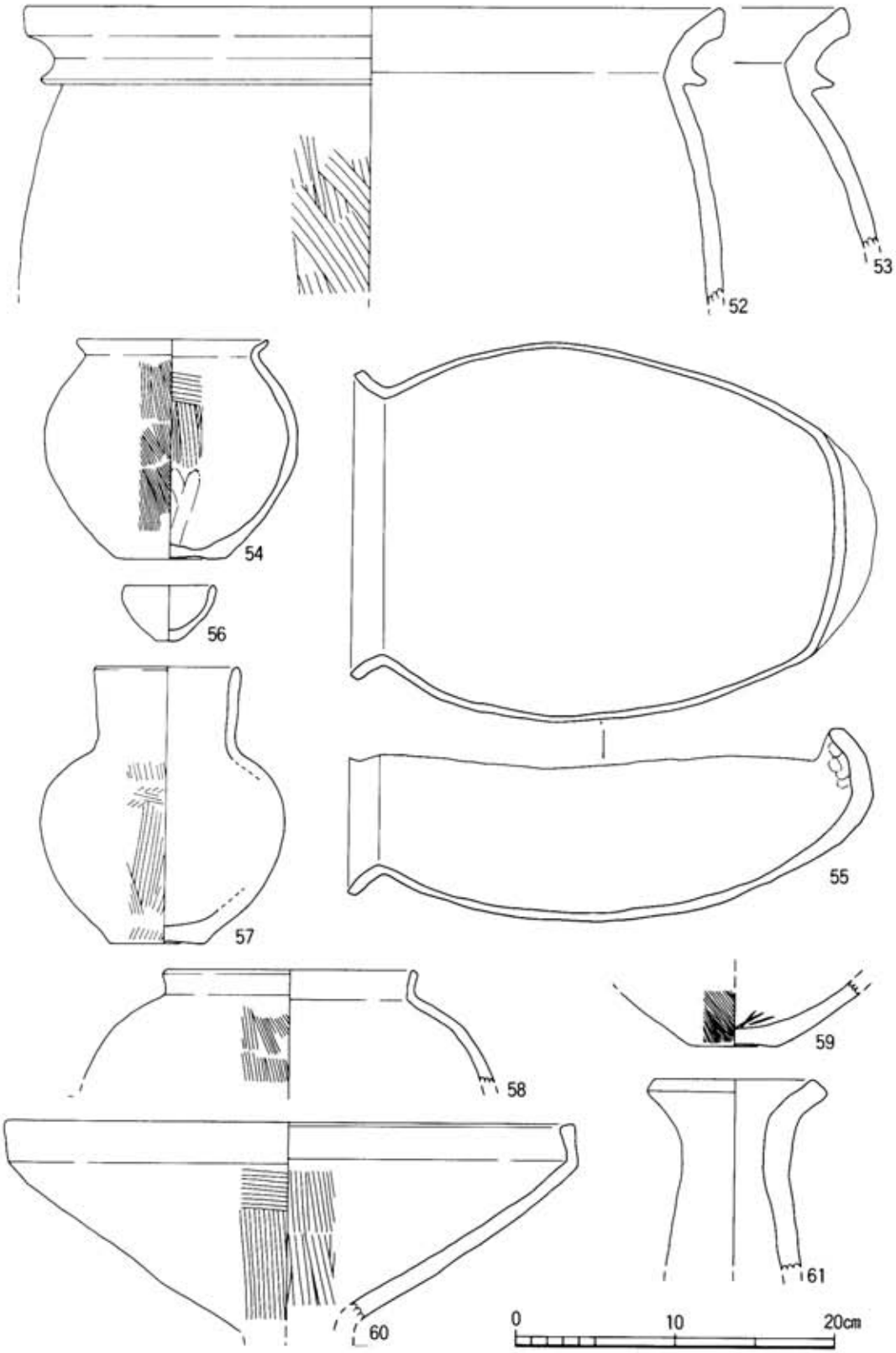
壺（57～59）57は口径9.3cm、器高17.3cm、直立した口頸部に球状の体部をつけた直口壺で、底は安定した平底である。体部内面はナデ、外面は縦、斜め方向のハケメ、口縁部はヨコナデを施す。58は口径15.4cm。口縁部から肩部にかけ残存する。短い口頸部は直口し、端部がわづかに外傾する。肩部は張り、体部は球状になると見られる。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、頸部内面横方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。59は底部径 5.6cm。底は平底で、器壁は厚い。体部内面ナデ、外面は斜め方向のハケメを施す。

高杯（60）杯部のみ残存する。口径36cm。杯部は直線的に延び、内傾気味に直立する口縁部がつく。体部内面縦、斜め方向のハケメ、外面横、縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。

器台（61）口径10cm、上下に開く器台で、器壁は厚く、くびれ部が口縁部下にある。内外面ともナデを施す。

SE004井戸出土土器（第20・21図）

甕（62～68）SE004井戸出土の甕は凸帯の有無によって大きく二つに分かれる。62～65は凸帯の無い甕で、形態上の差はさほど見られない。62は口径26cm、器高41.2cm。長胴の器体に外反する口縁部をもつ。胴下半部はしまりはゆるやかで、底は平底である。体部内面は横、斜め



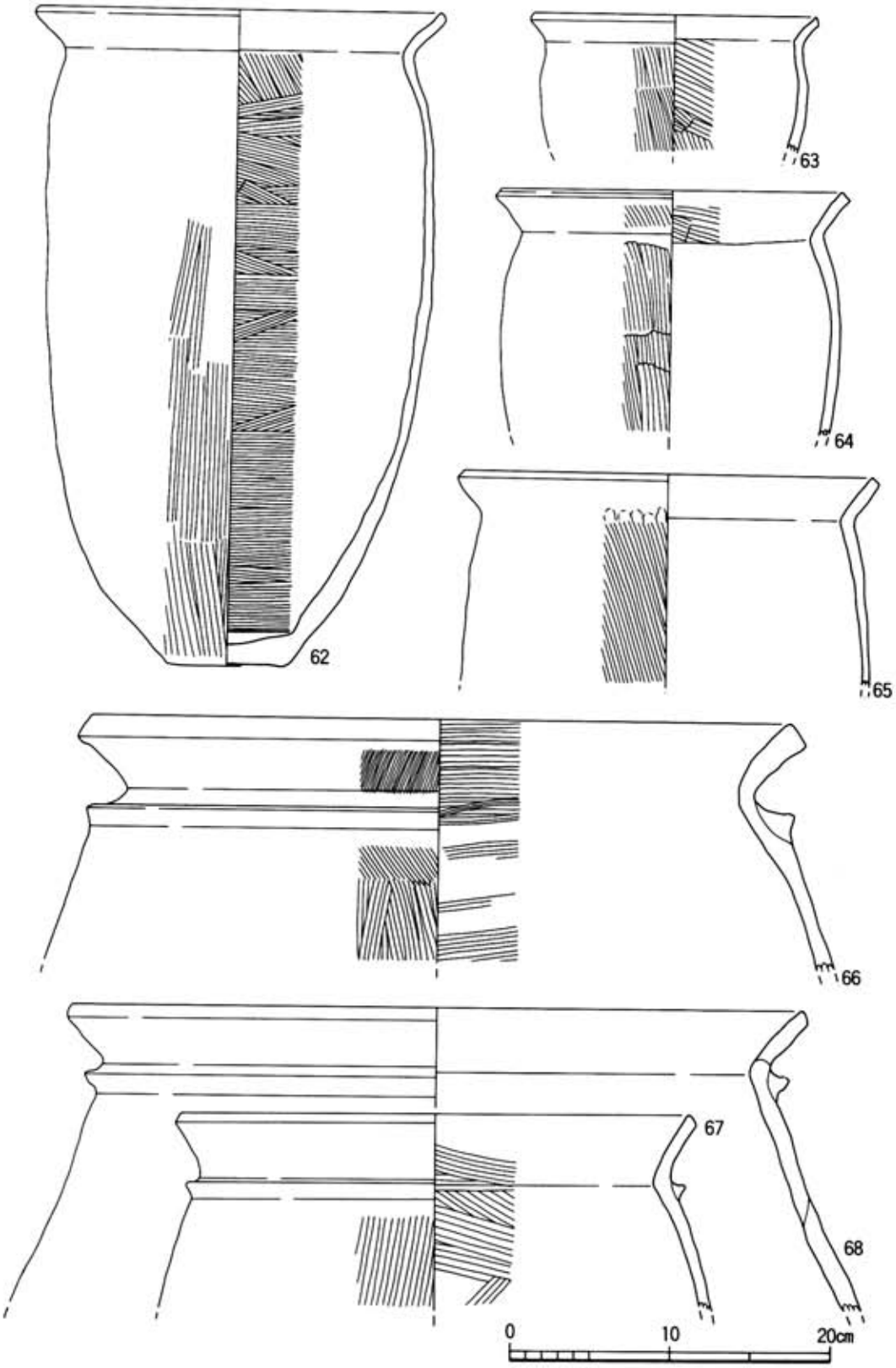
第19図　SE003井戸出土土器実測図

方向のハケメ、外面は縦方向のハケメ、口縁部はヨコナデ。63は口径18cmの小形の甕で、口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。体部内面斜め方向のハケメ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。64は口径22.2cm、口縁部は「く」の字に直線的に外反する。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部内面横方向のハケメ、外面斜め方向のハケメ。65は口径26.4cm。「く」の字に外反する口縁部に、直線的な体部がつづく。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。66～68は頚部に凸帯をもつ甕である。66は口径45.8cm口縁部を外反させ、しまった頚部に断面三角凸帯をめぐらす。体部はふくらみをもつ。体部内面横方向のハケメ、外面縦斜め方向のハケメ、口縁部内面横方向のハケメ、外面斜め方向のハケメ。67は口径32.8cm。口縁部は「く」の字に外反し、内面に明瞭な稜をつくる。頚部に小さい断面三角凸帯をめぐらす。体部内面横、斜め方向のハケメ、外面縦方向のハケメ。口縁部内面横方向のハケメ、外面ヨコナデ。68は口径46.8cm。口縁部は直線的に「く」の字に外反し、頚部に断面三角凸帯をめぐらす。大甕にしては器壁は薄く、体部は直線的に延びる。体部内面ナデ、外面縦方向の荒いハケメ。口縁部ヨコナデを施す。

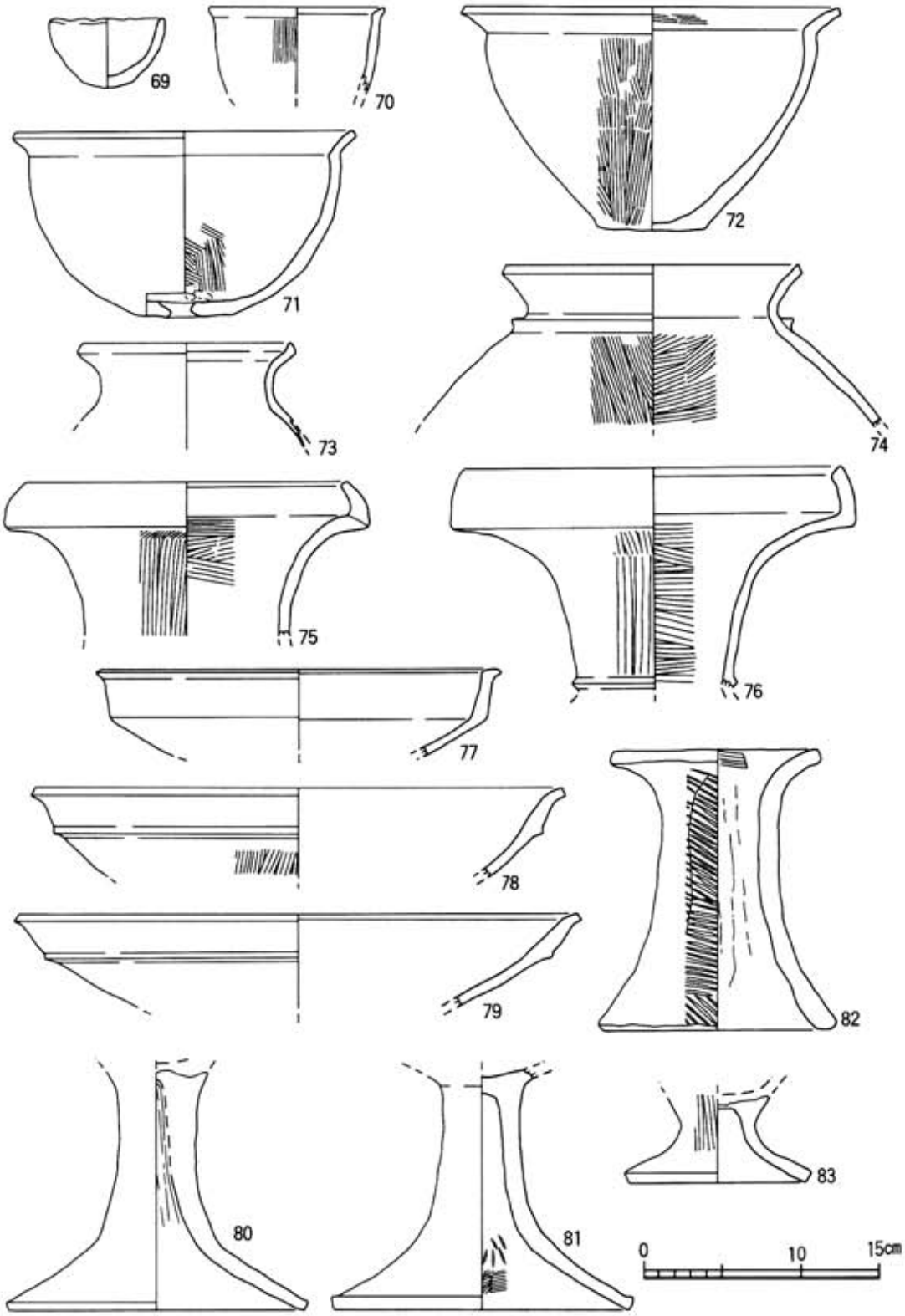
鉢（69～72）69は口径7cm、器高4.4cm。小形の手捏土器である。口縁部は内彎気味に直口し、底は丸底である。70は口径11cm小形の鉢で、短い口縁部を外反させる。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。71は口径21.8cm、器高12cm。口縁部は「く」の字に外反し、内面に明瞭な稜をつくる。体部は半球形で、底は丸底に近い平底となる。体部内外面ともハケメ、口縁部ヨコナデ。72は口径24.4cm、器高14.1cm。口縁部は「く」の字で、内面に稜をつくる。肩のはりはなく、底は安定した平底である。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部内側横方向のハケメ、外面ヨコナデを施す。

壺（73～76）73は口径13.8cm、口縁部は外反し、端部は跳上がり状になる。体部内外面ともナデ、口縁部ヨコナデ。74は口径19.2cm。口縁部は外彎し、頚部はしまり体部は丸みをもつ。頚部に断面三角凸帯をめぐらす。体部内外面とも斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。75、76は袋状口縁壺である。75は口径20.2cm、76は24cm。口縁反転部外側に明瞭な稜をもち、76は頚部下に断面三角凸帯をめぐらす。いづれも頚部内面は斜め方向のハケメ、外面は縦方向のハケメ、口縁部はヨコナデを施す。

高杯（77～81）77～79は高杯の杯部である。77は口径25.6cm。浅く広がる杯底部に外傾し、直立する口縁部がつく。杯底部内、外面はナデ、口縁部はヨコナデ。78は口径33.8cm、浅い杯底部から、わづかに屈折する口縁部に続き、端部は外彎する。口縁部下外面を凸帯状につくりだす。杯底部内面ナデ。外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。79は口径36cm、78と同じ様な器形であるが、杯底部と口縁部の屈折は浅い。杯底部内、外面ともナデ、口縁部ヨコナデ。80、81は高杯の脚部である。同じ様な器形で、脚部は細く、裾部へかけ大きく開く。80の裾部径19cm、内面にシボリ痕が残る。脚部外面はナデ、裾部ヨコナデ。81は裾部径19.2cm、脚部内面横



第20図　SE004井戸出戸土器実測図



第21図　SE004井戸出土土器実測図

方向のハケメ、外面上下方向へヘラミガキを施す。

台付鉢（83）脚部のみであるが、上部は鉢か甕がつくと見られる。裾部径11.9cm、脚部は低く、しまっており裾部へ大きく開く。内面ナデ、外面縦方向のハケメを施す。

器台（82）裾部径15.2cm、口縁部径13.1cm、器高12.7cm。上下方向に開く器形で、口縁部は大きく外彎しくびれ部が上方につく。体部内面ナデ、外面はタタキ、口縁部内面に横方向のハケメを施す。

SE005井戸出土土器（第22図）

甕（84～86）84は口径13cm、器高18.6cm。口縁部は短く「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。体部は球形で、底は平底である。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。85、86は口縁部、胴上半部を欠いている。85は底径 7.0cm。底は平底で、体部はふくらみを持つ。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ。86は底径 7.8cm。安定した底部から細い体部へと続く。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメを施す。

鉢（87～91）87は口径8.8cm、器高5.0cm。小形の手捏土器である。口縁部は直立し、底は平底である。88は口径8.5cm、器高5.3cmの小形の鉢である。口縁部は外方向に開き、底は平底である。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ。89は口径12cm、器高 6.3cm。体部から口縁部にかけ直線的で大きく開く。体部内外面とも縦方向のハケメ。90は口径18.2cm、器高10.1cm。89を大きくした形である。体部内面ナデ、外面ハケメ。91は口径19.2cm、器高11.3cm。口縁部はわずかに外傾し、体部は椀形である。底部は不安定な平底となる。体部内面斜め方向のハケメ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。

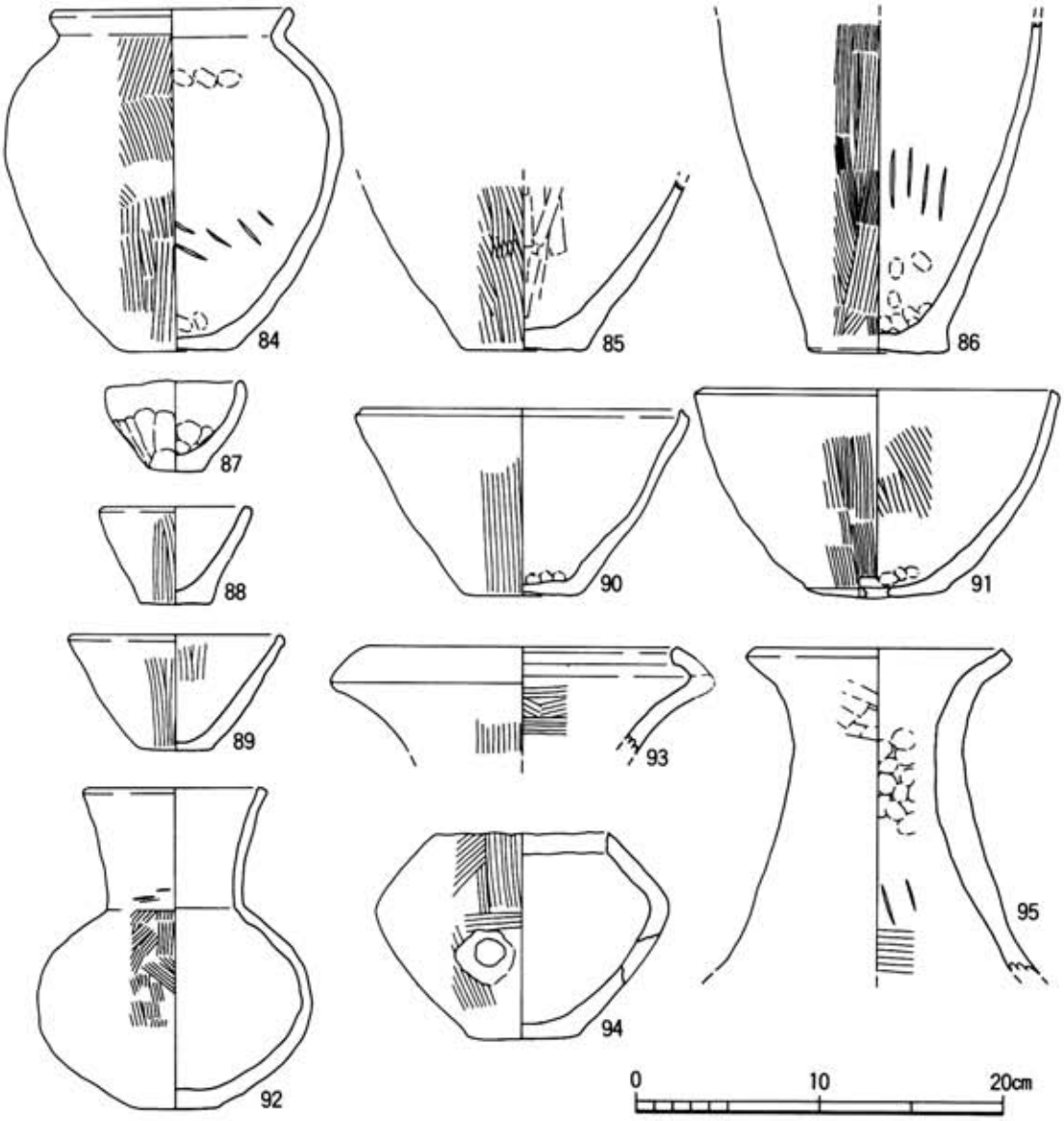
壺（92～94）92は直口壺である。口径10.2cm、器高17.5cm。頚部は長く、口縁部にかけわづかに外反する。体部は球形で、底は不安定な平底となる。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、頚部内外面ともナデ、口縁部ヨコナデ。93は袋状口縁壺で、口縁部と頚部のみ残存する。口径17.2cm。口縁反転部外側に稜をもつ。頚部内面横方向のハケメ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。94は口縁部を欠いている。体部は扁球形で、上半部に最大幅をもつ。胴下半部に内側からの穿孔がある。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメを施す。

器台（95）裾部を欠いている。口径13.6cm。上下に開く器台で、くびれ部が上方につく。体部内面は裾部近くが横方向のハケメで他はナデ、外面はナデを施す。

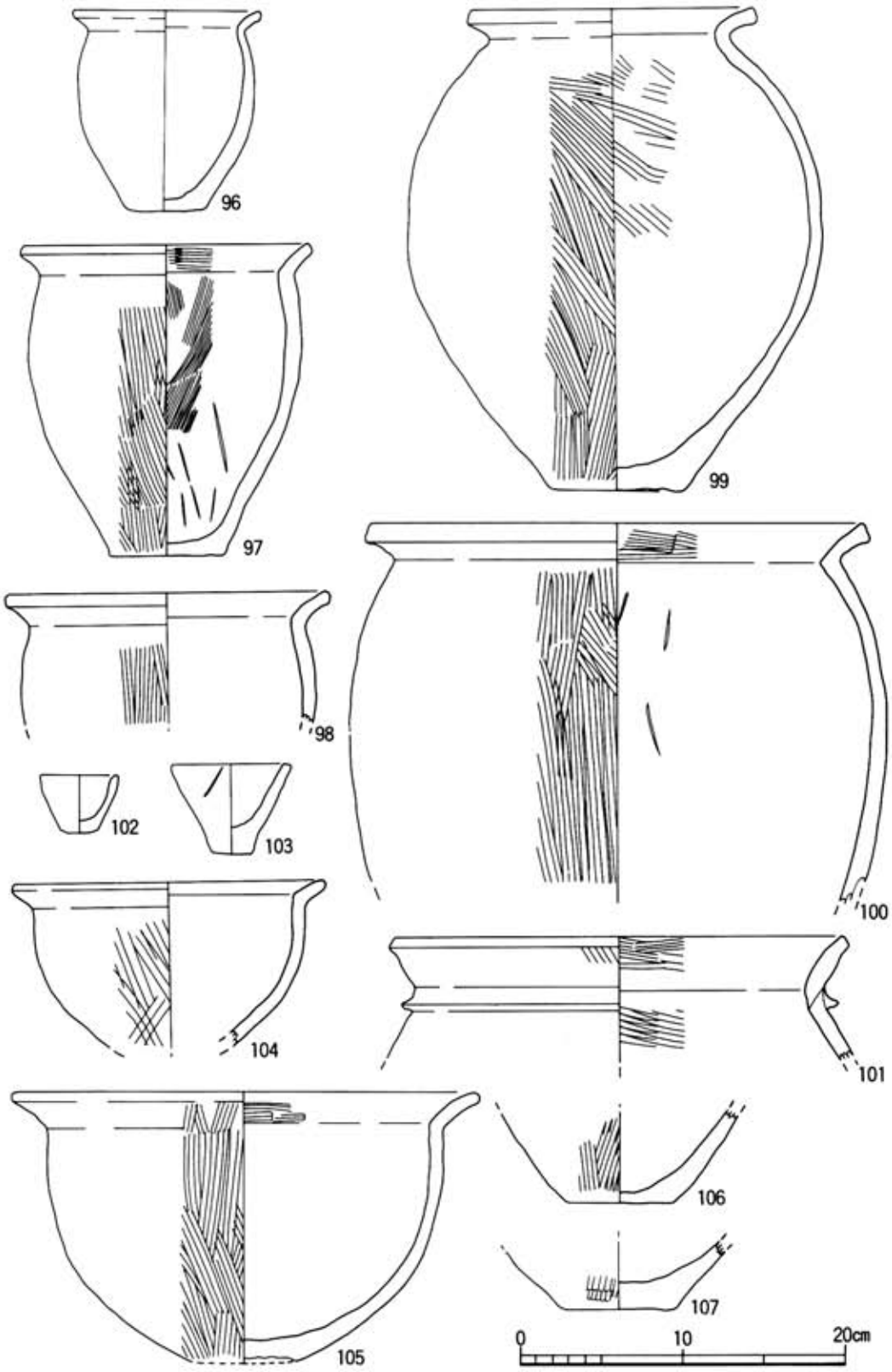
SE007井戸出土土器（第23、24図）

甕（96～101）96は口径11.6cm、器高12.2cmの小形の甕である。口縁部を「く」の字に外反させ、胴部はゆるやかなふくらみをもたせ、底は安定した平底となる。器壁は口縁部は薄く、胴下半部にしたがい厚くなる。体部内外面ともナデ、口縁部ヨコナデ。97は口径18.4cm、器高19.1cm。口縁部は「く」の字で、内面に稜をつくる。胴部のふくらみはわづかで、底は安定した平底である。体部内面は斜め方向、外面は縦、斜め方向、口縁部内側は横方向のハケメ、外側は

ヨコナデ。98は97と同じ器形である。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。99は口径18.1cm、器高29.7cm。口縁部は大きく外反し、肩部はしまる。体部は球形に近く、最大幅は中位ほどにある。器壁は胴下半部で厚みを増し、安定した平底につづく。体部内面斜め方向、外面斜め、縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 100は口径31.3cm。口縁部は「く」の字で内側に明瞭な稜をつくり、胴部はふくらみをもつ。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部内側横方向のハケ、外側ヨコナデ。 101は口径28.5cm、口縁部は「く」の字に外反



第22図　SE005井戸出土土器実測図



第23図　SE007井戸出土土器実測図

し、頸部に細い断面三角凸帯をめぐらす。胴部はふくらみをもつ。体部内面横方向、外面縦方向、口縁部内側横方向、外側は斜め方向のハケメを施す。

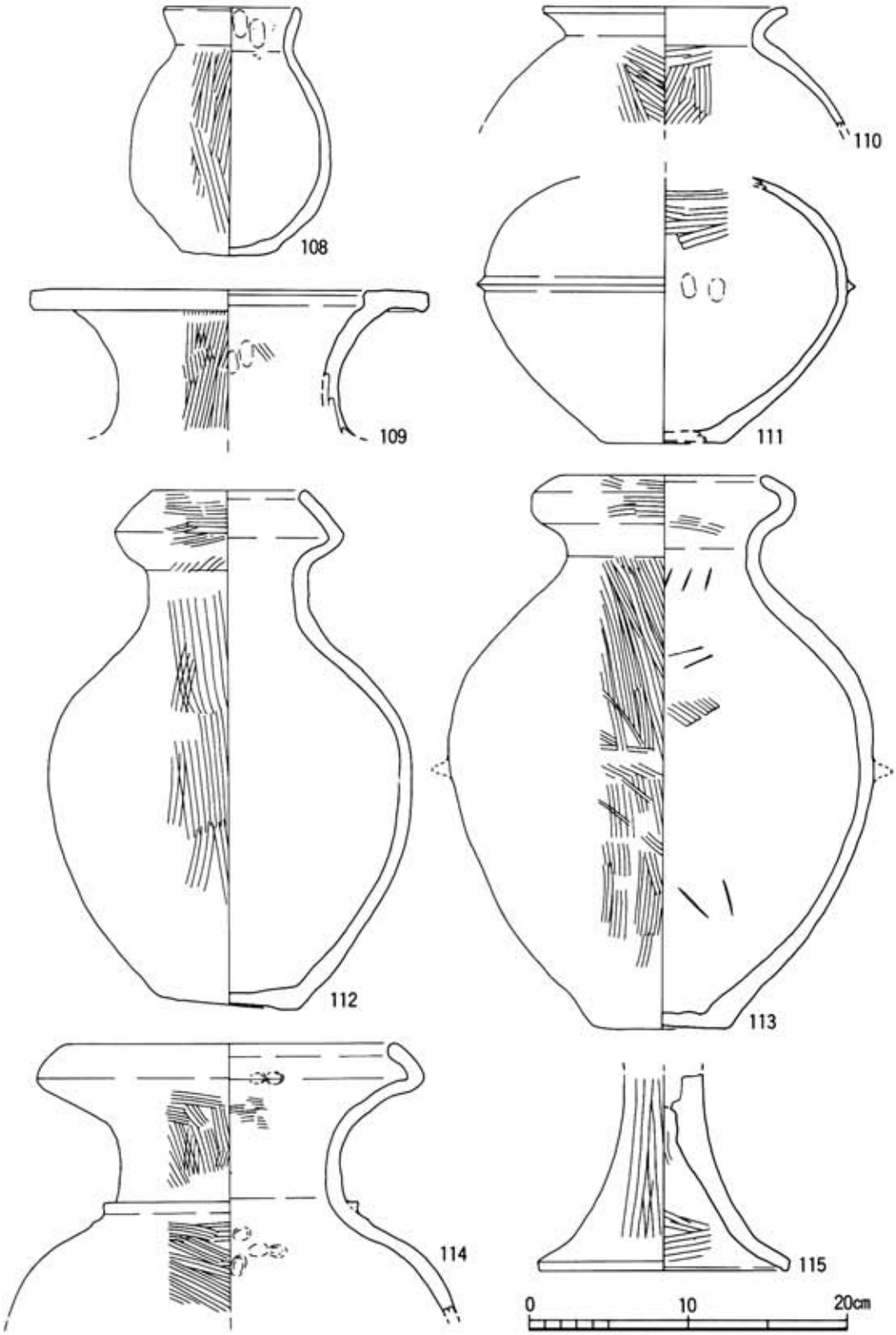
鉢（102～107）102は口径5㎝、器高3.6㎝の小形の土器である。体部はわづかに内彎し、直立する口縁部につづく。底は平底である。内外面ともナデ。103は口径7.5㎝、器高5.6㎝。体部、口縁部とも外方向に直線的に延び、逆円錐台形となる。内外面ともナデ。104は口径16.8㎝。口縁部は「く」の字に外反し、胴部は張りはなく、半球形状となる。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。105は口径29.3㎝、器高16.7㎝。口縁部は「く」の字に外彎し、内側に稜をつくる。体部は半球形で、底は丸底に近い平底である。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ。口縁部内側は横方向、外側は斜め方向のハケメを施す。105、106は鉢か甕の底部である。106は底径6.6㎝、底は薄く、体部にかけ直線的に開く、107は底径7.0㎝。底は厚く、体部にかけ大きく開く。ともに体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメを施す。

壺（108～114）108は口径8.9㎝、器高15.7㎝、口縁部はわづかに外反する。体部はしだいにふくらみ、胴下半部で最大幅となる。底は不安定な平底である。体部内面ナデ、外面は斜め方向のハケメ、口縁部はヨコナデ。109は鋤状口縁壺である。口径25.6㎝、口縁部の上部は平らで、内側への突出は余り見られない。頸部はしまり、球形の体部につづくと見られる。頸部内面ナデ、外面は斜め方向のハケメ、口縁上部は横方向のハケメ、口縁下部はヨコナデ。110は口径15.5㎝。口縁部は大きく外彎し、頸部はしまり、丸みのある胴部へつづく。体部内、外面とも縦、斜め方向のハケメ、口縁部はヨコナデ。111は口縁部を欠く。しまった頸部から球状の胴部につづく。胴部中位に断面三角凸帯を一条めぐらす。底は薄い平底である。体部内外面ともナデ、肩部内側は横方向のハケメ。112～114は袋状口縁壺である。112は口径9.6㎝、器高32.9㎝。口縁反転部外側に稜をもち、口縁端部にかけ直線的に内傾する。頸部はしまり球形の胴部につづく。底は平底である。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、頸部内側はナデ、外側は斜め方向、口縁部外側は横方向のハケメ。113は口径16.6㎝、器高35㎝。口縁反転部は丸くおさめ、短い頸部から球状の体部へと続く。体部中央の最大幅の所に凸帯を一条めぐらす。底部は安定した平底である。体部内面はナデ、外面は縦、斜め方向のハケメ。口縁部は横方向のハケメ。114は口縁部から肩部にかけ残存する。口径24.8㎝。口縁反転部外側に稜をもち、しまった頸部下に断面三角凸帯を一条めぐらし、肩のはる体部へつづく。肩部内面ナデ外面横方向のハケメ、頸部内面横方向、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部はヨコナデを施す。

高杯（115）脚部のみ残存する。裾部径16㎝。しまった脚部からゆるやかに開く。内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメを施す。

SE008井戸出土土器（第25図）

甕（116～118）116は口径16.2㎝、器高15.8㎝。口縁部は外反し、ふくらみの少い体部へつづく。底は安定した平底である。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。117

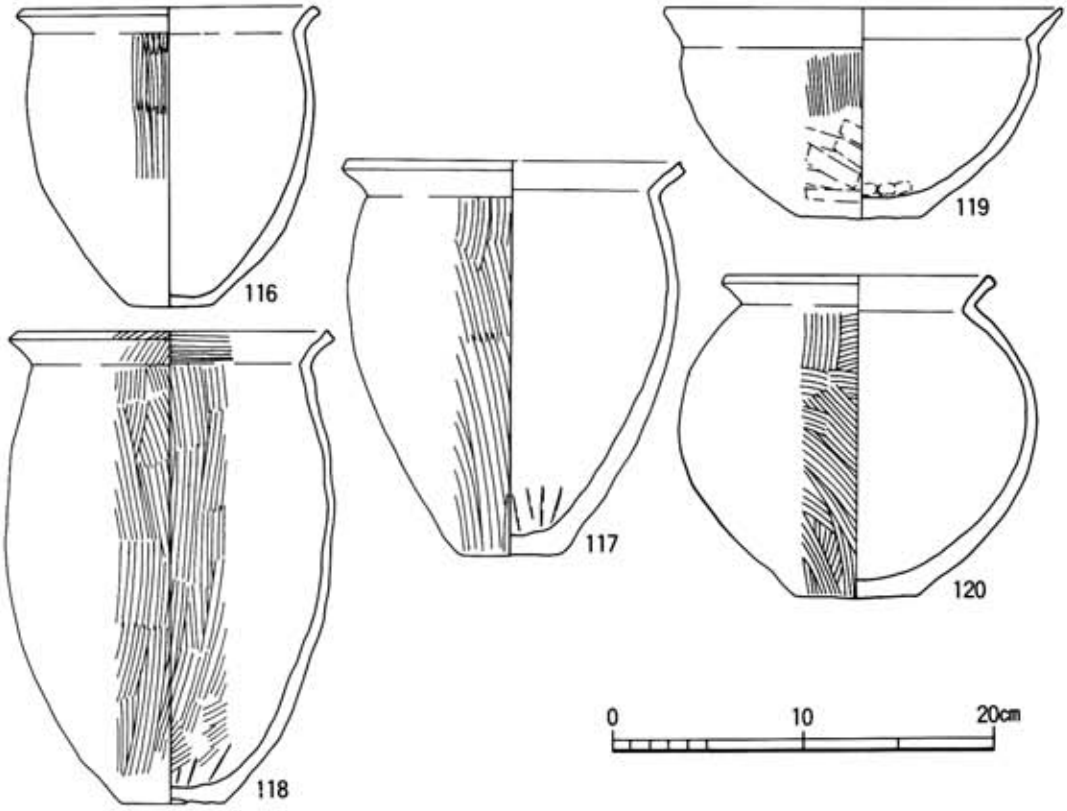


第24図　SE007井戸出土土器実側図

は口径17.6cm、器高20.8cm。口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。体部はふくらみをもち、底は厚い平底となる。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向の荒いハケメ、口縁部ヨコナデ。 118は口径12.6cm、器高25cmの長胴の甕である。口縁部は「く」の字で、端部は外彎し、内面に稜をつくる。胴部は長く、わずかなふくらみをもつ。底は安定した平底である。体部内外面とも縦、斜め方向のハケメ、口縁部内側、横方向のハケメ、外側斜め方向のハケメを施す。

鉢（119）口径20.8cm、器高11.1cm。口縁部は「く」の字に外反し、端部が細くなる。内面に明瞭な稜をつくる。体部は半球形で、底は安定した平底となる。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。

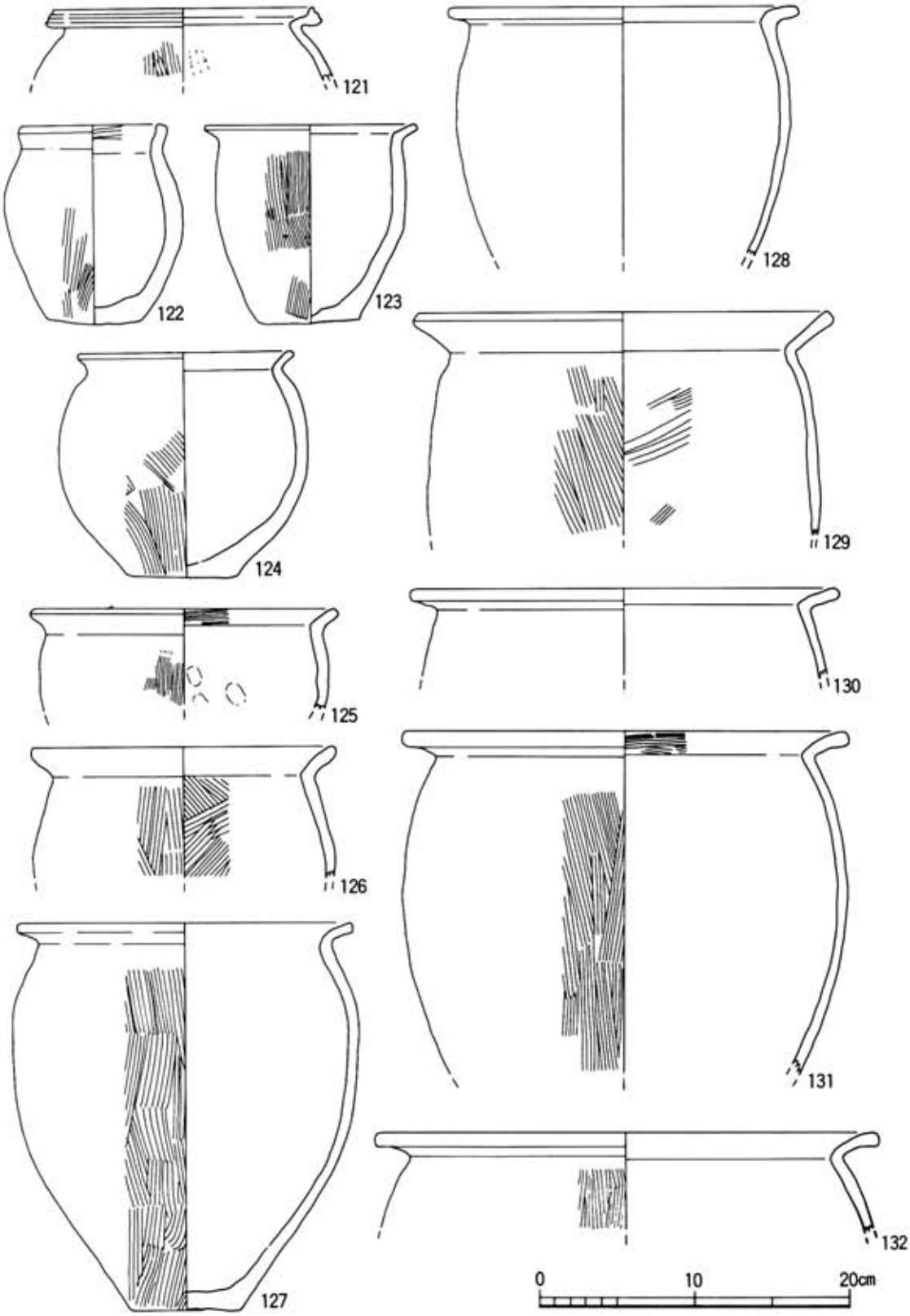
壺（120）口径14.4cm、器高17cm。口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。体部は球形で、器壁は胴下半部にいく程しだいに厚くなる。底は安定した平底である。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。



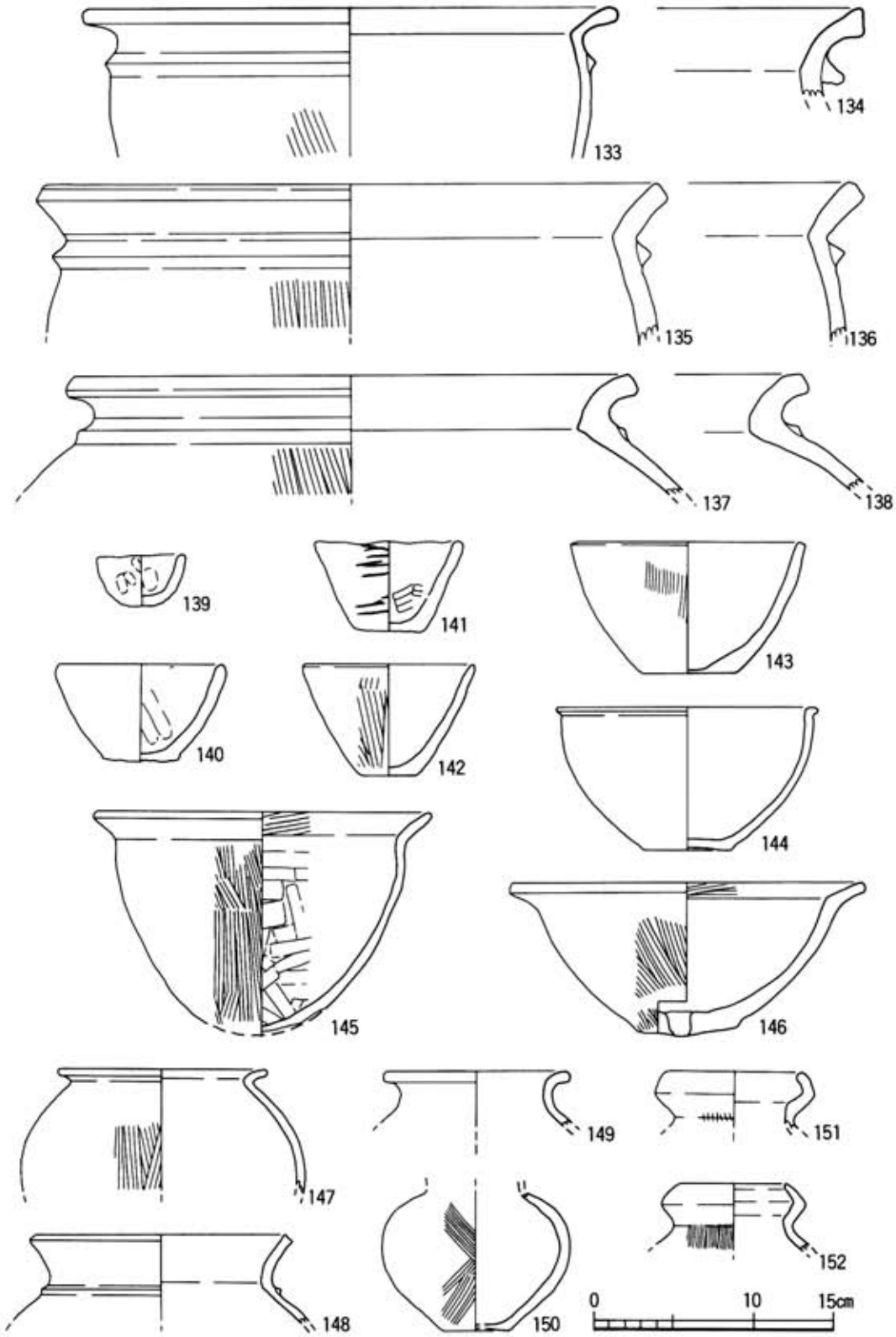
第25図　SE008井戸出土土器実測図

B～C間黒褐色泥質土内出土土器（第26～28図）

甕（121～138） 121は瀬戸内系の甕である。口縁部から肩部にかけ、2分の1程残存する。口径18.2cm。頸部を「く」の字状に屈曲し、端部を肥厚させ、2本の浅い凹線をめぐらす。体部はふくらみをもち、器壁は薄い。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。体部外面に煤が付着する。 122は口径9.8cm、器高12.9cm。口縁部はわづかに外反する。体部はふくらみ、不安定な平底につづく。器壁は厚く、歪のある粗雑な造りである。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部内側横方向のハケメ、外側ヨコナデ。 123は口径13.9cm、器高12.9cm。口縁部は「く」の字に屈折し、体部のふくらみはなく、底は安定した平底となる。体部内面ナデ、外面縦斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 124は口径14.2cm、器高14.6cm。短い口縁部を「く」の字に外反させ、体部は丸みをもたせている。底部は安定した平底となる。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 125は口径20.2cm、短い口縁部は「く」の字に外反し、内面に稜をつくる。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部内側、横方向のハケメ、外側ヨコナデ。 126は口径19.9cm。口縁部は「く」の字に外反し内面に稜をつくる。体部内外面とも縦、斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 127は口径22cm、器高25.1cm。口縁部は鋭く外反させるが内面は丸みをもたせる。体部はふくらみがあり、胴部最大幅は中央より上位にある。底は安定した平底である。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 128は口径22.8cm。口縁部は「逆L字」で厚みがある。体部のふくらみはわづかで、最大幅は体部上位になる。体部内面ナデ、外面ハケメ、口縁部ヨコナデ。 129は口径27.3cm。口縁部は「く」の字に直線的に外反し、内面に稜をつくる。体部のふくらみはない。体部内外面とも斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 130は口径28cm。口縁部は内傾する「逆L字」状である。体部内面ナデ、外面ハケメのあとナデ、口縁部ヨコナデ。 131、 132は同じ器形である。 131の口径29cm、 132は30.8cm。口縁部は内傾した「逆L字」状で口縁端部を外彎させ、体部にふくらみをもたせる。 131は体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 132は体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 133は口径34cm。口縁部は内傾する「逆L字」で、口縁部下に断面三角凸帯を一条めぐらす。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 134は復元口径48cm。口縁部のみ残存する。口縁部は大きく外反させ端部を肥厚くつくり頸部に断面三角凸帯を一条めぐらす。口縁部ヨコナデ。135、 136は同じ器形である。 135の口径40cm、 136は46cm。口縁部は「く」の字に外反させ、内面に稜をつくる。頸部に断面三角凸帯を一条めぐらす。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部内面横方向のハケメ、外面ヨコナデ。 137、 138は同じ器形である。 137は口径36.2cm、 138は39cm。しまった頸部から、短い口縁部を大きく外彎させる。肩部は張り、体部は丸みをもつ。頸部下に断面三角凸帯を一条めぐらす。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデを施す。



第26図　B～C間黒褐色泥質土内出土土器実測図

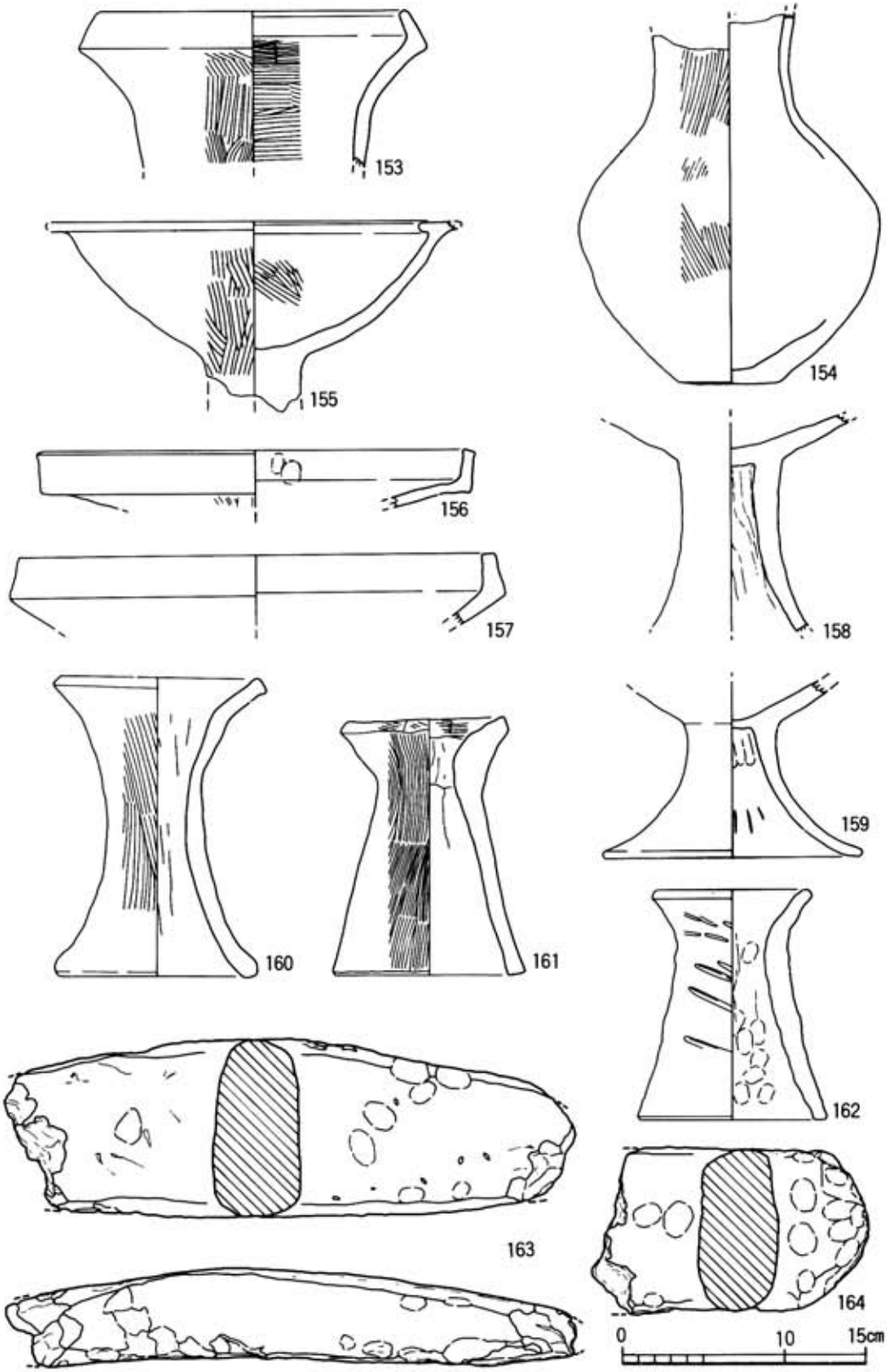


第27図　B～C間黒褐色泥質土内出土土器実測図

鉢（139～146） 139は口径5.7cm、器高3.2cm。小形の手捏土器である。口縁部はわづかに開き、底は丸底である。140は口径10.9cm、器高6.1cm。体部は内彎し、口縁部は開く。底は不安定な平底である。体部内外面ともナデ、口縁部ヨコナデ。 141は口径9.5cm、器高5.7cm。体部から口縁部にかけ直線的で外傾し、底は平底である。体部内面ハケのあとナデ、外面ナデ、口縁部ヨコナデ。 142は口径11cm、器高７cm。体部から口縁部にかけ直線的に外傾し、底は平底の逆円錐台形となる。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 143は口径14.8cm、器高8.2cm。体部は内彎し、口縁部は外傾する。底は薄い、平底である。体部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。144は口径16.6cm、器高8.9cm。直口する口縁部は短く屈折させ、上端部に平坦面をつくる。体部は半球形で、底は平底である。体部内外面ともヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。 145は口径21cm、器高14cm。口縁部は「く」の字に外反し、体部は半球形である。底部は欠損するが、平底になると見られる。体部内面ナデ状のヘラケズリ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。146は口径22.4cm、器高9.6cm口縁部は「く」の字に外反させ、内面に稜をつくる。体部は半球形で、底は不安定な平底である。底部には内側から外側へ直径1.4cmの穿孔がある。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ、口縁部内面横方向のハケメ、外面ヨコナデを施す。

壺（147～154） 147は口径13.4cm。口縁部は大きく外反させ、体部は球形である。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 148は口径16.8cm。口縁部は「く」の字に外反し、球形の体部につづく。頸部下に小さい断面三角凸帯を一条めぐらす。体部内面ナデ、外面ハケメ、口縁部ヨコナデ。 149は口径11.9cm。口縁部は大きく外彎し、頸部はしまり、張りのある肩部につづく。頸部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 150は口縁部を欠く。肩部は張り、体部は球形で、底は薄い平底となる。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ。151、152は小形の袋状口縁壺である。口縁部から頸部にかけ残存する。 151の口径11.5cm、 152は6.9cm。口縁部は内傾し、短い頸部につづく。頸部内面ナデ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 153は口径19.6cm。口縁反転部が「逆く」の字形をなし、頸部はしまる。頸部内面横方向のハケメ、外面縦方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。 154は長頸壺で口縁部を欠く。頸部はしまり、体部は球形で、底は平底である。頸部、体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメを施す。

高杯（155～158） 155は口径26cm。口縁部は鍬状で、上面は平坦に仕上げており、内側への突出がある。杯底部は半球形で、太い脚部につづく。杯底部内面斜め方向、外面縦、斜の方向のハケメ。口縁部ヨコナデ。 156は口径27.5cm。浅い杯底部に、直口する口縁部がつく。杯底部内面ナデ、外面ハケのあとナデ、口縁部ヨコナデ。 157は口径29.7cm。内彎する杯底部に、内傾する口縁部がつく、口縁部ヨコナデ。 158は高杯の脚部である。浅く広がる杯部に、長い脚部を接合する。脚部内面にしぼり痕が見られ、外面ヘラミガキ、杯底部内面ナデ、外面ヘラ



第28図　B～C間黒褐色泥質土内出土土器実測図

ミガキを施す。

脚部（159）脚部のみで上部は鉢か甕が付くと見られる。裾部径16.2cm。脚上部はしまり、裾部にかけ朝顔形に広がる。脚部内、外面ともナデを施す。

器台（160～162）いづれも上下方に開く。160は口径13.4cm、裾部径12.8cm、器高18.6cm。口縁部は裾部より広く、大きく外彎し、くびれ部が中位にある。体部内面ナデ、外面縦、斜め方向のハケメ、口縁部、裾部ヨコナデ。161は口径10.4cm、裾部径12cm、器高15.8cm。くびれ部が上位につき、口縁部下の器壁を肥厚して造る。体部内面ナデ、外面斜め方向のハケメ。口縁部横方向のハケメ。162は口径10cm、裾部径11.9cm、器高14.3cm。口縁部は外反し、くびれ部が上位につく。体部内面は指頭圧痕がつき、外面はタタキの痕が残る。口縁部、裾部はヨコナデを施す。

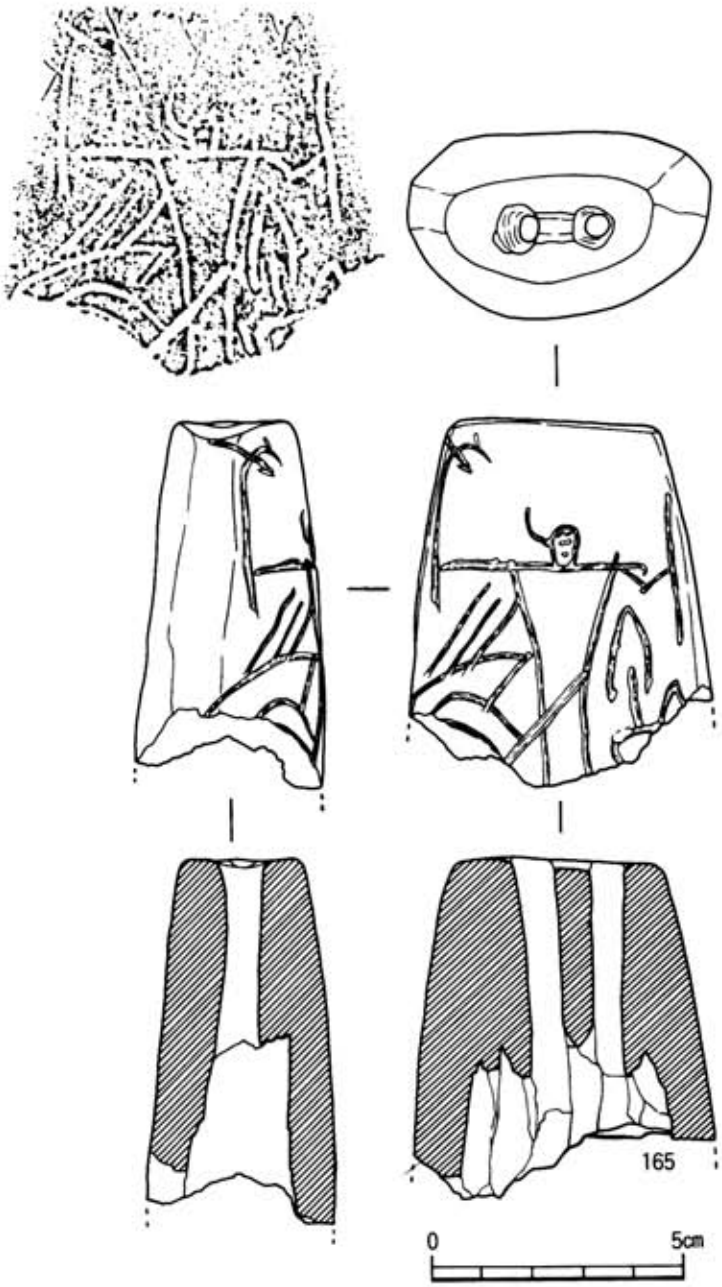
粘土帯状土製品（163、164）163は両端を欠くがほぼ完形である。長さ36cm、幅11cm、厚さ5.2cm。粘土魂を帯状にし焼成したもので、胎土中に砂粒、繊維、籾を含んでいる。表面は指押え後にナデている。164は3分の1程が残存する。現存の長さ17cm、幅10.2cm、厚さ5cm。表面には全面に指押えの後が残る。これらは土器製作時の粘土帯を焼成したとも見られるが、同じ様な形の石製品も出土しており用途は明らかでない。

(2) 鐸型土製品（第29図165）

調査区の東側1～J間に位置する柱穴P86から出土した。柱穴P86は長さ1.4m、幅0.7mの長方形で、ほぼ中央に段を有し、浅い南側で0.2m、深い北側で0.6mである。深い北側には丸太を半載した長さ55cmの横木があり、横木の下には枝木を10数木敷き込み枕木としている。土製品は柱穴の南西端から線刻した面を上にした状態で出土した。

土製品は扁平な釣鐘状で、下端部を欠損している。現状の長さ7.2cm、復元すると15cm程となる。上端部の幅4.1cm、厚さ2.2cm、下端部の幅6.0cm、厚さ3.8cmである。上面には横例して2ケ所穴がある。穴は直径0.6cm、焼成前に竹ヒゴ状のもので、上部より穿孔しており、穴の回りは磨耗している。土製品の内面は空洞で、細いヘラ状の物で削り取っており、外面に比べ粗雑な造りである。横断面は表面は丸みを帯びているが、裏面は平らである。丸みのある表面に鋭利な工具で線刻文様を描いている。

文様は中央に人物像、その両側に動物を描いている。人物像は小さな顔に目、鼻、口をはっきり描き、頭部は長髪を結い上げている。手は右手（左側）を真横に延ばし戈か剣状の武器をかかげ、左手（右側）は曲げ盾状のものを持っている。体部はがっちりとした逆三角形をしており、腰には刀を帯びている。両側の動物像は欠損していることもあり、明らかでないが、左側の文様は猪と見られ背中に3本の逆髪状のものを描いている。右側の文様ははっきりしないが、動物の頭部と見られる。



第29図鐸型土製品実測図

(3) 石　器

石包丁（第29図166～170）

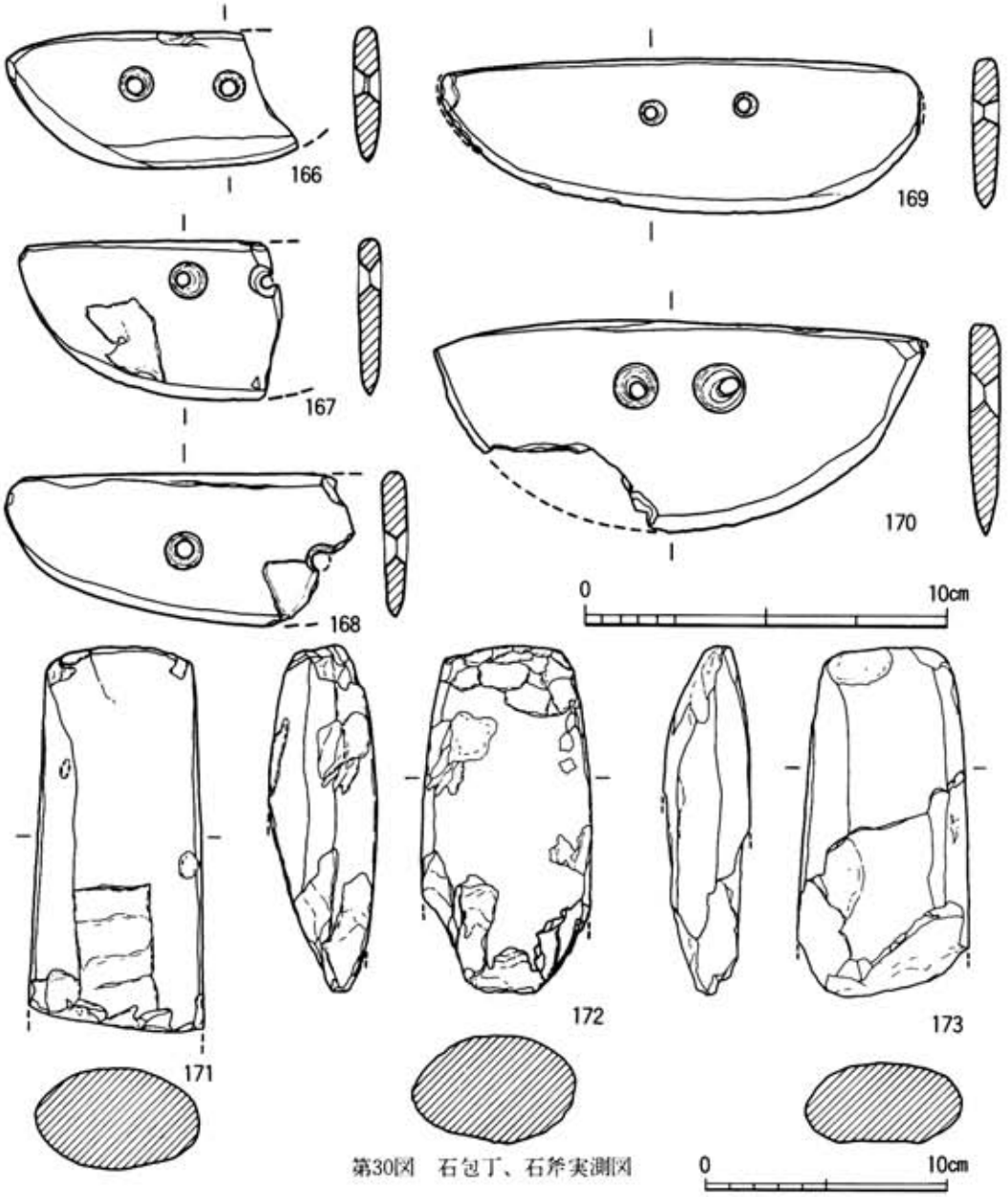
166はSB004掘立柱建物柱穴P15から出土した。4分の1程を欠損する。幅3.8cm、厚さ0.8cm。輝緑凝灰岩製で、肩部端が丸みをもつ外彎刀半月形である。幅の割には厚さがあり、刀部は鋭い。紐通し穴は直経0.5cm、両側より穿孔している。紐通し穴中心間の長さは2.6cm。

167はB～C間黒褐色泥質土内より出土した。3分の1程を欠損する。幅4.5cm、厚さ0.6cm、泥質砂岩製である。肩部が直線的な外彎刀半月形で、刀部は鋭利である。紐通し穴は直径0.4cm、両側より穿孔している。紐通し穴中心間の長さは2.4cm。

168はB～C間黒褐色泥質土内より出土した。3分の1程を欠損する。幅4.3cm、厚さ0.7cm。輝緑凝灰岩製で、扁平な外彎刀半月形をしている。刀部は他に比で鈍い。紐通し穴は0.5cm、両側より穿孔している。紐通し穴中心間の長さは3.8cmである。169はK～L間黒褐色泥質土中より出土した。長さ13.3cm、幅4.3cm、厚さ0.75cm。形態は扁平な外彎刀半月形で168と似る。紐通し穴は直径0.4cm、両側より穿孔している。紐通し穴中心間の長さは2.65cm。170はB～C間黒褐色泥質土内より出土した。刀部の一部を欠くがほぼ完形で、長さ13.7cm、幅5.9cm、厚さ0.8cm。形態は背部が直線で、幅がある外彎刀半月形である。刀部は鋭く体部との境が明瞭でない。紐通し

穴は直径0.4cm、両側より穿孔している。紐通し穴中心間の長さは2.5cmである。

石斧（第29図171～173）３個とも玄武岩製の大形蛤刃石斧である。171はＫ～Ｌ間の黒褐色泥質土中から出土した。現存の長さ16cm、幅7.4cm、厚さ4.3cmで、刃部を欠損する。形態は短冊形で、断面は楕円形である。表面は良く研磨している。172はＢ～Ｃ間黒褐色泥質土内より出土した。刃部と頭部を欠損する。現存の長さ14.5cm、長さ7.1cm、厚さ4.6cm。断面は厚みのある楕円形で、表面は研磨している。173はＢ～Ｃ間黒褐色泥質土内より出土した。刃部と頭部を欠損する。現存の長さ14.5cm、幅７cm、断面は扁平な楕円形である。



第30図　石包丁、石斧実測図

(4) 木製品

木製品には鍬、鎌、斧の柄、杵などの木器と柱根、横木などの建築材がある。木器はＳＥ 007井戸から、建築材は掘立柱建物の柱穴より出土した。

木器(第31図)

平鍬 (174) 長さ39cm、幅18.1cm、厚さ 1.4cm。身の部分のみ完形で出土した。頭部の先端は尖がり、頭部より刃部にかけて緩やかに広がる。柄孔は長さ 6 cm、幅 4 cmの長方形で、約45°の角度をもって着柄していたと見られる。角は仕上げ時に面取りを行い、身の表面には 1.5cm幅の削り痕が残る。

杵 (175) 搗部の18.9cmが残る。断面は円形で、直径 7.7cm、先に向う程太くなり、搗部先端は磨滅している。木取りは縦木取りで、心材は用いない。

鎌の柄 (176) 全長48cmの完形品である。柄元は鎌先にそって山形に作り出し、長さ 3.6cm、幅 1.1cmの着装孔を、柄に対して直角に穿っている。柄の断面は 2.1× 1.9cmの楕円形である。両先端の突起には 1 cm幅の削りが見られる。

斧の柄 (図版24の２) 全長96cmの未製品である。台部は長さ24.6cm、幅 8.2～ 3.2cm、厚さ 4.1～ 2.5cm。上面は平坦で基部は細く、先に行く程太くなる。断面は基部が長方形、先端は台形になる。握部は長さ86.6cm。断面は 2.4× 2.1cmの楕円形で末端は尖がっている。木取は樹幹と樹被の枝分かれ部分を利用し、樹幹を台部に樹被を握部に当てている。台部握部共に心材を利用している。

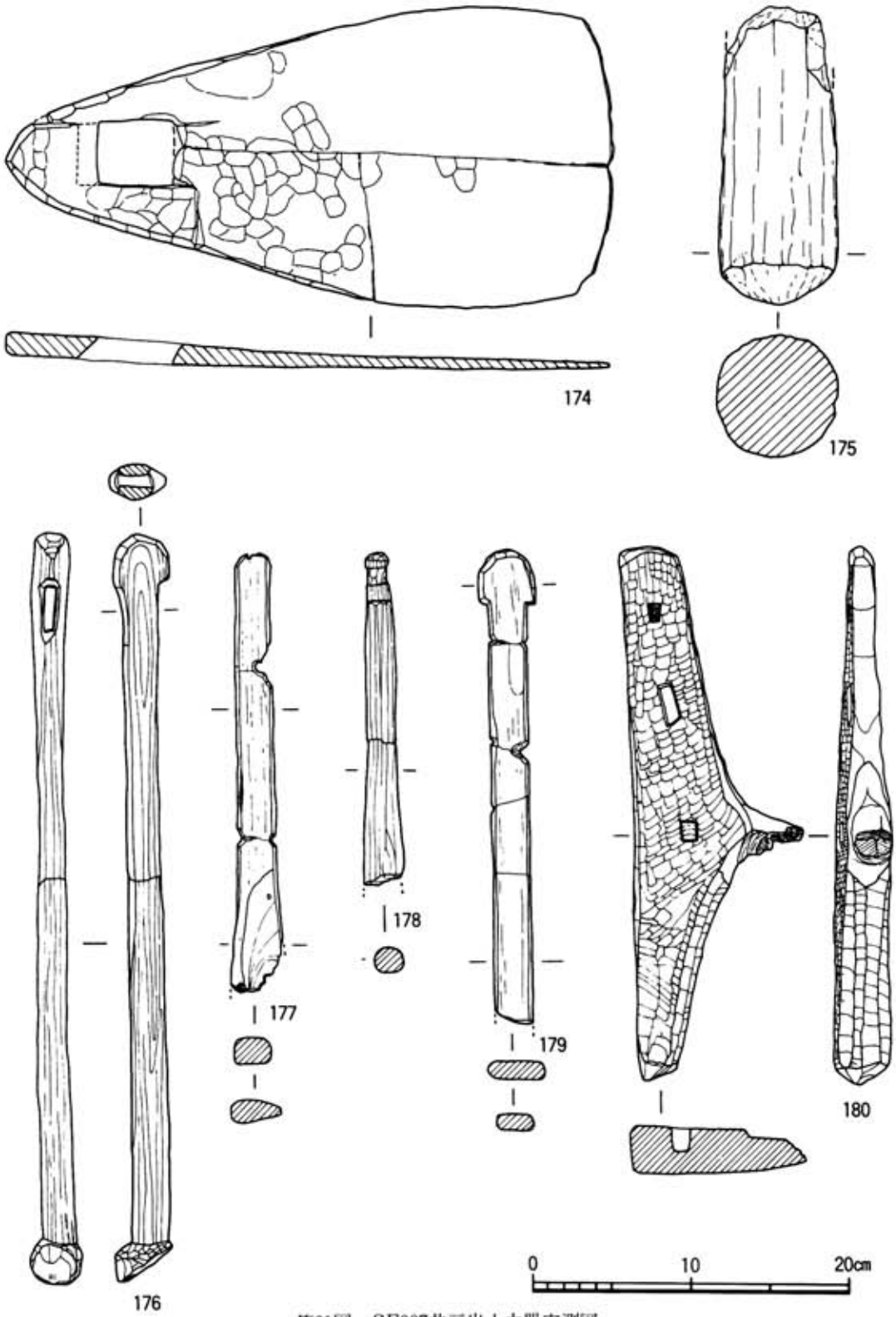
ヘラ状木製品 (177) 現存の長さ28cm、刃部の先端を欠損している。柄の部分は長さ20cm、幅 2.4cm、厚さ 1.7cmの隅丸方形で、末端に0.25cm程の穴を穿っている。刃の部分は現存の長さ 8 cm、現存の幅 3.2cm、厚さ 0.4～ 1.6cm、断面は三角形で刃部のみに削り痕が残る。

不明木製品 (178) 現存長さ21.3cm、断面は 1.8× 1.6cmの楕円形である。基部より１～ 1.2cmの間を削り、突起を作り出している。突起部分は細かい削り痕が見られ、その他は幅 0.2cmの細長い削りを施している。

不明木製品 (179.180) 179は 180の中央の穴に組み合う状態で出土した。 180は長さ33.8cm、幅10.8cmのトの字形をしているが柄の部分は欠損している。体部の中央から上に方形の穴を３ケ所穿っている。上の穴は 1.2× 0.8cmで、組み合う木片が残る。中央の穴は 2.1× 1.1cm、下の穴は 1.3× 1.1cmで、完通しない。全体的に作りは丁寧で、角は 1 cm幅の判りで整形し、他の部分にも細かい削り痕が残っている。木取は、樹幹と樹枝の枝分かれを利用している。179は現存長30.3cmで上部先端を半円形に作り出している。断面は隅丸方形で、厚さ１～ 1.2cm。丁寧な作りで、削りは上部先端のみに見られる。柾目材を使用している。

建築材(第32～34図)

川寄吉原遺跡で検出した柱穴は 100ケ所以上にのぼる。この中で掘立柱建物の規模が確認で



第31図　SE007井戸出土木器実測図

きた19棟、85の柱穴のうち、柱材が残存していたのは17棟、72の柱穴である。柱材には柱根、横木、枕木及び礎板があり、柱材の据付方法は大きく４つに分類することができる。

Ⅰ類　下端部を平坦にしただけの柱材をそのまま建てるもので、ごく一般的な方法である。この方法を取る建物はＳＢ002.003.018建物などの柱穴12例がある。建物の規模は１間×１間で、桁行が 3.3～2.75m 、梁行が2.85×2.4m と小規模である。

Ⅱ類　柱の下面を二股に削り、ここに横木を渡したものである。この方法を取るものはＳＢ004.007.011建物などの柱穴43例（この内横木のみが残存するものが18例）がある。建物の規模は１間×１間の建物の他、２間×１間、３間×２間の建物にも見られるが、Ⅱ類のみを用いる建物は１間×１間の建物のみで、他はⅢ類、Ⅳ類の併用である。

Ⅲ類　柱根に横木を渡し、さらに枕木により補強したものである。この方法を取るものはＳＢ008建物Ｐ28、ＳＢ012建物Ｐ52、Ｐ54、ＳＢ017建物Ｐ76、Ｐ77などの柱穴12例(この内横木と枕木が残るもの４例、枕木のみが残るもの１例）がある。この方法は一棟の柱穴すべてに用いることはなく、３～１の柱穴がこの方法をとっている。建物の規模は１間×１間の建物の一部と、２間×１間、３間×２間の建物がこの方法を取る柱穴が含まれる。

Ⅳ類　Ⅳ類は柱底に礎板を敷くもので、この例は少く、ＳＢ012 建物Ｐ48～Ｐ51の４例がある。

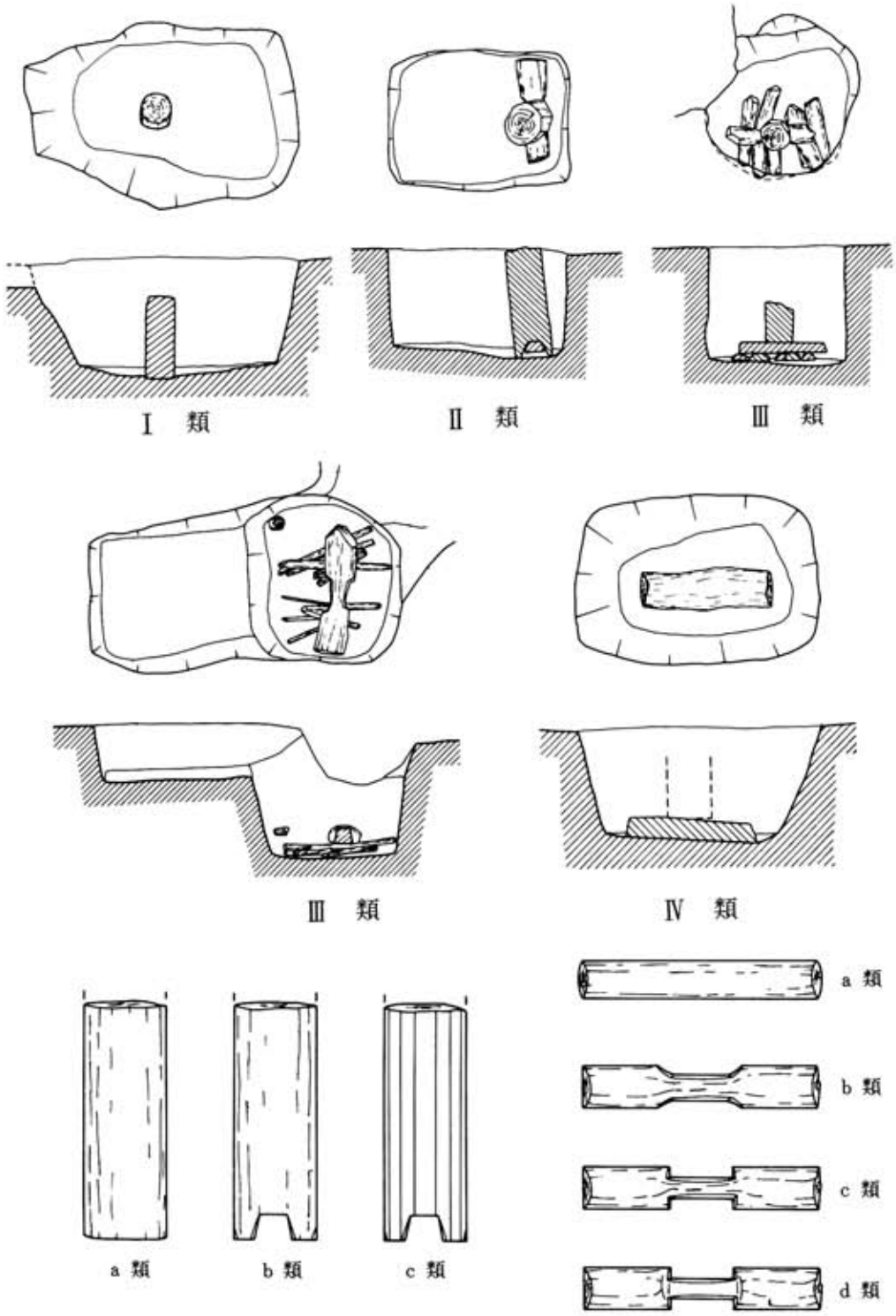
17棟の建物の中でⅠ～Ⅳ類の建物構成を見ると、Ⅰ類を用いる建物４棟、Ⅱ類のみの建物６棟、Ⅱ、Ⅲ類を併用する建物６棟、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類を併用する建物１棟である。

柱根は丸太材の下端部を平坦にしただけのもの（Ａ類）や、下端にくりこみをいれただけ(Ｂ類）でそのまま使用したものもあるが、ほとんどは柱の表面をノミ状のもので丹念に削り面取りを行っている（Ｃ類)。ＳＢ008建物Ｐ28柱根は、えぐりの上面で11面体に仕上げており、一面体の幅は 5.5～４cm、又ＳＢ016 建物Ｐ72柱根は15面体に仕上げており、一面体の幅は 5.5～２cmである。

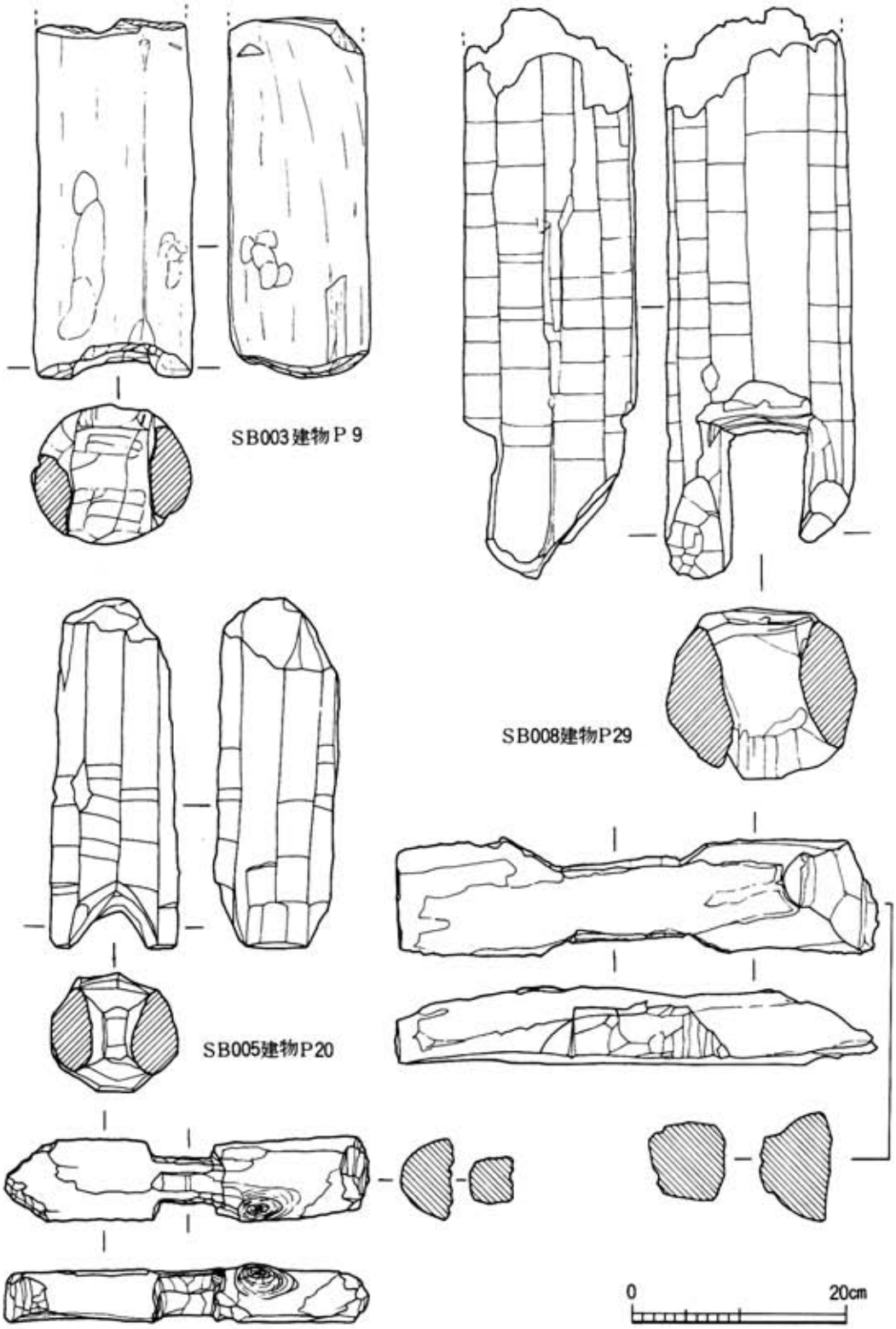
柱根の直径は26.6～14cmと幅がある。代表的な建物柱根の直径平均値は、ＳＢ003建物が14.6cm、ＳＢ012建物が21.9cm、ＳＢ016建物が19cm、ＳＢ017建物が20.4cm、ＳＢ018建物が11.7cmと建物の規模が大きくなる程、柱の大きさも太くなる。

横木は丸太材を半截し、中央の両側を削ったものが多いが、中には丸太材の両端を切断したままで使用したもの（Ａ類）がある。又前者にもくり込み部を両側から斜めにＵ字状に削り取っているもの（Ｂ類）とコの字状に直線的に判り取ったもの（Ｃ類）がある。又コの字状に削り取っているものの中にはさらに、柱を固定させるため横木の上面を平らに削っているもの(Ｄ類）がある。

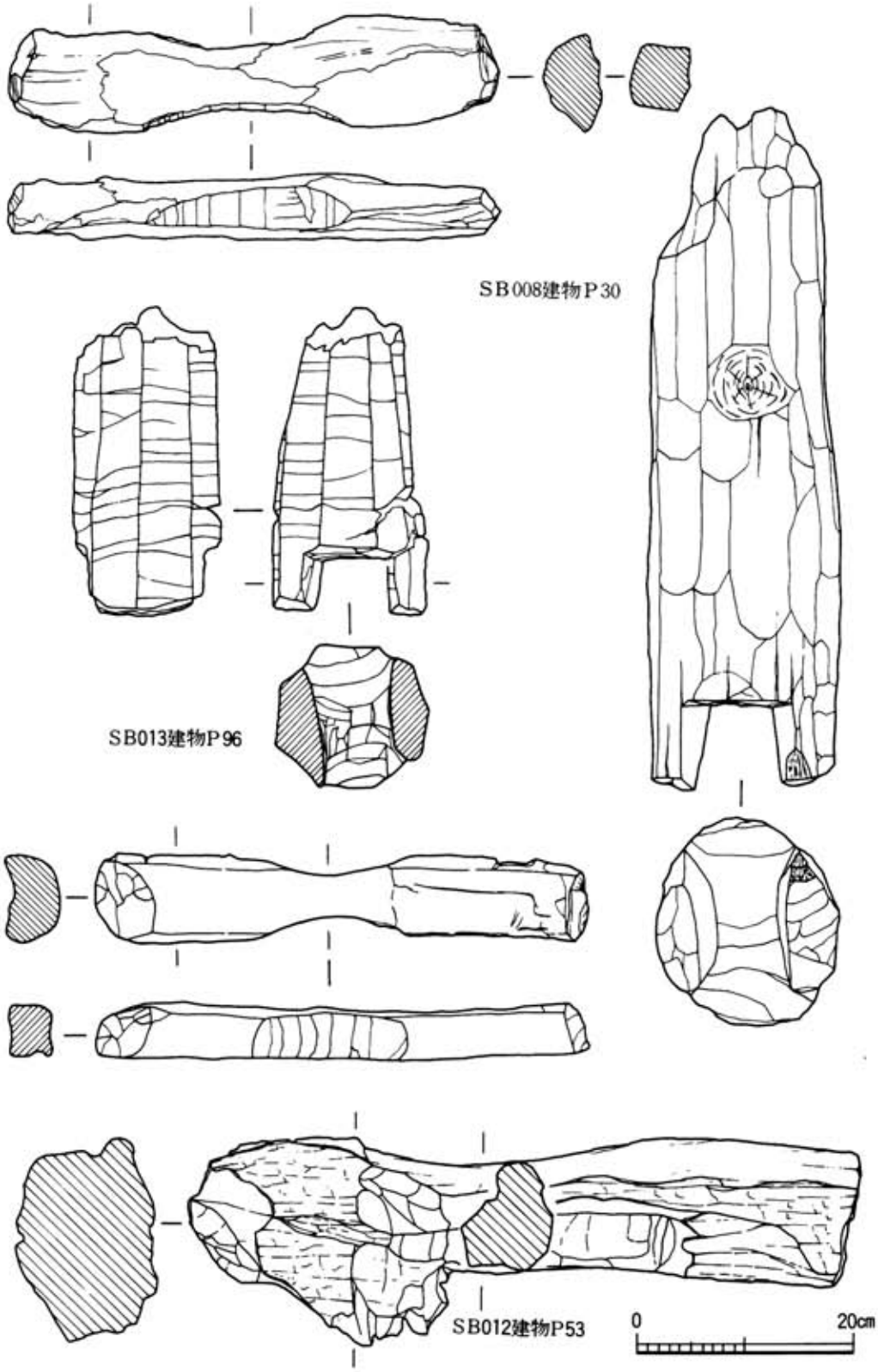
礎板は、丸太材を半截して使用したものと、板材を用いたものの二通りがある。



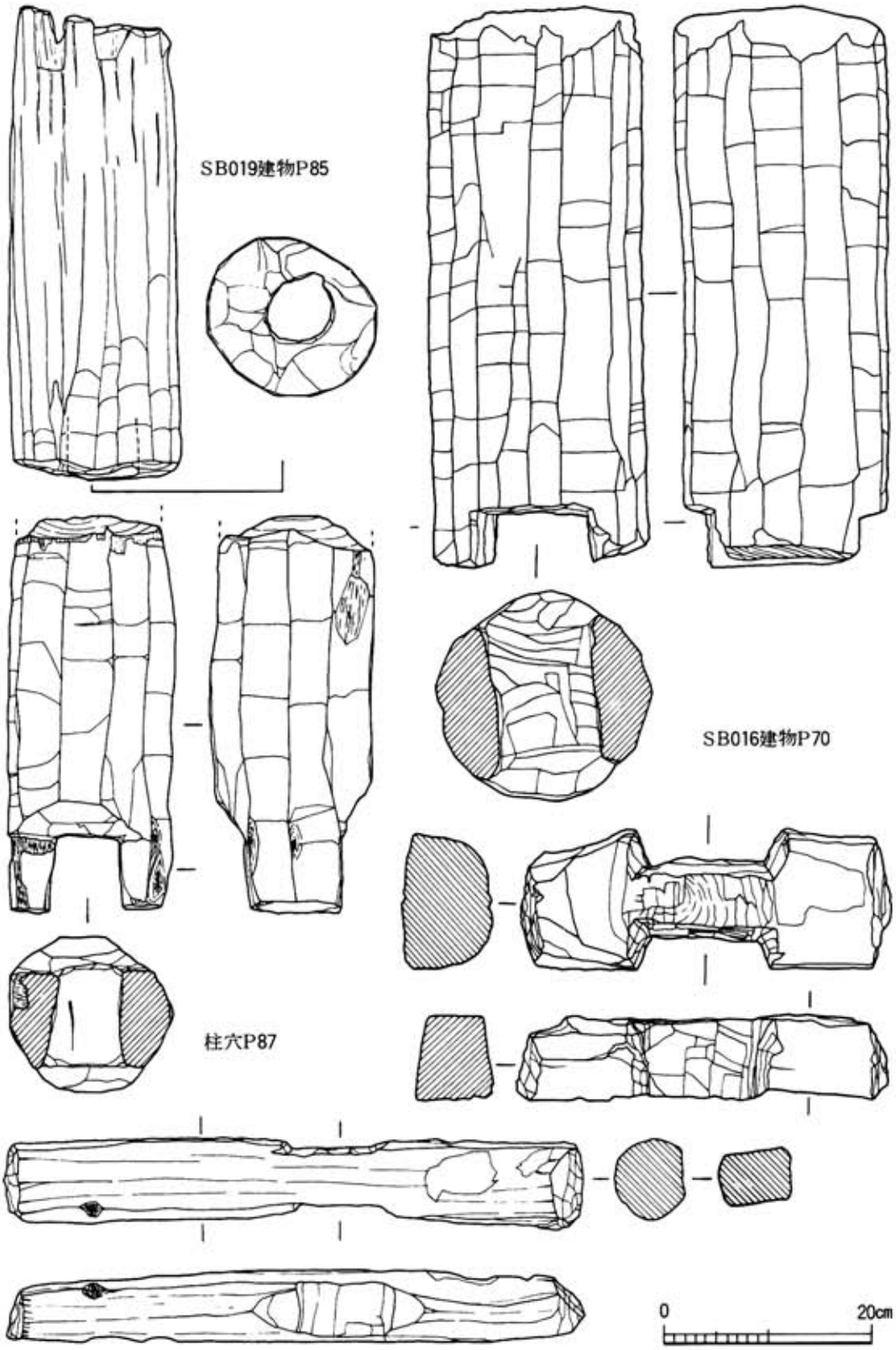
第32図　柱材据付状態及び柱根・横木分類図



第33図　柱根、横木実測図



第34図　柱根、横木実測図



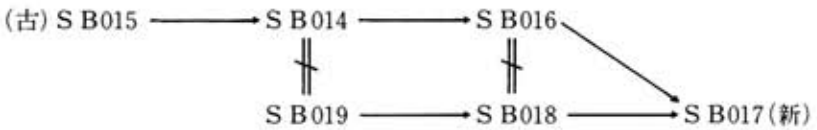
第35図　柱根、横木実測図

Ⅲ　総　括

神埼町大字竹地区の遺跡は、川寄遺跡群、利田遺跡群、野田遺跡群、伏部遺跡群に分かれ、それぞれ広範囲に広がっている。川寄遺跡群の一つ川寄吉原遺跡は、川寄若宮遺跡と利田遺跡群の中間に位置し、東西80m、南北50mのまとまりを持つ遺跡である。調査は遺跡の南端を支線排水路が通ることとなり、この部分の約850㎡について行った。遺構、遺物はこれまで述べたとおり豊富な内容を持っており、それぞれについてまとめることとする。

遺構は掘立柱建物跡、円形周溝、溝、井戸跡がある。注目される遺構は、掘立柱建物跡で19棟を検出した。建物の規模は、3間×2間の建物が1棟、2間×1間の建物が3棟、1間×1間の建物が15棟である。この他にも柱穴が20ケ所以上あり、建物は調査区の南、北側に延びていると考えられる。建物の配置を見ると3間×2間、2間×1間の建物は遺跡の中央に、1間×1間の建物は遺跡の両側に配置されている。建物の方向は統一性はなく、桁行方向を南北に向ける建物が16棟、東西に向ける建物が3棟である。

建物はＳＢ001と002建物、ＳＢ017～019建物のように重複するものが多く、こうした例は5ケ所、14棟の建物に見ることができる。この中で建物の前後関係が半別できたのは3ケ所である。まずＳＢ005とＳＢ007建物の関係は、ＳＢ007建物の柱根が抜かれており、これはＳＢ005建物を建てる際取り除いたものであり、ＳＢ005建物が後出する。このことはＳＢ010.011建物との間にも言え、ＳＢ011建物が後出する。又ＳＢ014～019建物の関係は、Ｐ62と66柱穴、Ｐ63と70柱穴との切合い関係からSB 015建物が古く、次いでＳＢ014建物、ＳＢ016建物の順になる。さらにＳＢ017～019建物の関係は、Ｐ79柱穴を各建物が共有しているが、柱根はＳＢ017建物のものが残っておりＳＢ017建物が後出する。又Ｐ81柱穴はＳＢ018.019建物が共有するが、柱根はＳＢ018建物のものであり、ＳＢ018建物が後出する。次にＳＢ016建物Ｐ73とＳＢ017建物Ｐ77の切合い関係からＳＢ016建物が後出している。このことからＳＢ014～019建物の関係は



ということが言え、建物は3～4回の建て替えがなされている。

掘立柱建物跡の約85％の柱穴には、柱根、横木、枕木の建築材が残っている。柱根は丸太をそのまま用いるものもあるが、遺跡が軟弱な地盤にあり、柱の沈下を防ぐため柱の下面にくり込みをつくり、横木を渡し支えるものや、さらに横木の下に枕木を敷くものがある。こうした例は、大阪府瓜生堂遺跡[1]、福岡県伊佐座遺跡[2]、三日月町土生遺跡[3]、赤司遺跡[4]、それに竹地区の

利田柳遺跡Ⅲ区[5]、Ⅴ区、川寄若宮遺跡Ⅲ区、Ⅳ区、こだかじま遺跡がある。

これらの遺跡の中で建物の時期が判明しているものは、瓜生堂遺跡、土生遺跡が弥生時代中期、伊佐座遺跡が弥生時代後期、赤司遺跡が古墳時代前半の建物である。竹地区内の建物は、柱穴から弥生時代中期～後期の土器が出土し、その頃の建物ではないかとされるがはっきりした結論は出ていない。このように柱根の下にくり込みをつくり横木を渡す柱の初現は、弥生時代中期に見られ、古墳時代前半までは続いているようである。

さて川寄吉原遺跡の掘立柱建物の時期は、柱穴から弥生時代後期の遺物が出土しており、弥生時代後期の建物と言うことができる。ただＳＢ012建物は、３間×２間の総柱の建物で、柱穴が広く、柱根が大きい。又建物の桁行が天平尺（１尺＝29.5cm）の27尺にほぼ相当することから、時代の下がる建物としての検討も必要である。

しかし建物の配置関係や、ＳＢ012建物と重復する建物がなく、他の建物との時間的な隔たりが考えにくい。梁行が天平尺の長さに相当しない。柱の裾方が他の建物と同じであり、柱穴からの出土遺物は弥生時代後期の遺物しか出土しないなど、ＳＢ012建物を時代の下がる建物とするには否定的な要素が強い。

弥生時代の掘立柱建物の調査例は、増加している。牟田辺遺跡[6]、千塔山遺跡[7]では竪穴住居址と共に出土しており、掘立柱建物は高倉的な建物が考えられる。これに対し、今回の川寄吉原遺跡の建物は、高倉の他に高床住居的な建物も含まれると考えられる。川寄吉原遺跡は低湿地帯であり、当時においても、川寄吉原遺跡と利田柳遺跡Ⅴ区との間は、城原川水系がいりくんだ沼状になっていたと考えられ、このような地理的環境が、独特な高床形式の住居形態を造り出したものと言える。

遺物は土器、鐸型土製品、石器、木器がある。土器はＳＥ004.007井戸とＢ～Ｃ間の黒褐色泥質土中からまとまって出土した。器種は甕、鉢、壺、高杯、器台の他、鍋型土器、粘土帯状土製品があり、時期は弥生時代後期前半が主体をしめている。この中でＢ～Ｃ間の黒褐色泥質土から出土した瀬戸内系土器（第26図121）は注目される。口径18.2cmの甕で、頸部を「く」の字状に屈曲し、端部を肥厚させ、２本の浅い凹線をめぐらしている。北九州から弥生時代後期の瀬戸内系土器の出土は、福岡県三雲遺跡[8]より上東、酒津系土器が出土しているが、県内からの出土例はない。

特異な器形として鍋型土器（第19図55）、粘土帯状土製品（第28図163.164）がある。鍋型土製品は一般的な甕を半裁し、底を袋状に仕上げたものである。内面には赤色塗料が残り、外面は煤が付着している所から、赤色塗料を解かしていた容器ではないかと見られる。粘土帯状土製品は、粘土塊を帯状にし焼成したものである。同じ形状をした石製品も出土しているが、用途は明らかでない。

瀬戸内系土器とともに注目されたのが、鐸型土製品である。竹地区内の遺跡からは、川寄若

宮遺跡から2例、利田柳遺跡から1例、そして今回報告の川寄吉原遺跡から1例[JE9]の計4例の鐸型土製品が出土している[JE10]。特に川寄若宮遺跡出土の土製品は、鈕や舞孔に相当するものを備えており、明らかに銅鐸を模倣したものといえる。川寄吉原遺跡出土の土製品は、鈕や型持孔はないものの、舞の部分に孔があることは、土製品の用途が釣り下げて使用するものであり、又土製品の表面に線刻された文様が、銅鐸に表わされた文様と類似するなど、鐸を模倣して製作された土製品と言うことは言える。

さて土製品の表面に線刻された文様は、中央に人物像を、その両側に動物像を描いている。人物像は右手に戈か剣状のものをかかげ、左手に楯状のものを持っており、武人像と見られる。同じような文様は、天理市石上の流水文銅鐸の鈕にある戈と楯を持つ人物像に類似している。又人物の両手に持つ武器は、両側に描かれた動物との関係から、銅鐸に画材とされる狩猟文様と解釈することもでき、右手に持つものを弓、左手に持つものを矢とすることができるが、弓にするには弦がなく戈か剣と楯とする方が適当である。弓と刀剣と楯を持つ人物と動物を表わした例は、4世紀のものとされる群馬県出土の狩猟文鏡がある。これは内区に鹿と人物との狩猟文様を、外区に楯を持ち刀剣をふりかざす人物像を配している。文様構成からすれば共通する所があり、土製品の文様は狩猟の捕護を祝い、舞う狩人の姿と見ることはできないだろうか。

註

(1) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡」1973

(2) 九州文化総合研究所編「安国寺弥生式遺跡の調査」1958

(3) 木下巧編「土生遺跡群」『佐賀県文化財調査報告書第37集』佐賀県教育委員会1977

(4) 木下巧編「赤司遺跡群」『佐賀県文化財調査報告書第44集』佐賀県教育委員会1979

(5) 岩永政博編「利田柳遺跡Ⅲ区」神埼町教育委員会1980

(6) 天本洋一編「牟田辺遺跡第Ⅲ次」『多久市文化財調査報告書第3集』多久市教育委員会1978

(7) 中牟田賢治編「千塔山遺跡」基山町遺跡発掘調査団1978

(8) 柳田康雄編「三雲遺跡」『福岡県文化財調査報告書第58集』福岡県教育委員会1980

(9) 高島忠平「佐賀県川寄吉原遺跡出土の鐸型土製品の人物絵画」考古学雑誌第66巻1号1980

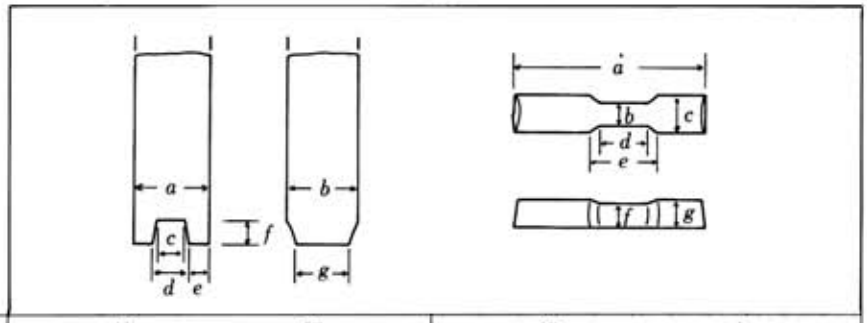
(10) 天本洋一、多々良友博「佐賀県川寄利田遺跡」日本考古学年報31 1980

第2表　掘立柱建物跡計測表

建物番号	建物規模	柱穴番号	柱穴 長さ	柱穴 幅	柱穴 深さ	建築材残存状況 柱根	建築材残存状況 横木	建築材残存状況 椀木	梁行	桁行	取上時番号
SB001	1間×1間	P 1	50	40	43				285		P－4
		P 2	58	42	41					275	
		P 3	58	52	41						P－6
		P 4	51	51	46					300	P－2
SB002	1間×1間	P 5	53	40	54	○			268	300	P－64
		P 6	95	91	38						
		P 7	89	78	52	○					
		P 8	65	52	44						P－65
SB003	1間×1間	P 9	72	64	73	○			303	324	P－66
		P10	94	58	73	○					P－8
		P11	72	40	66	○					P－67
		P12	120	80	55	○			297	354	P－68
SB004	1間×1間	P13	80	78	60		○		283		P－13
		P14	91	72	52		○			376	P－3
		P15	90	65	67						P－11
		P16	112	68	46		○			345	P－9
SB005	1間×1間	P17	83	75	56				197	287	P－58
		P18	67	65	45		○				
		P19	70	62	45	○	○				P－84
		P20	59	48	45	○	○				P－29
SB006	1間×1間	P17	83	75	70				300	360	P－58
		P21	78	63	54						P－12
		P22	99	66	69						P－15
		P23	80	80	50						P－16
SB007	1間×1間	P24	82	73	52		○		235	316	P－14
		P25	104	65	45	○	○				P－70
		P26	77	68	51		○			334	P－26
		P27	62	62	50		○				
SB008	1間×1間	P28	130	88	46		○	○	265	310	P-17·P-18
		P29	90		43	○	○				P－86
		P30	125	100	61	○	○		250		P－22
		P31	135		56		○			330	P－59
SB009	1間×1間	P32	58	48	49		○		214		P－19
		P33	70	60	42	○	○			294	P－20
		P34	67	62	46		○		226		P－22
		P35	78	72	37	○	○			284	P－21
SB010	1間×1間	P36	120	76	59				300	375	
		P37	135	72	55			○			P－23
		P38	72	72	60		○				P－33
		P39	135	80	63		○	○			
SB011	1間×1間	P40	105	68	47		○		250		P－28
		P41	85	66	56		○			272	P－24
		P42	97	70	53	○	○				P－32
		P43	86	70	52		○		262	284	P－31

建物番号	建物規模	柱穴番号	柱穴 長さ	柱穴 幅	柱穴 深さ	柱根	横木	桷木	梁行	桁行	遺物取上時番号
SB012	2間×3間	P44	152	122	94	○	○		400		P-71
		P45	125	90	84	○	○			820	P-73
		P46	140	122	69		○				P-75
		P47	175	110	77		○				P-48
		P48	80	80	28		○(そばん 壁板)				
		P49	64	56	36		○(〃)				P-74
		P50	98	71	44		○(〃)				P-76
		P51	108	75	52		○(〃)				P-78
		P52	156	125	91	○	○	○			P-72
		P53	115	100	101	○	○			816	P-43
		P54	138	101	71		○	○			P-77
		P55	146	121	86		○	○			P-79
SB013	1間×1間	P56	82	62	51	○	○		170		P-54
		P57	(55)	(44)	42	○				205	P-83
		P58	70	63	53	○	○	○			P-81
		P59	(58)	(45)	33	○	○		194	230	P-96
SB014	1間×1間	P60	95	82	71				285	288	P-53
		P61	84	60	46						P-55
		P62	110	84	52	○	○				P-97
		P63	110	109	44		○		250		P-102
SB015	1間×2間	P60	95	82	71				304	440	P-53
		P64	105	80	76	○	○	○			P-82
		P65	90	60	72	○	○				P-101
		P66	105	60	69		○				P-98
		P67	101	70	47	○	○				P-99
		P68	118	64	45	○	○				P-100
SB016	1間×2間	P69	108	89	76	○	○		340		P-103
		P70	128	85	67	○	○			440	P-104
		P71	131	131	67	○	○				P-105
		P72	144	104	72	○	○				P-106
		P73	186	104	69	○	○	○		428	P-107
		P74	168	123	77	○	○		330		P-108
SB017	1間×2間	P75	124	94	83	○	○			515	P-110
		P76	100	78	78	○	○	○	305		P-111
		P77	89	84	76	○	○	○			P-112
		P78		83	66	○	○	○			P-113
		P79	94	80	82	○	○				P-88
		P80	120	66	66	○	○		320		P-92
SB018	1間×1間	P79									P-88
		P81	95	77	44	○					P-89
		P82		36	31	○					P-90
		P83	45	35	28	○			240	310	P-93
SB019	1間×1間	P79									P-88
		P81	95	77	44	○					P-89
		P84	67	61	53	○			280		P-91
		P85	87	70	43	○				330	P-94

第3表　柱根、横木計測表



建物番号	柱穴番号	柱根								横木							
		形態分類	a	b	c	d	e	f	g	形態分類	a	b	c	d	e	f	g
SB002	P 5	a															
	P 6																
	P 7	a															
	P 8																
SB003	P 9	b	152	132	68	82	33	21	112								
	P10	a	140	135													
	P11	a															
	P12	a															
SB004	P13									d	440	65	113	78	94	57	73
	P14																
	P15																
	P16																
SB005	P17																
	P18																
	P19	b	103	100	37	66	18	34	73								
	P20	c	122	111	31	73	28	35	60	d	344	44	75	52	63	39	48
SB008	P28									c	485	65	120	125	145	51	67
	P29	c	174	160	71	72	55	135	121	b	448	73	103	110	176	71	69
	P30	c	266	257	116	132	68	115		b	454	60	102	90	193	54	60
	P31																
SB011	P40																
	P41									c	390	65	93	86	154	49	51
	P42	c	132	124	75	85	24	60	20	d	330	39	101	52	97	51	58
	P43									c	330	57	96	84	117	49	50
SB012	P44	c	223	239						a	850	91	109	—	—	93	95
	P45	c	250	212	125	140	50	155	135	b	735	94	134	167	225	160	146
	P46									a	725		—	—	—	—	10
	P47									b	850	105	165	158	20	12	145

建物番号	柱穴番号	柱根								横木							
		形態分類	a	b	c	d	e	f	g	形態分類	a	b	c	d	e	f	g
SB012	P48																
	P49																
	P50									a	615	—	155	—	—	—	90
	P51									a	610	—	160	—	—	—	85
	P52	c	233	192	98	—	62	92	142								
	P53	c	171	167	57	79	48	76	125	b	615	98	126	—	210	85	
	P54																
	P55																
SB013	P56	c	168	191	71	78	44	77	90	d	485	69	116	117	170	60	62
	P57	c															
	P58	c															
	P59	c	141	136	65	86	35	53	104	b	454	39	74	—	142	47	45
SB014	P60																
	P61																
	P62	c								c	492	61	105	104	182	56	65
	P63									c							
SB015	P64	c								c	540	68	147	163	227	85	90
	P65	c	186	174	77	85	45	65	115	c	553	52	159	118	161	55	65
	P66	c								c	475	74	173	145	200	74	77
	P67	c								c	550	66	158	143	184	81	89
	P68	c	168	160	80	86	42	114	111	c	550	57	167	125	163	74	78
SB016	P69	c	183	176	92	100	42	34	—	d	378	70	125	130	165	61	64
	P70	c	204	196	93	97	53	52	141	d	352	73	125	101	127	79	83
	P71	c	190	202	92	99	45	52	145	d	448	75	112	157	197	59	68
	P72	c	197	192	94	97	52	63	134	d	550	79	138	175	194	64	70
	P73	c	176	180	89	98	48	56	125	d	453	82	123	158	108	65	74
	P74	c	188	195	93	—	54	55	148	d	450	65	140	158	187	76	107
SB017	P75	c	205	194	65	80	62	67	145	b	545	63	81	120	175	48	49
	P76	c	207	205	76	117	50	57	163	b	478	66	90	120	208	53	54
	P77	c	205	187	78	123	48	62	145	b	555	64	87	125	220	79	83
	P78	c	200	222	86	106	47	73	145	a	530	76	80	—	—	75	80
	P79	c	200	215	94	107	47	54	155								
	P80	c	206	214	59	128	45	40	156	b	475	72	88	110	222	58	76
SB018	P81	b	130	110													
	P82	b	111	109													
	P83	a	111	109													
SB019	P84	b	145	142													
	P85	a	160	141													
	P87	c	151	149	58	69	72	47	81	b	543	54	78	78	161	68	66

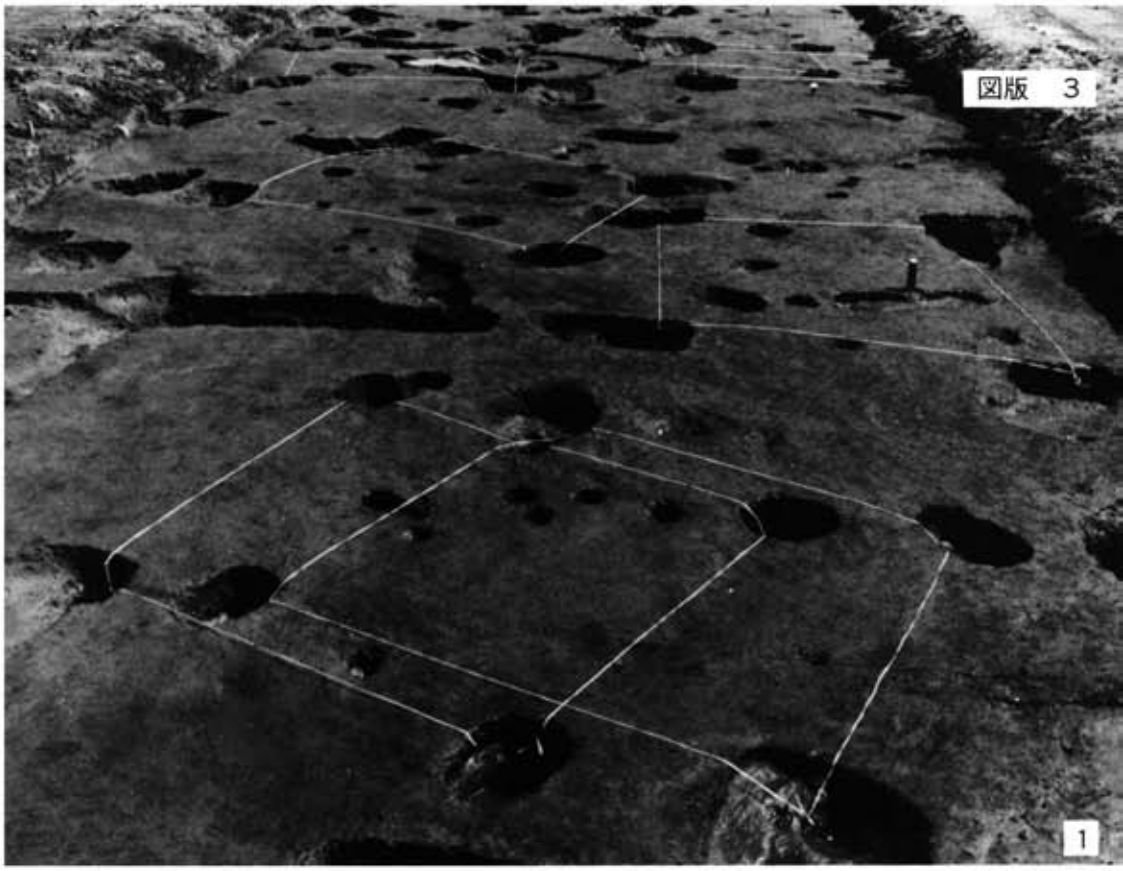
第36図　川寄吉原遺跡遺構配置図

図　　版

1．川寄吉原遺跡付近航空写真　　2．遺跡近景（南側から）

図版　2

1．川寄吉原遺跡全景（西側から）　　2．川寄吉原遺跡全景（東側から）



1．掘立柱建物跡近景　　2．SB001.002掘立柱建物跡

図版　4

1．SB003掘立柱建物跡　　2．SB004掘立柱建物跡

1．SB005.006掘立柱建物跡　　2．SB008.009掘立柱建物跡

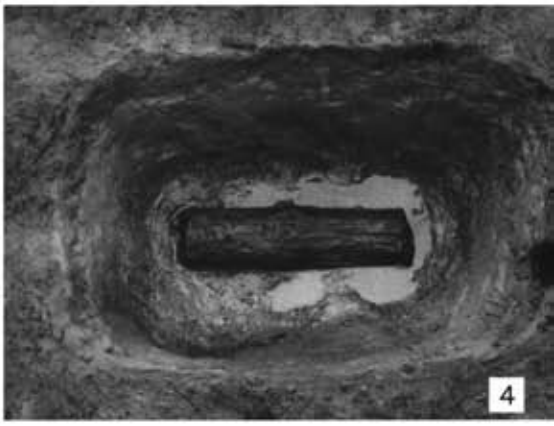
図版　6

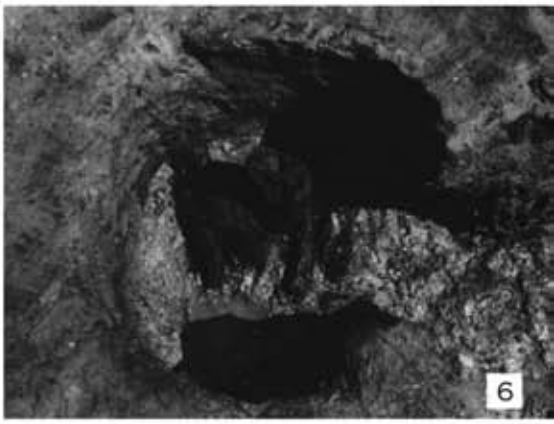
1．SB012掘立柱建物跡　　2．SB015.016掘立柱建物跡

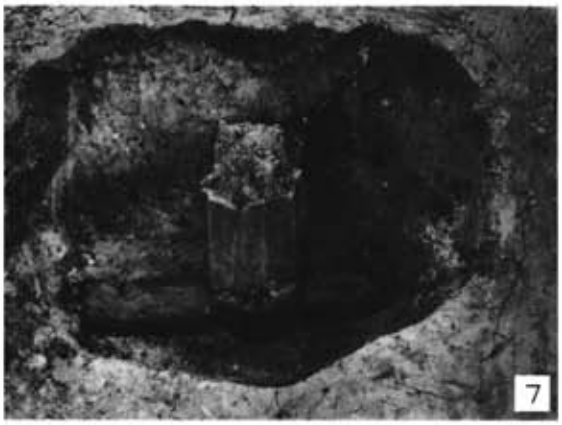
1．SB015.016掘立柱建物跡　　2．SB017掘立柱建物跡

図版 8

1．SB003建物　P12　2．SB003建物　P10　3．SB004建物　P13　4．SB005建物　P20
5．SB008建物　P28　6．SB009建物　P33　7．SB010建物　P38　8．SB011建物　P40

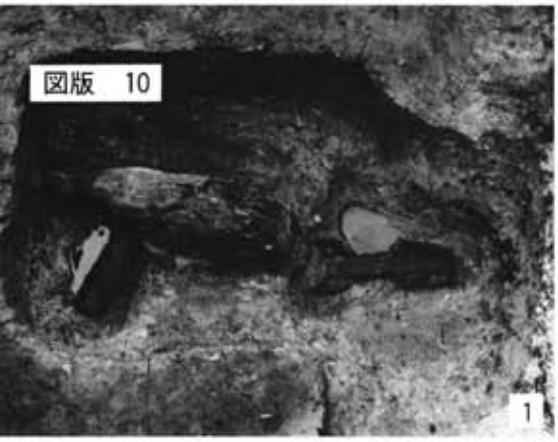


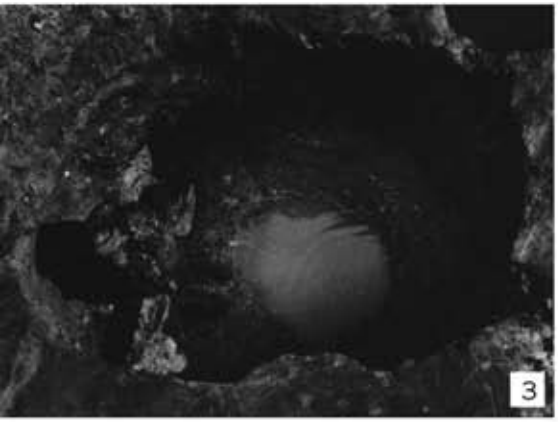




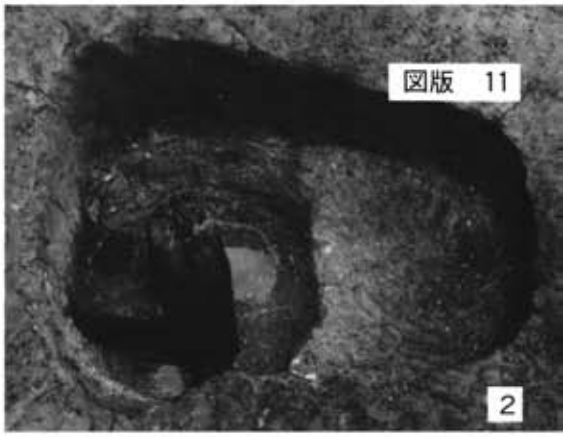
1．SB012建物　P44　2．SB012建物　P46　3．SB012建物　P47　4．SB012建物　P51
5．SB012建物　P52　6．SB013建物　P58　7．SB013建物　P59　8．SB013建物　P59

図版 10



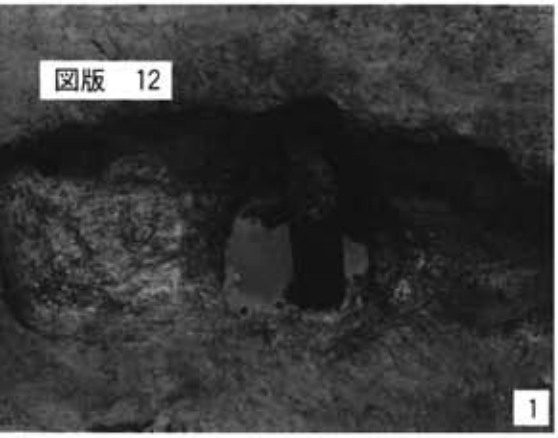


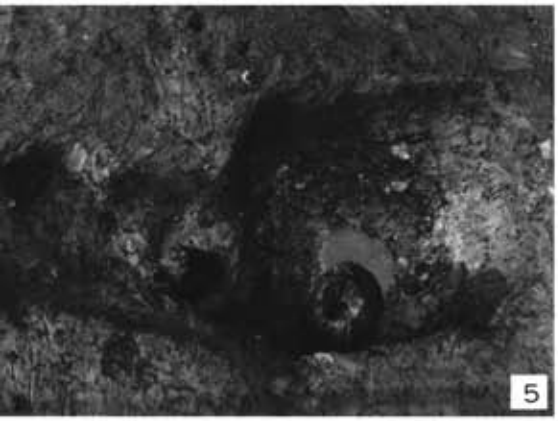
1．SB014建物　P62　SB015建物　P66（左）　2．SB016建物　P69　3．SB015建物　P64
4．SB016建物　P69　5．SB016建物　P71　6．SB016建物　P73　7．SB016建物　P71
8．SB016建物　P73



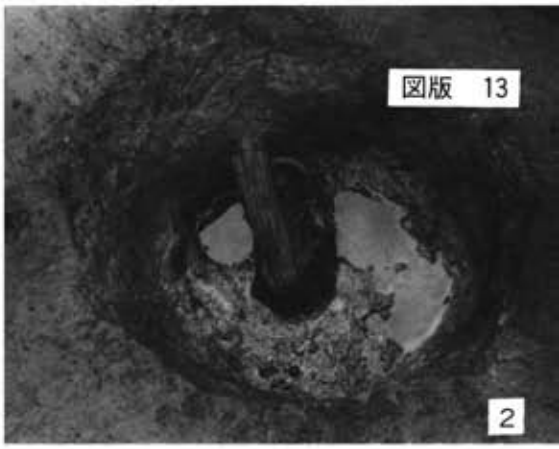
1．SB016建物　P74　2．SB017建物　P75　3．SB016建物　P74　4．SB017建物　P75
5．SB017建物　P76　6．SB017建物　P78　7．SB017建物　P76　8．SB017建物　P78

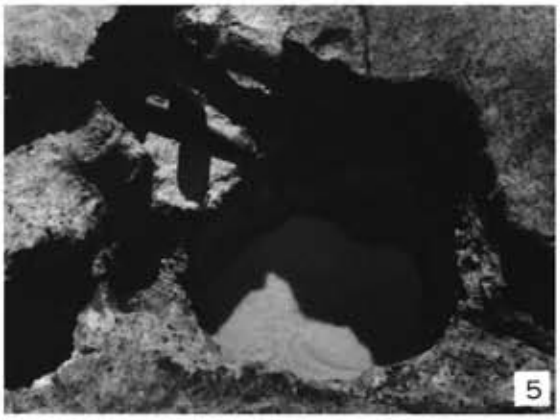
図版 12





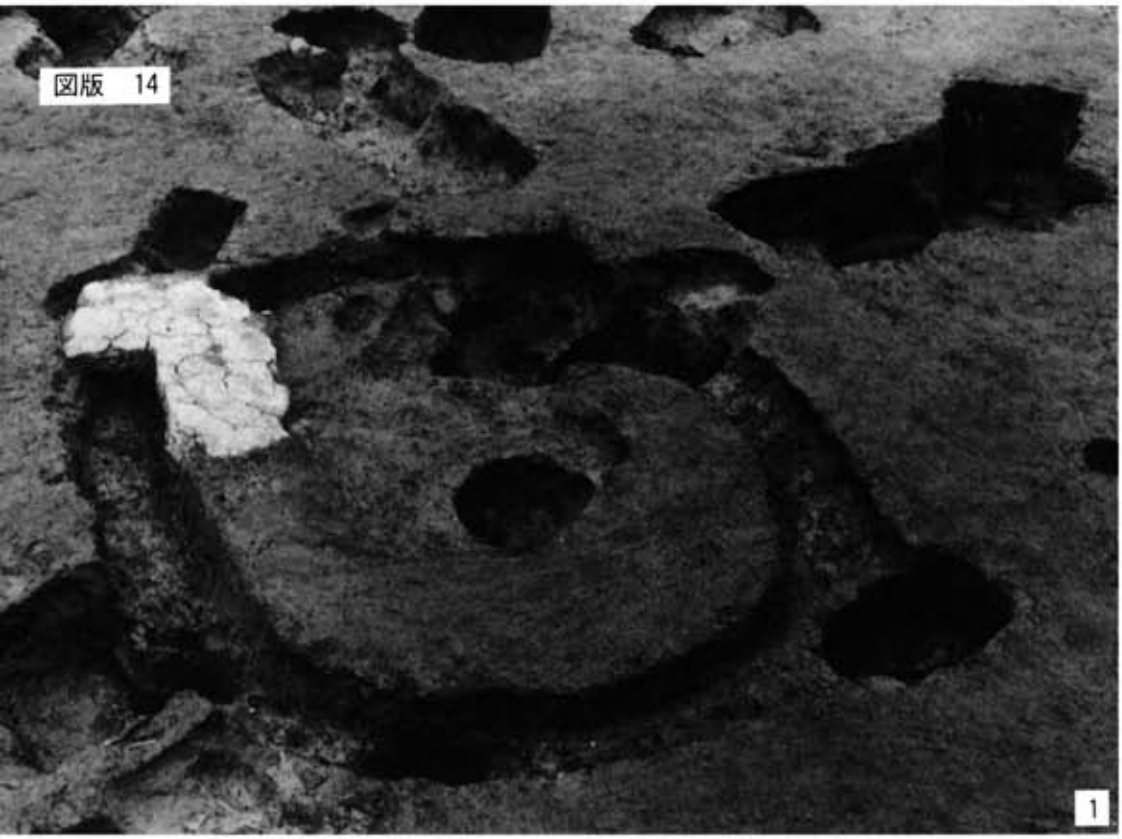
1．SB017建物　P79　2．SB017建物　P80　3．SB017建物　P79　4．SB017建物　P80
5．SB018建物　P82(左)．SB019建物　P84　6．SB019建物　P81　7．8　P86



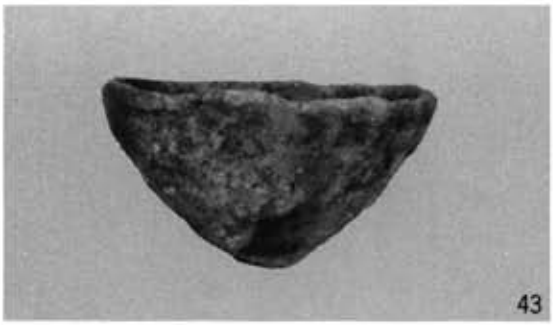


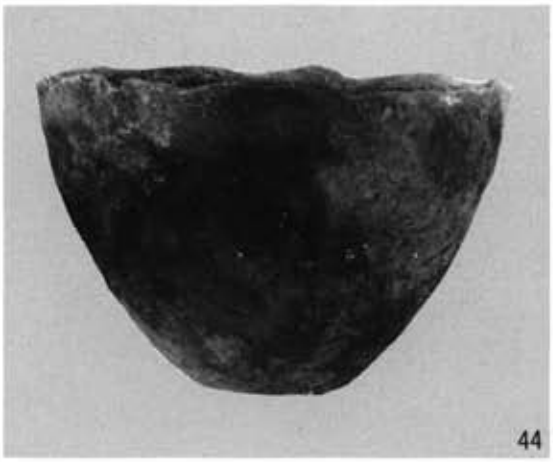
1．SE001井戸　2．SE002井戸　3．SE003井戸　4．SE004井戸
5．SE005井戸　6．SE006井戸　7．SE007井戸　8．SE008井戸

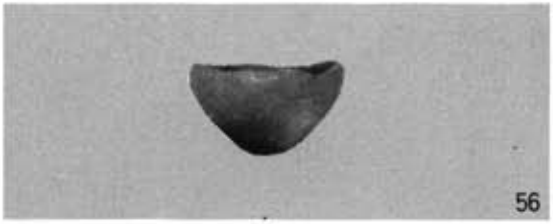
図版 14



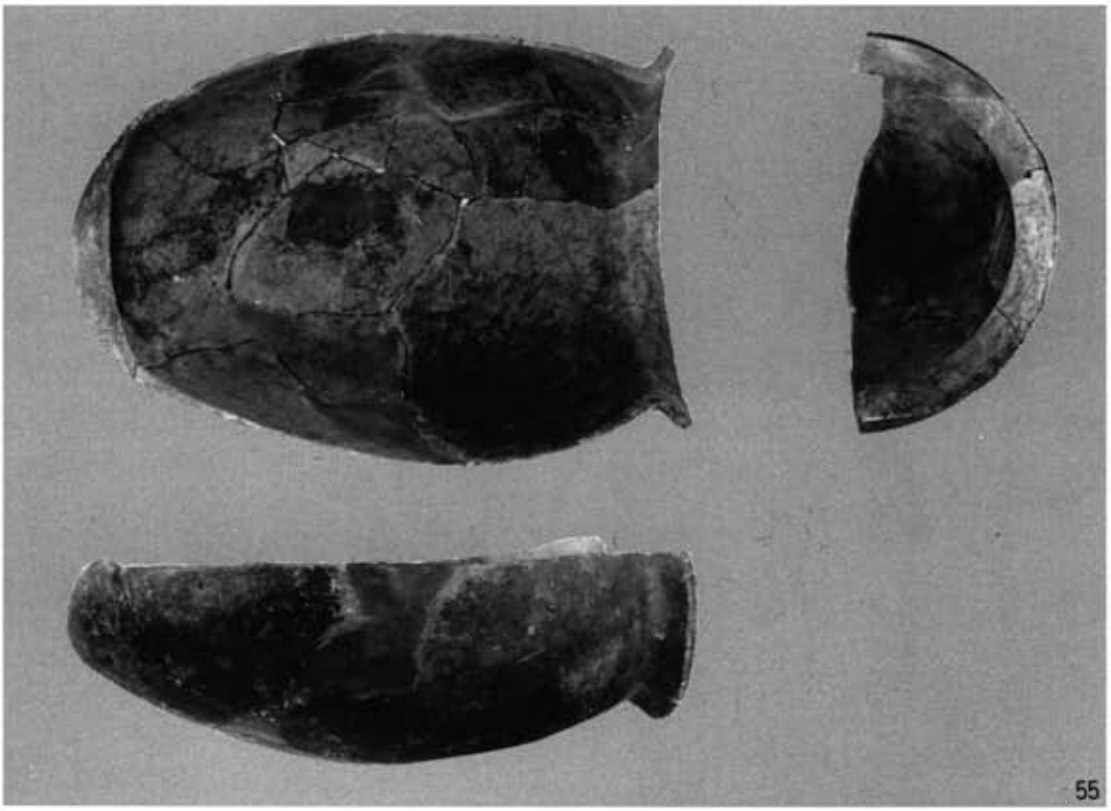
1．円形周溝　　2．B～C間落込み状態

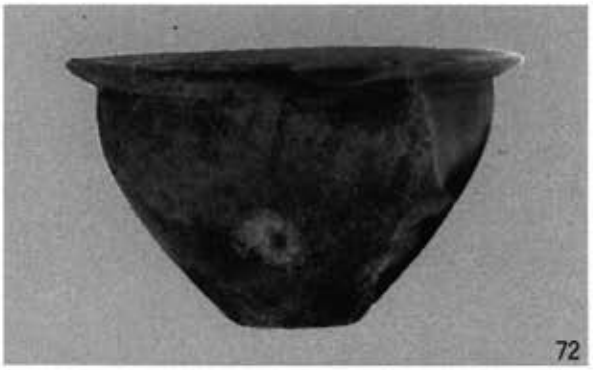




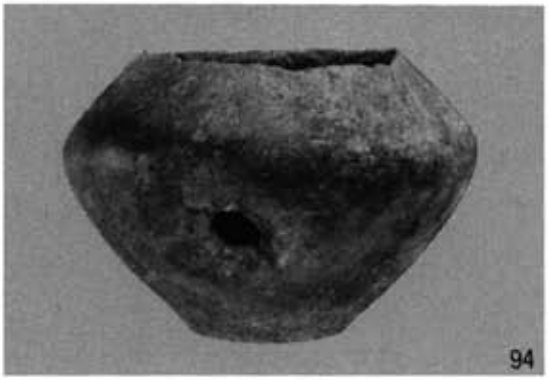


SE001井戸出土土器（41，43，44）　SE002井戸出土土器（51）
SE003井戸出土土器（54，56，57）

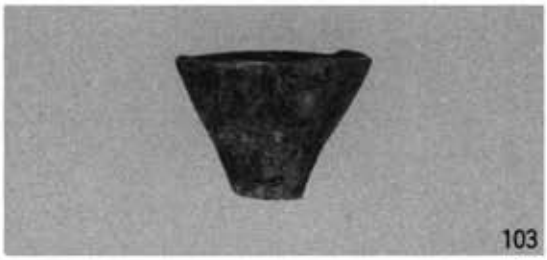




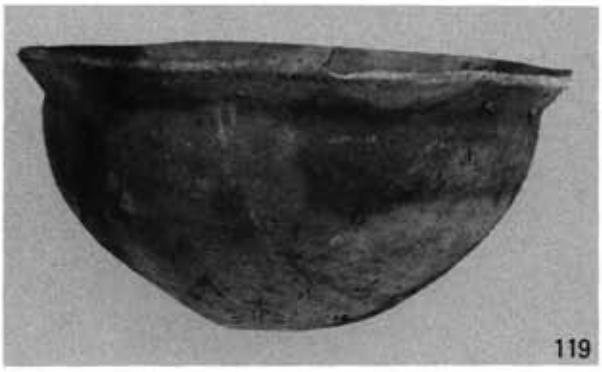
SE003井戸出土土器（55）　　SE004井戸出土土器（62．72．76）



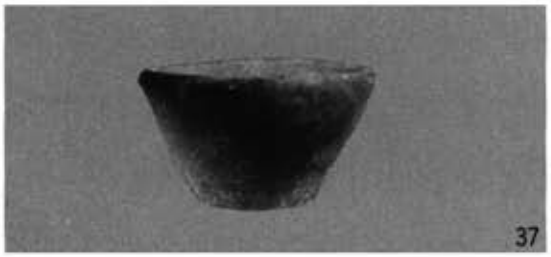
SE004井戸出土土器（81．82）　　SE005井戸出土土器（87～90．92．94）

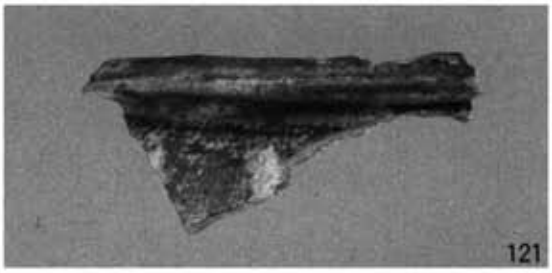


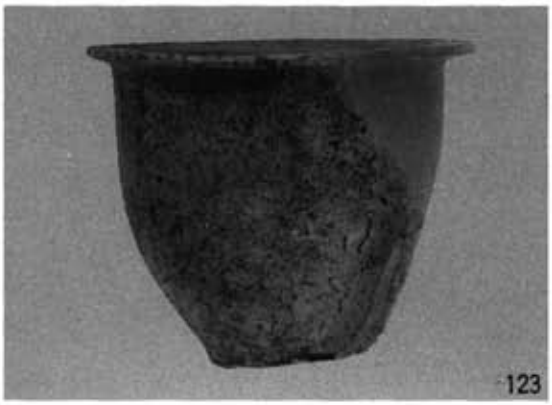
SE007井戸出土土器



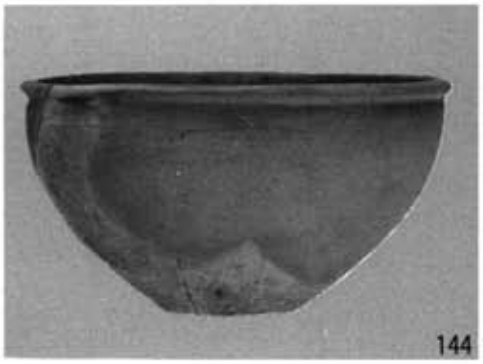
SE007井戸出土土器（112.113）　　SE008井戸出土土器（116.118～120）

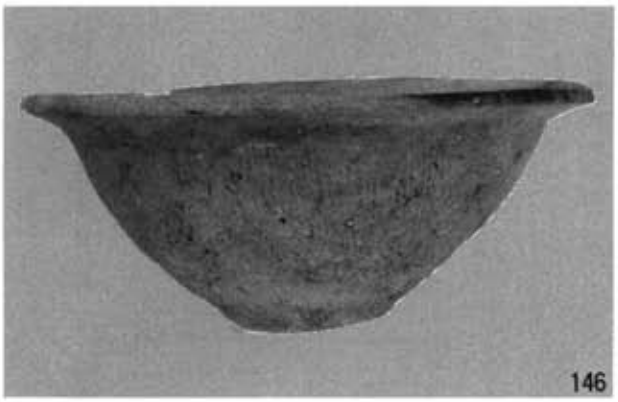




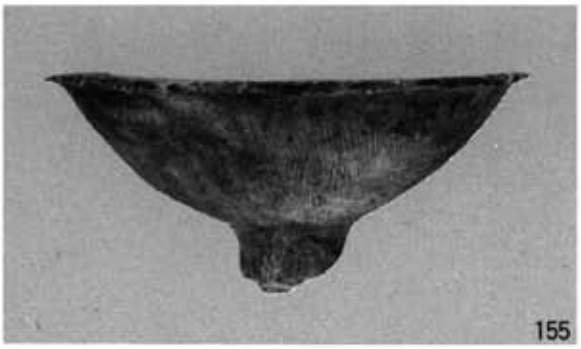


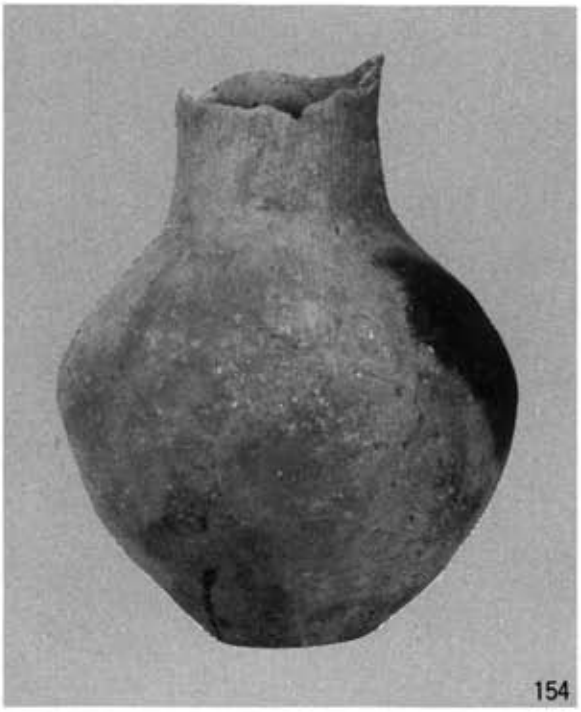
溝跡出土土器（33．36．37．40）　　B～C間黒褐色泥質土内出土土器（121～124）

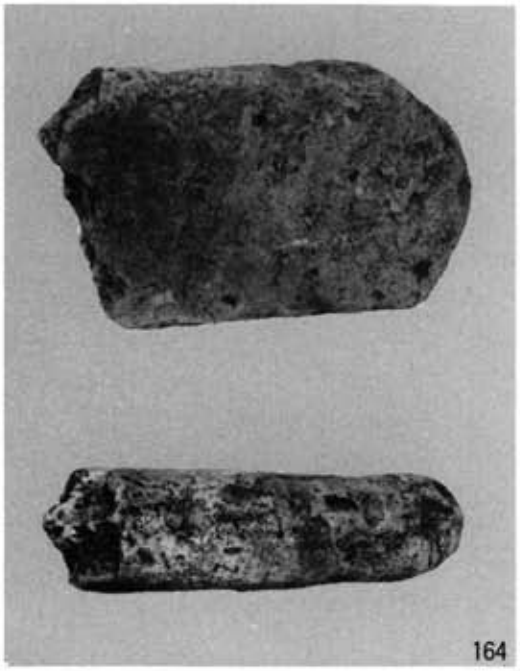


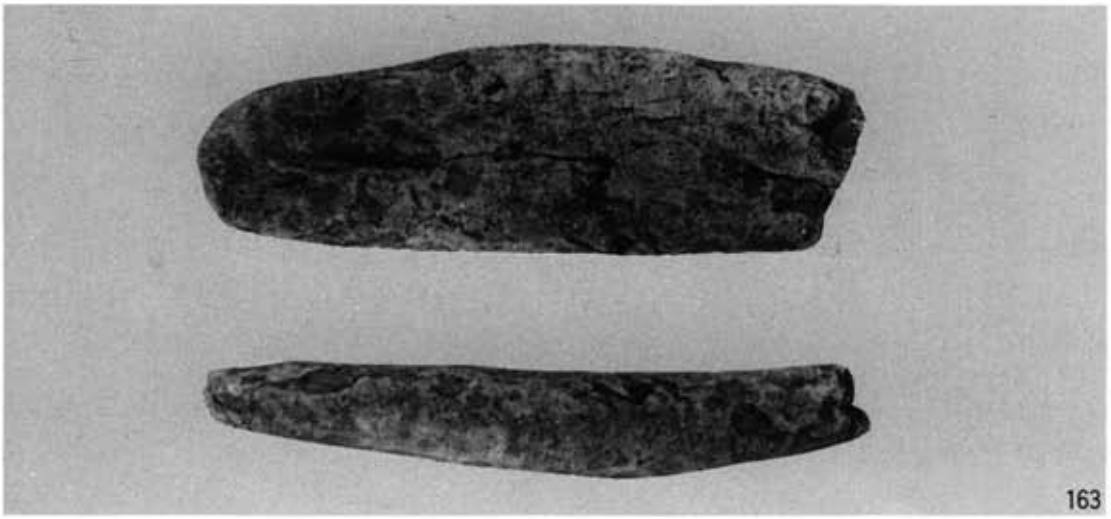


B～C間黒褐色泥質土内出土土器

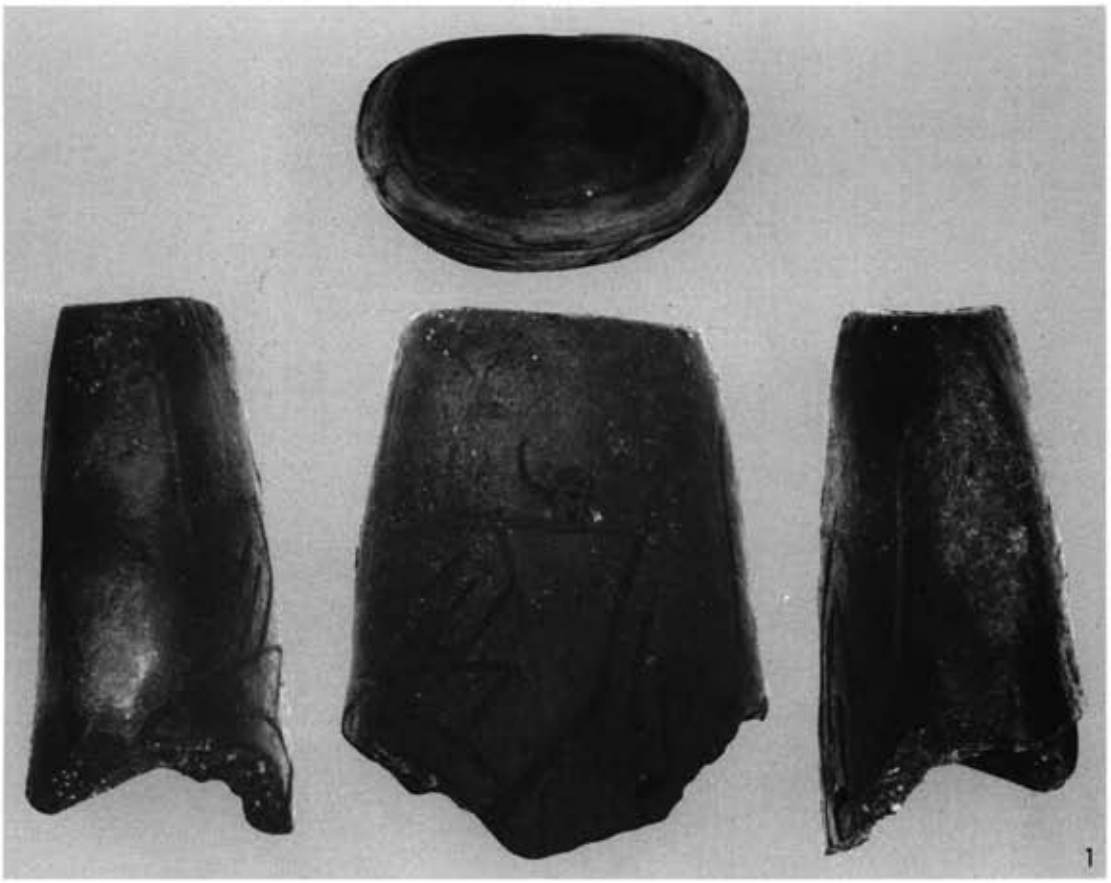


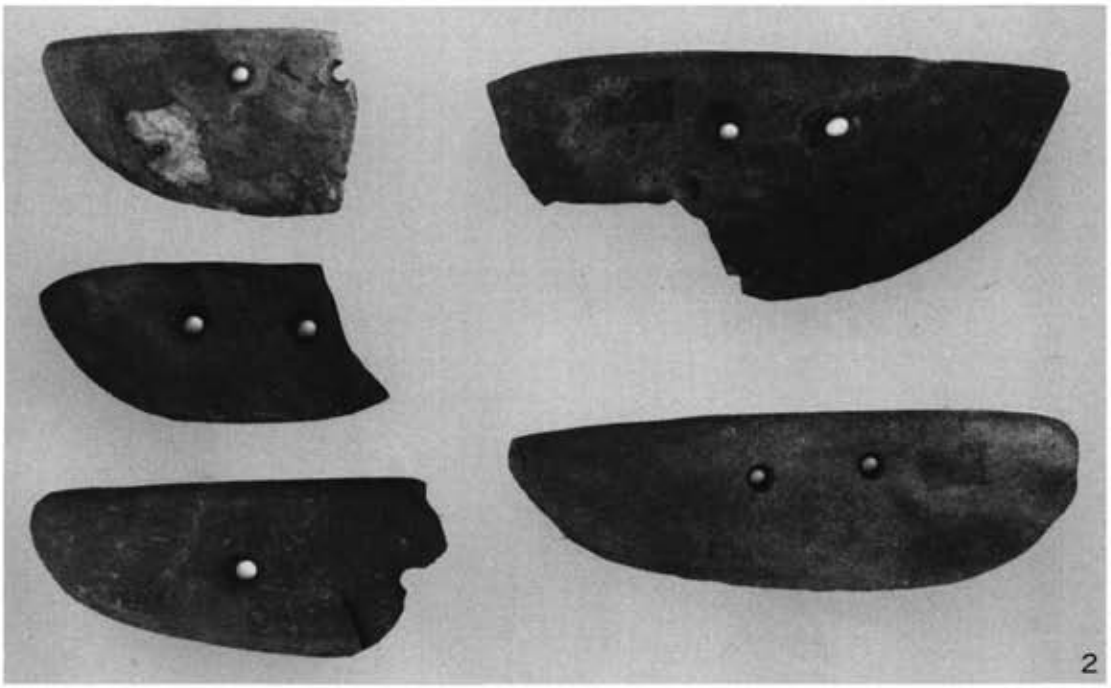






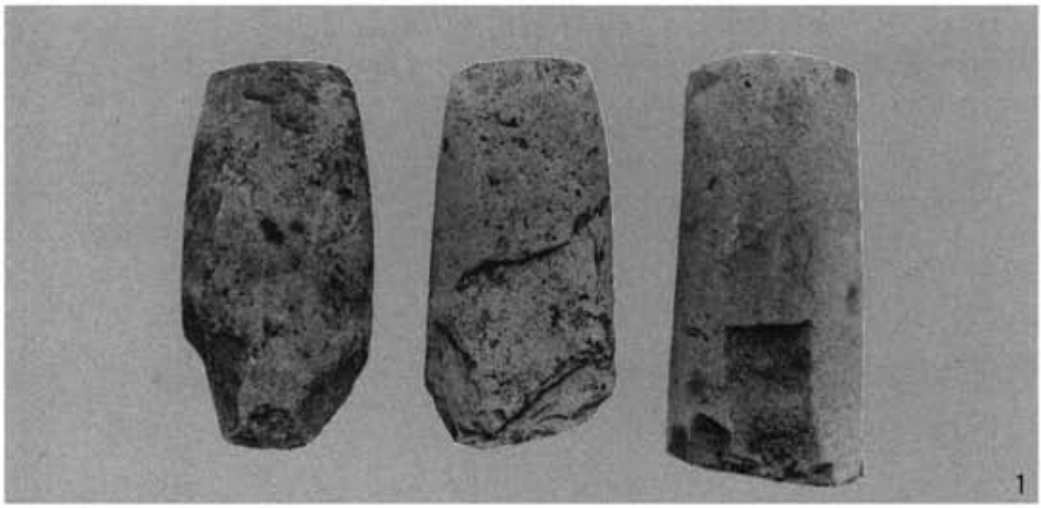
B～C間黒褐色泥質土内出土土器

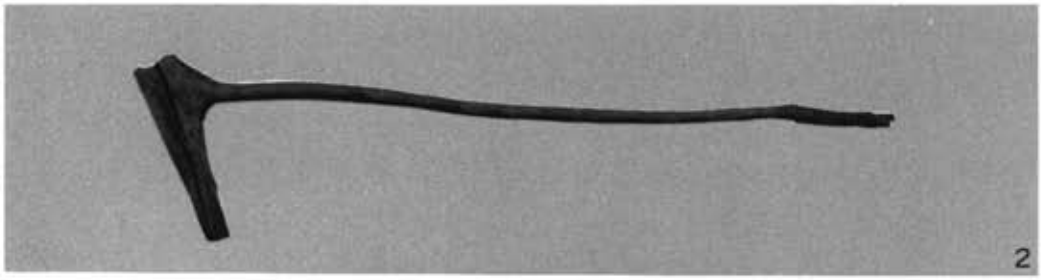


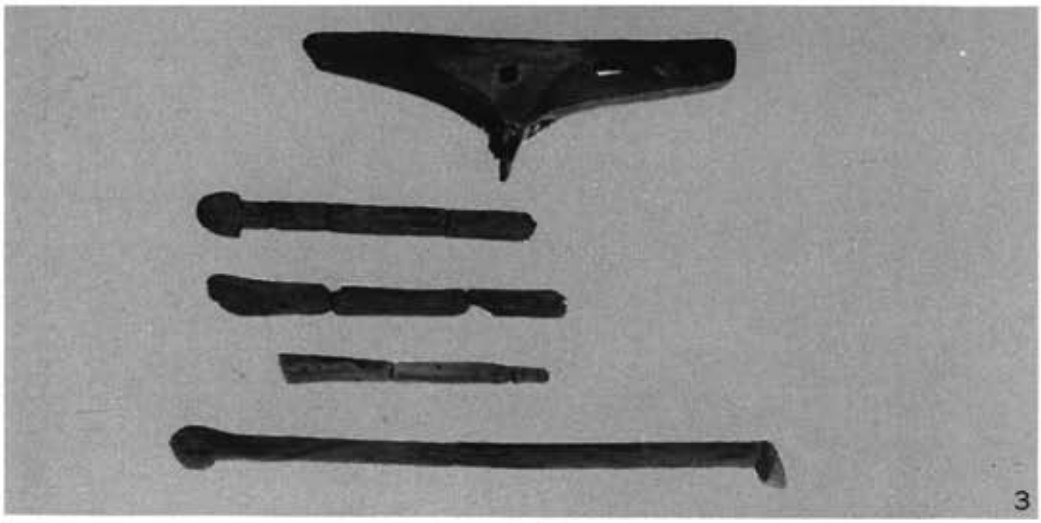


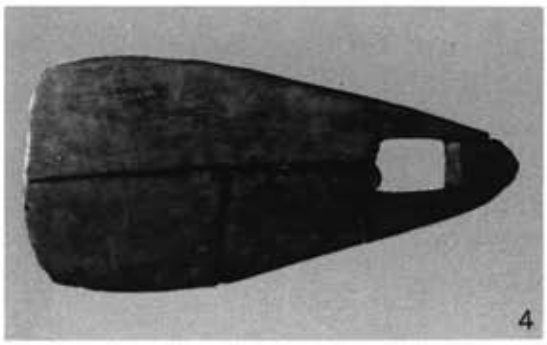
1．P86柱穴出土鐸型土製品　　2．石包丁

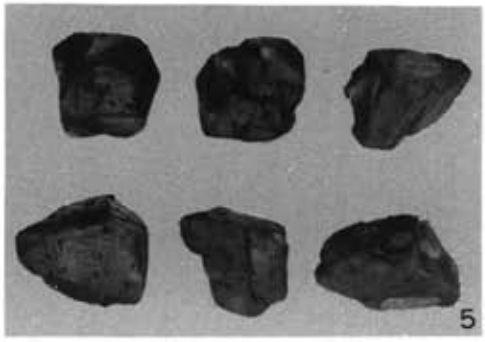
図版　24



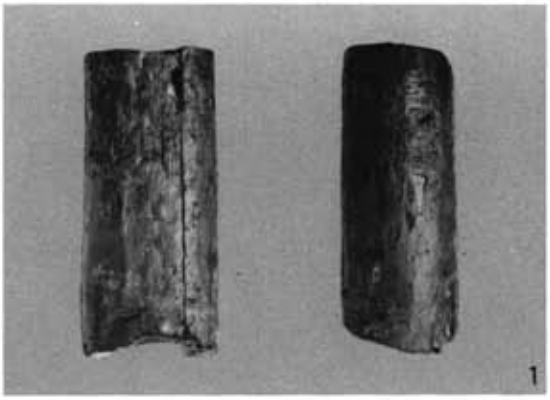


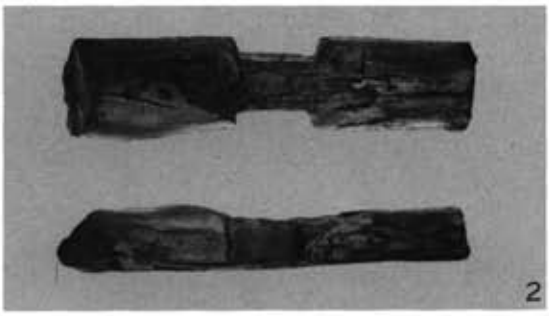


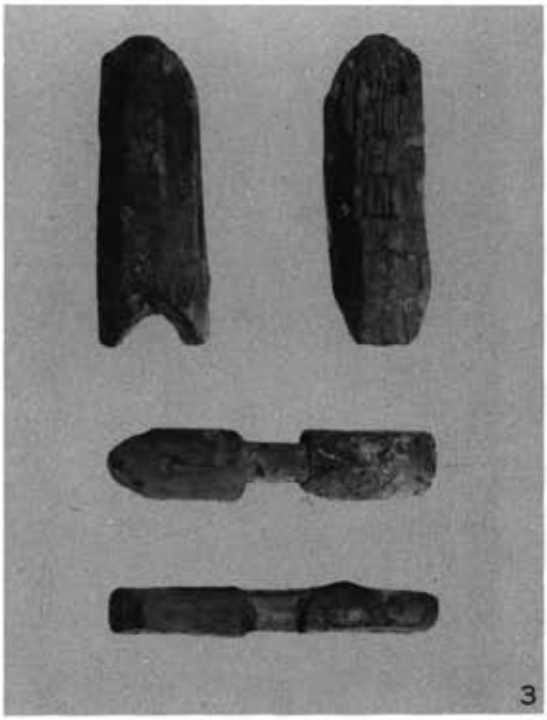


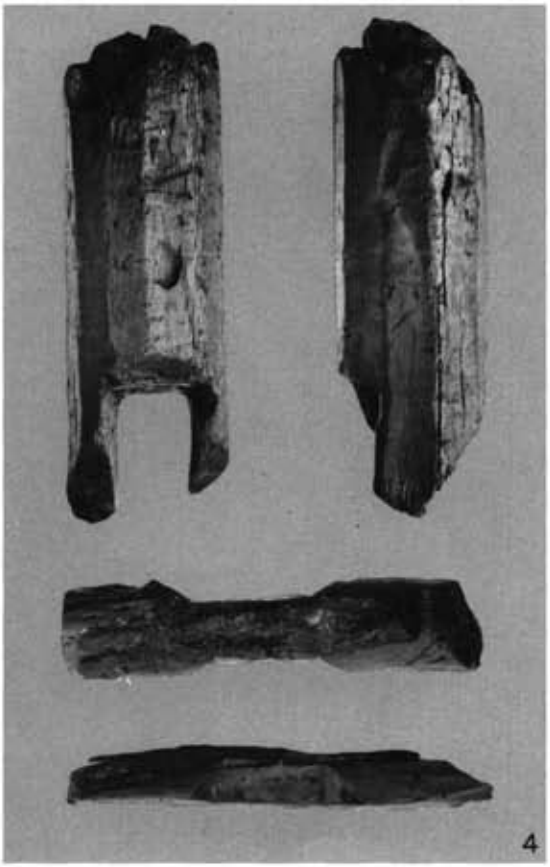


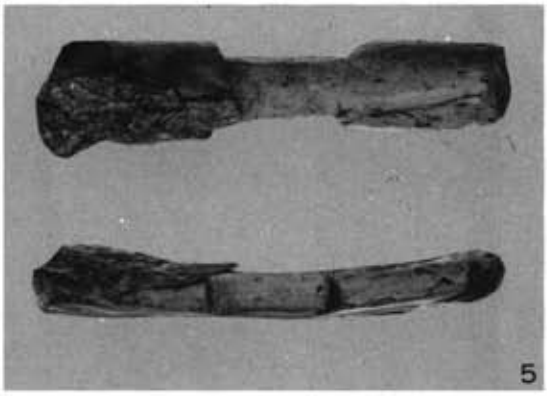
1．石斧　　2～5．SE007井戸出土木製品

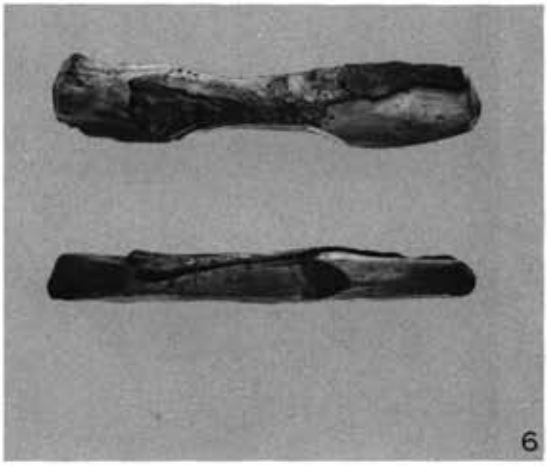




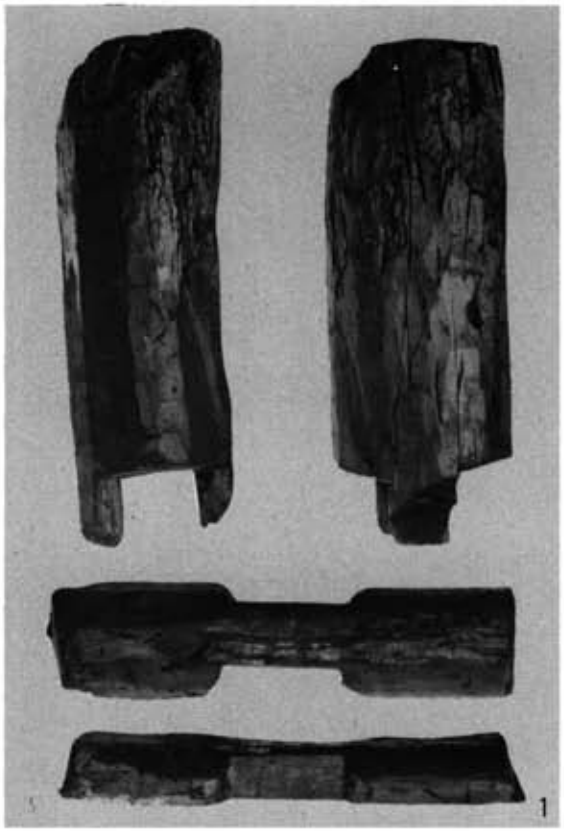


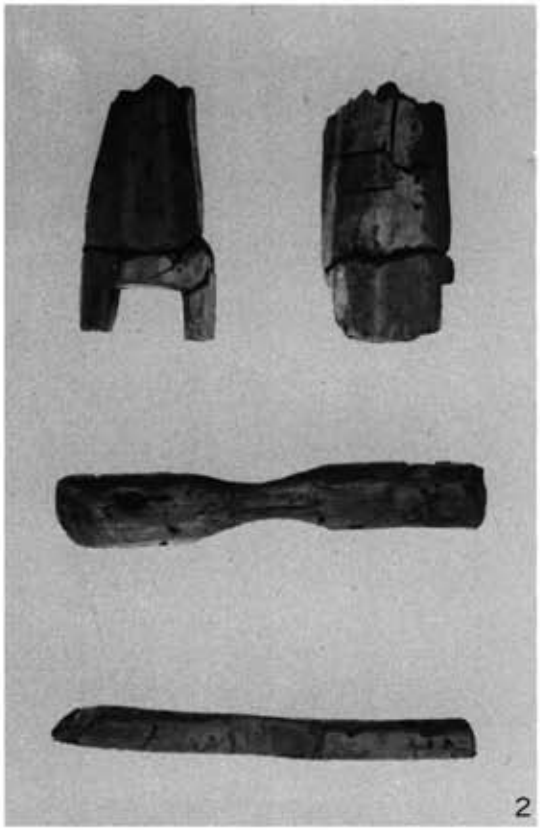


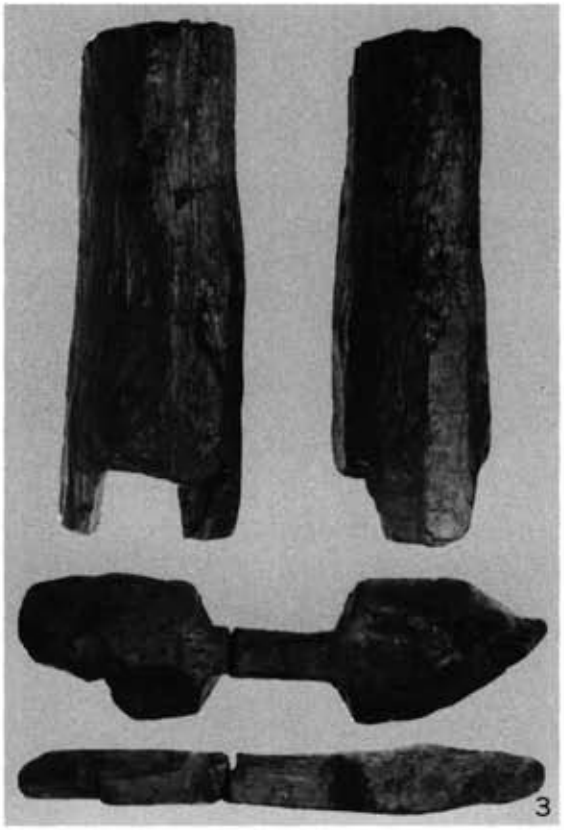


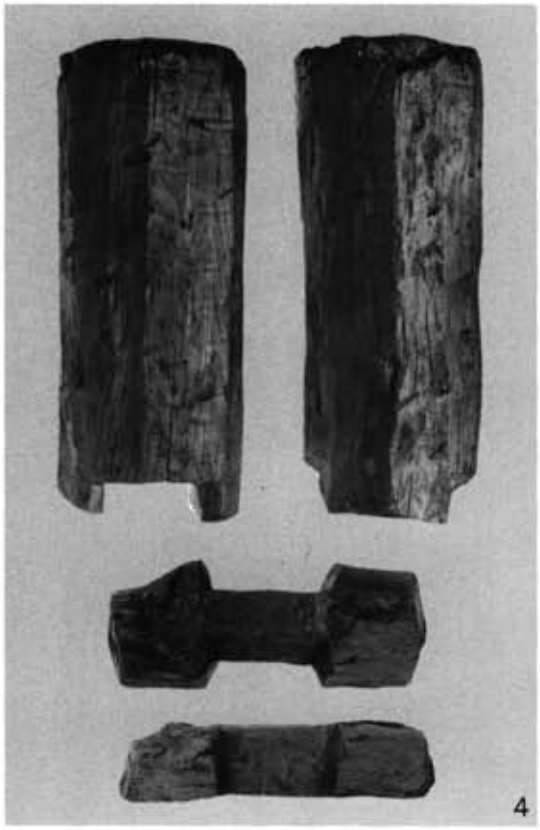


1．SB003建物　P 9　柱根　2．SB004建物　P13　横木　3．SB005建物　P20　柱根、横木
4．SB004建物　P29　柱根、横木　5．SB008建物　P28　横木　6．SB009建物　P34　横木

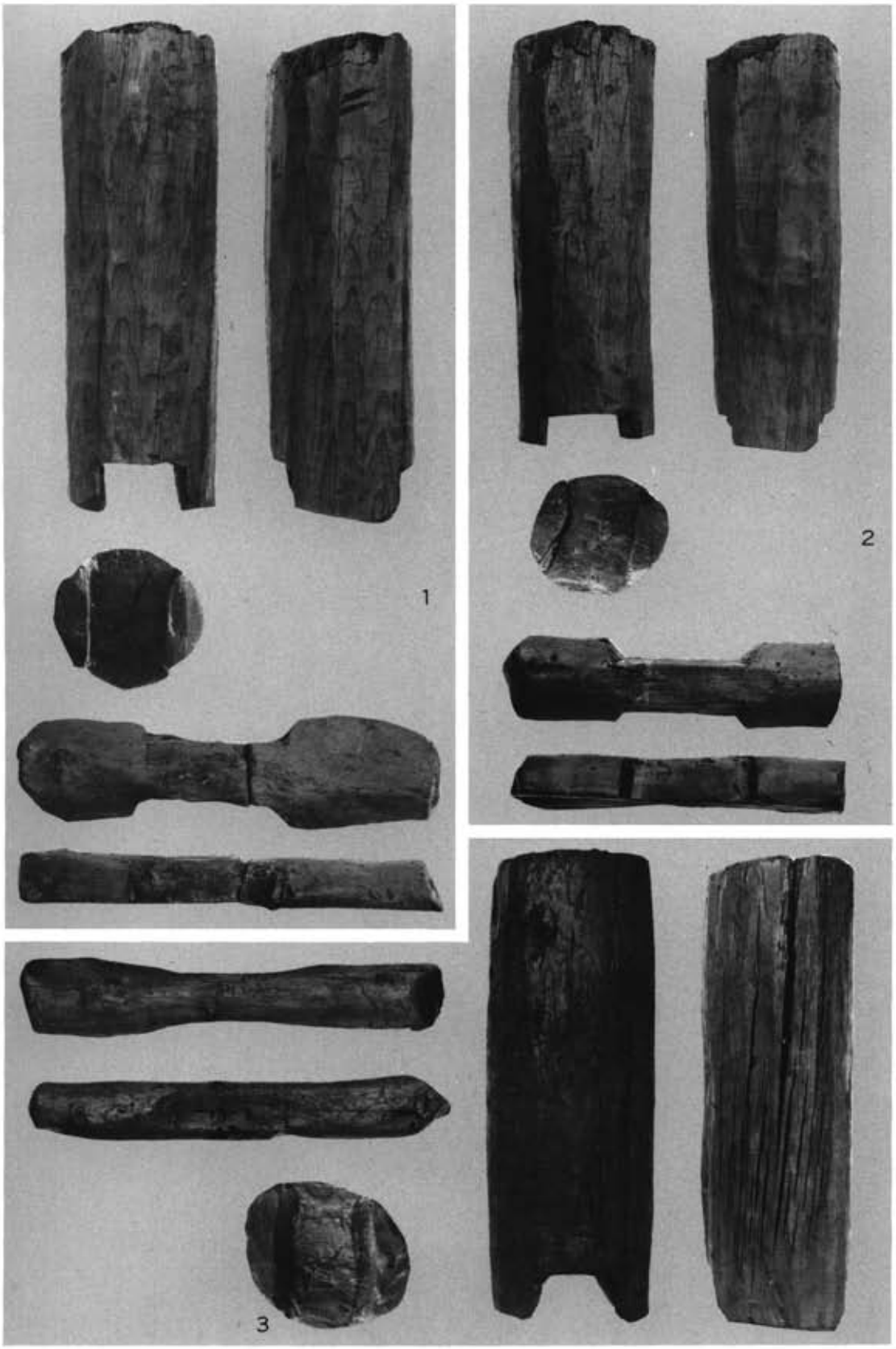




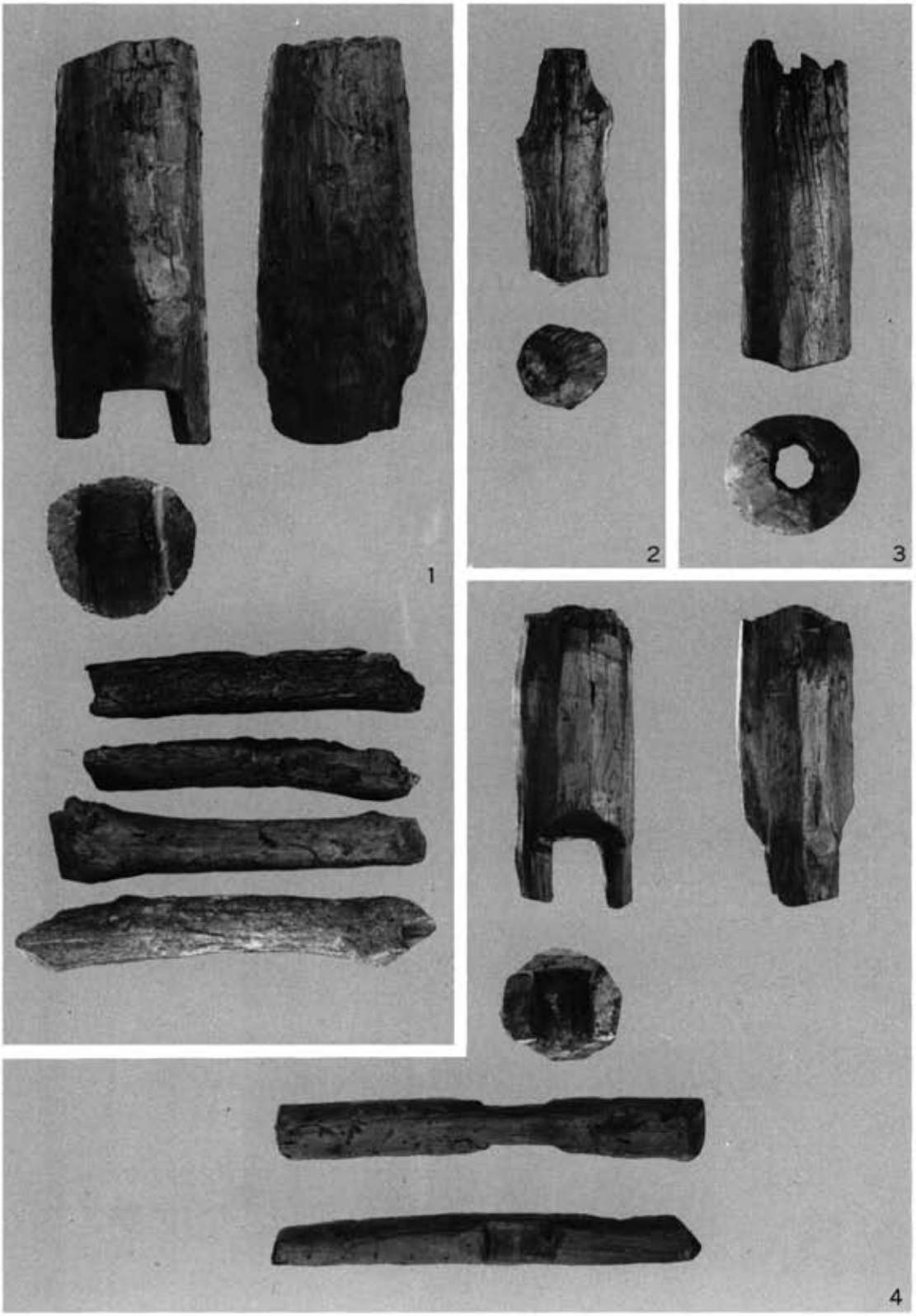




1．SB013建物　P56　柱根、横木　　2．SB013建物　P59　柱根、横木
3．SB015建物　P65　柱根、横木　　4．SB016建物　P70　柱根、横木



1．SB016建物　P72　柱根、横木　　2．SB016建物　P73　柱根、横木
3．SB016建物　P77　柱根、横木



1．SB017建物　P78　柱根、横木、枕木
2．SB018建物　P83　柱根
3．SB019建物　柱根
4．P87 柱穴　柱根、横木

佐賀県文化財調査報告書第61集

川寄吉原遺跡

昭和56年3月31日

発行　佐賀県教育委員会

佐賀市城内一丁目

印刷　福博印刷株式会社
佐賀市兵庫町修理田72の2